
十二世界の戦後史

次九なななな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二世界の戦後史

【Nコード】

N4920Z

【作者名】

次九ななな

【あらすじ】

意図せずして命を落とした十六歳の少年は即座に閻魔様の御前に引きずり出され……することも無く、幽霊としてこの世をさ迷う羽目になる。

道中、やたら恐ろしい気配をまとった少女やら、まったくやる気の無い魔王（他称）やらと関わる少年。気付けば死人のくせに厄介事の真っ只中へ。

しかし、その最中に訪れた生き返るチャンス！ のはずが本人はまるでその気無し。己の命もかえりみず、少年は何を望む？

「シ、シンヤが悪いんだから、ね。シンヤが 私を裏切ったりするから、だから」

それは女の声だった。登校中、不意に背後から聞こえてきた若い女の声。

僕は振り向いて声の主を確かめようとしたけれど、地面に崩れ落ちている体は僕の思うようには動いてくれなかった。それでも、なんとか首だけを動かして僕の心臓を抉^{えぐ}ってくれた女を視界に入れる。女子高生、だった。僕と同じ学校ではないけれど身に着けている制服には見覚えがある。どこにでもいるような、いわゆる普通の女子高生だ。刃物を握りしめていること以外は。

彼女は僕が見ていることに気付いた様子もなく、僕というよりは自分の目の前にかざしている血塗れの包丁に向かって話しかけ続けている。

「で、でも、大丈夫だよ？ あの女を片付けたら、私も、私もだから、ね？ ね？」

妙にうわずった気味の悪い声でそんなことを言うものだから、僕は最後の力を振り絞って、言っちゃった。

「い、や……僕は……シン、ヤなんて……名前、じゃないん………だけどな」

びくり、と体を震わせて、彼女はようやく僕へ目を向けた。その双眸はこれ以上ないというくらいに見開かれている。

僕、兎川遥^{とがねはるか}、公立北明時高等学校一年C組^{きたあかとき}、出席番号十七番は当然、人からシンヤなんて呼ばれることはない。僕にシンヤ的な要素は皆無だからだ。

では何故^{なにゆえ}この女子高生が僕をシンヤと呼び、その上刃物までねじ込んだかというと
間違えた。

ということなのだろう。多分、だけでも。

……間違えるか普通！？ よく分からないけど、要するに殺したいほど好きな恋人かなにかなんですよね！？ 失礼だけど、そんなだから裏切られるんじゃないのか、と思った。

まあ、人を刺すような精神状態の人に普通を要求するのも酷な話なのかもしれないけど。

でも、正常でなければ人様の心臓に風穴を空けても相手は死にません などということは無いわけで、あのなんだか締まらない台詞を言った直後、僕はとうとう力尽きた。

それを見た女子高生はここでもうやく自分が引き起こした事態を把握したのか、握りしめていた包丁をその手から取り落とすと、僕に背を向けて、一目散に逃げ出した。

……めちゃくちゃ足速いなあ、あの子。さっきも一撃で僕の心臓刺し貫いたし、最近の女子高生は特殊な訓練でも受けているのだろうか。どうでもいいけど。というか……なんだこれ？

さっき死んだんじゃないのか、僕は。

死んだ僕が走り去る女子高生を見送ってる理屈は……んー、それにしてもこの血を流して倒れてる人、僕にそっくりだなー。でもまあ世の中には似た人が三人はいるとか

やめよう。そもそも何に対する抵抗なのかも分からないし。

あー、これは……やっぱりあれ、なんですかね？ 僕はずつといない派で通してきたのになあ。いる派を通り越してなる派になるとはなあ。なる派？

いや、でも僕を見下ろしているこの僕は本当に僕なんだろうか？

……なんか、こんなオチの落語があったような。あーと、なんだったかな、確か

どうでもいいよ。なんでこんな時に落語について悩まなきゃいけないんだよ。どう考えても僕が悪いけどさ。なんで僕はいつもこう、隙あらば脇道にそれていくんだろうか。

まあ、こうやっていつも通りなんだから僕はやっぱり僕、なんだ

ろくな。

それにしても、この科学万能の時代に幽霊とは……
で、これからどうすればいいのさ？

信じがたい現実との対峙。幽霊の存在というそれは、しかしまだ始まりにすぎなかった。

恐ろしいことに幽霊という存在は浮いたり飛んだりということとはできないらしい。さらに言えば壁をすり抜けることもできないし、物を動かすこともできないし、人に乗り移ることもできない。この分だと人を呪うとかもできないだろう。する気ないけど。

そして、らしくないのはそれらだけではなく、姿形に関してもそうだった。

結論から言ってしまうえば生前から何も変わっていない。足は二本ともあるし、体は透けていないし、着ているのは学校の制服だし、刺された傷もないし、これじゃあ霊的なものが見える人が見ても幽霊だって気付かないんじゃないか、というくらい普通だ。

いや、見える人と見えない人がいる時点で普通とは言えないのか。そう、散々ブーブー言いはしたけれど、どうやらこの状態は？認識されない？という要素だけは備わっているようなのだ。

僕が死んだ時、周りには誰もいなかった。

あの場所は通学路ではあるのだけど、僕が登校する時間帯が他の生徒に比べてあまりにも早いことに加えて土地柄も地方の片田舎、車も人も絶対数が多くない。

僕は最初、自分が死んだ場所でじっと待っていた。

？お迎え？が来るのを。

なにせ幽霊だ。しかるべき裁きを受け、しかるべき世界に収まる……のかなあ？ という発想のもと、この方が相手にも分かりやすいそうだ、という理由で自分の死体に腰を下ろして待っていると、結構な時間が経過した後、遂にそれは現れた。

つまりは、警察の方々が。

まあ、来ますよね、そりゃあ。こーこー応法治国家ですし。過ぎた

時間を考えればむしろ遅いくらいだったけど、朝早かったしね。そういうえば誰が通報したんだろう？ あの子高生が自首でもしたのかな。

経緯はなんにしろ、警察の方々は結構な大所帯でやって来て、僕が間違いなく死んでいることを確認した後、いわゆる現場検証？ というような作業を始めた。

？僕？の存在には一切触れずに。

僕には彼らの姿が見えたし、声も聞こえた。しかし彼らには僕の姿は見えなかったし、声も聞こえなかった。認識されないのが当然。彼らは僕にぶつかり放題だったのだけど、それにも完全に無反応。触れることはできても小石一つ持ち上げることができない僕はそれに一切抗うことができず、地べたを這いずる羽目になった。

あれはどう考えても気付いた上で無視している、という様子ではなかった。

わざわざ確認するために現場の写真を撮っている人の前で自分の死体の上に乗る、「イエーイ」と言いつつピースサインまでしてフレームに収まったのだから間違いはないと思う。あれが気付いていない演技だったというのなら あの人達は完全に職業選択を間違えている。

……あの写真、幽霊の僕は写ってないよね？ 自分の死体の上でピースっていうのは心靈写真史上類を見ない残念な構図だろうな……もう少し方法を考えれば良かった。かなり今更だけど。

結局、警察は終始僕には気付かないまま、僕の死体だけを連れて引き上げていった。

その時に一緒について行くことはできたのだろうけど、そうする意味が見出せなかったの、僕は大人しく彼らを見送った。

？お迎え？なんて来ないな この頃にはもう、僕はそう思うようになっていたから。

別にあの世からの道案内と警察の仕事ぶりに何かしらの因果関係を見い出したわけじゃない。明確な根拠があるわけじゃ無いけれど

……ただ、あえて言うなら、やっぱり普通だからだ。見えないこと以外は。

そうして、これはどうもそういう感じではない、と決めつけた僕は、とりあえず家に帰ることにしたのだ。

僕がこうなったのは学校に行く途中のことではあったけれど、文字通り？死んでも学校に行く？なんていう真似をするほど僕の学習意欲は旺盛おうせいじゃない。

だから今、僕は来た道に戻り、駅に向かって歩いている。

幽霊のくせに、だ。

あー、ようやく駅が見えてきた。いつもとほぼ変わらないわりに異様に疲れた気がする。

……幽霊って、疲れるんですか？

駅のホームには思いのほか大勢の人がいた。

通学通勤ラッシュが本格的に始まる時間ではあるのだけど、それでも妙に多い気がする。

なにしろ、人が多いという状況は僕には都合が悪いので、できるだけ人が少ない乗り場を求めてホームの先頭へ向かった。

人も物も触れることはできても動かすことができない僕が混んでいる車両に乗ることは難しいだろう。となれば、僕が電車に乗るためには人は少なければ少ないほどいい。

どこかいい場所はないかなー、と歩いていたら、結局ホームの端まで来てしまった。だけど、その甲斐あつてと言うか、そこは改札付近の人ばかりとは対称的に閑散かんさんとしていた。一脚だけ置かれて五、六人掛けの長椅子の端に人が一人座っているだけだ。

この分ならなんとか乗れそうだと一安心して、僕は長椅子の空いている方の端に腰掛けた。幽霊が疲労を感じるという驚愕きょうおつの事実を知ってしまった今となつては、樂をすることになんの躊躇ためらいいもない。生前からそんなものはなかった気もするけれど。

「あーあ、しつかなんだろうな。これ」

頭の後ろで両手を組んで、体重を背もたれに預けながら、僕は改めて途方に暮れた。

なんとか家には帰れそうだけど、帰ってもできることがない。かあさんが帰ってくるまでばーっとすることしか。そして、かあさんが帰ってきてても、できることはないだろう。

「だあーもおーー、どうしろっていうんだよ!? この先ずっとこの状態でその辺をウロウロしなきゃいけないの? かんべー」
「もう少し静かにしてただけませんか」

……怖ええ。

僕がここに来る以前から椅子の隅に座っていた女の人が、すごい

目でこっちを睨んでいる。いや、見た目はすごく、こう　きれいな人なんだけど。でも、ものすごく怖い。

「……はい。すいません、でした」

恐怖のあまり思わず姿勢を正して謝ると、その人は無言で手元の本に視線を戻した。さっきまではまったく気にしていなかったけど、よくよく見れば僕と同じ学生、のようだった。

若干時代錯誤の感すらある黒を基調としたセーラー服に身を包んだ少女。その姿は無造作にまっすぐ伸びた黒髪とあいまって、なんだか良家のお嬢様のような風情を織りなしている。

多分、高校生だろう。雰囲気が高校に上がって半年程度の僕なんかとは比べ物にならないほど大人びている。これで中学生なら……お姉さんがいれば紹介して欲しい。

……別に中学生でも問題はないんじゃないか？　僕だってこの間まで中学生だったわけだし。まあ、どっちにしろ小心者の僕があんな美人　というより、女子にそんな理由で声をかけることなんかできないんだけどね。

なんだっけ？　シンヤ君？　とやらなら別なのかもしれないけど、恐らくは高校生の分際で二股だか三股だか百股だか知らないけど、まったく羨ませうまいま

「聞こえんの！？」

椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がりながら、おもいつきり声をかけてしまった。静かにしろと言われた直後に大声で。

当然、今はさっきよりもさらに鋭い視線に射抜かれているわけだけれども。

「いや、えと、あのですね？　その、なんで僕の声が聞こえるのかなーと思ったもので、つい。あーと、そうなんですよね？　聞こえてますよね？　見えても、います？」

睨んでるんだからそりや見えてるだろう、と聞いた後に気がついた。まあでも、そんなことはどうでもいいんですよ。それよりこれは　不幸中の幸い？　とでも言うのかな。

僕のことを認識できるってことはだよ？　つまりはこの人を介すれば、僕のことを他の人に伝えられるってことだよ。それができるなら、もうどうにでもなるような気がしませんか？　勝ったも同然ですよ。いや、よく分かんないけど。

……なかなか返答がないな、つてもうこっち見てないし！　あれ……？　もしかしてこの人、僕のこと幽霊だつて気付いてるわけじゃないのか？　ただの変な人だと思われてますかね？

困った、な。せつかくこの事態を打開できる兆しが見えてきたというのに、あつさりとそれを見失おうとしている。ここはなんとか誤解を解かないと。

……仮に誤解が解けたとしても、それはそれで面倒なことにならないだろうか？

幽霊、だもんなあ。そんなものに「やあ、どうも」なんて話しかけられたら……僕は即座に逃げ出す自信があるぞ。

むう……でも幽霊だつてことを信じてもらえない限りはその後に繋がらないんだよなあ。ということは結局そこはどうにかしないとイケないのか。ううん、難しそうだけど、とりあえずやってみるか。「あの、幽霊つていますか？」

「私に話しかけないで」
完つ全に初手を間違えましたね！　そりゃこうなるよ。何をやってるんだ僕は。

あー……これってまだ挽回できるのかなあ？　ええと、そうだ！　何か　言葉であれこれ説明するんじゃないで、見れば一発で僕が幽霊だつて分かる何かは……

無いんだよなーそれ。なんだよ、がっかりだな幽霊つて。それともあれなのか？　単に僕が幽霊界きつての落ちこぼれなのか？　はっ、壁抜けもろくにできねえとか、引くわー。という感じなのか？　そうなのか？

ってそんなことどうでもいいよ。なんで壁抜けできないとかっこ悪いみたいになってるんだ。むしろ気持ち悪いだろ、そんなことし

てる奴。僕が引く側だ！

いやだからそうじゃなくってさー。真面目に考えてくれよ僕。

幽霊っぽいところか……ううん、考えるって言っても見えない聞こえないを外すと残るのは？物を動かせない？だから、それに頼るしかないな。どうだろう、うまく伝わればいいけど。

「あ、あの、ですね？ 話しかけるなって言われたのにこんなことを頼むのは、無礼だと承知はしているんですが、しているんですけど、ちよつと僕のこと見てもらえませんか？」

黙々と本を読んでいた彼女は異様に恐ろしい雰囲気反して案外いい人なのか頼んだら普通に顔を上げてくれたので、僕はすかさず長椅子の背もたれに両手をつけて全力で押した。

もちろん、ぴくりとも動かない。僕が以前の状態で同じことをすれば特別どこかに固定されているわけでもないこの長椅子は、人が一人座っているくらいならある程度は動いただろう。

しかし、今の僕ではいくら力を入れようが一ミリたりとも動かさない。承知の上で僕は十秒程度、うぐぐ、と歯を食いしばって椅子を押し続けてから、彼女の方を向いた。

「えと、どうです、か？」

どうですか、って言われても困るだろう。やっぱり言うてから氣付いたけど。

案の定、訝^{いぶか}しげな視線を向けられた。かなり控えめに言っ何がしたいんだよこいつ。馬鹿じゃねえの？ といった感じだ。

どうしたもののか、と迷っていると、彼女は何か思い当たることがあったのか、あなた と呟^{しゅじゅん}いてから逡巡^{しゅんじゆん}し、続けた。

「この椅子を動かしたいの？」

「違います……」

やっぱりか。何も伝わらなかった。思った以上に難しいぞ、これ。僕はどこことなく威圧レベルが増した気がする彼女から逃れるように視線を外した。そして、その際に視界の端にとらえたもので、ふと思いついた。

「あ、じゃあ次。次できつと分かりますから。見てて下さい」
クイズかよ。まあ、でも実際そういう感じになっちゃってるんだ
けどさ。

僕は彼女に背を向けて小走りで目標に向かう。目指すは、僕らから少し離れた場所で電車を待っているサラリーマン風の中年男性。一人で立っている男性の下へたどり着くと、僕は背後からその人に抱きついた。

どれだけひいき目に考えたって、いきなり後ろから抱きつかれた人が完全ノーリアクションなのはおかしいだろう。ちよつとした騒ぎになってもいいくらいだ。相手が女性だったら彼女が問答無用で駅員を呼びに行っていたかもしれない。

これを見ればさすがに彼女もなんか普通じゃないな……って、もー！　また見てないしあの人……！！　なんの意味もなくおっさんに抱きついてる僕はなんなんだよ！

即座に男性から離れ、全速力で彼女の下へ戻るとその前に立って、言った。

「ちゃんと見ててくれました！？　見てなかったですよね！？」

「ええ」

「っ、見ててくださいって言ったじゃないですか……　なんで見てくれないんですか……」

「気味が悪いから」

くっそおおお！　反論のしようがない！

あー、これはもう万策尽きた、のかな。やっぱりねえ、無理だよねえ、幽霊、だもんねえ。仕方ない。これ以上迷惑かけるのも悪いし、ここはもう大人しくしていよう。

僕は、はあああ、と深いため息をつき、うなだれながら椅子の隅へ戻った。

先程と同じように身体を背もたれに預け、なんとなく空を見上げた。秋晴れと言うにふさわしい、澄みきった空。絵に描いたような清々しい朝だ。死んでさえいなければ。

「どうしたもんかね……」

思わず呟くと同時に、不意に視線を感じたのでそちらを見る。彼女が、僕を見ていた。迷惑かけないようにしようとした矢先に、これですか僕は。

「あ、はい、すみません……もうほんとに静かにします」

考えてみれば最初から迷惑かけっぱなしだもんなあ。ちゃんと謝った方がいいかな。

そんなことを考えていたら、意外にも彼女の方から口を開いた。

「あなた、結局何がしたかったの？」

「何がって言われると……こう、なんと云うか」

さすがにここでまた幽霊云々を持ち出す気にはなれなかった。言っても信じてはもらえないだろう、というのがもちろん第一ではあるのだけれど、それ以外にも理由はある。

この人の視線に　まあ大部分は不審で占められてはいるのだけれど　わずかに、心配するような気配が混じっている気がして、なんだか、それに対して幽霊がどうか答えるのは失礼に思えた。嘘をついているわけじゃないから構わない気もするけど。でも、する気にならない。

「僕のことを人に伝えて欲しいんです。僕の代わりに。それを、あなたに頼みたくて」

目的という点では、こういうことだろう。幽霊どうこうはあくまでこれをお願いするための前提であって、それ自体は別に重要なことじゃない。ただ

「……どうして自分で伝えないの？」

前提が成立していなければ、そう思いますよね。

「それは……その、僕は普通じゃないんですよ。僕の言葉は人には届かないみたいで。だから、誰かに代わりに伝えてもらえないかな」と

なんとも要領を得ない説明しかできなかった。そもそも僕自身が今の状態を明確に把握していないのだから、人に説明できるわけが

ない。

「申し訳ないけれど、その頼みごとは聞けない」

「……そうですね」

意味が分からないでしょうから。今会ったばかりの人にこんなこと言われて普通に「はい、分かりました」なんて返されたら、逆に僕が「え、なんで？」となることだろう。

でも、あれだけの奇行を繰り広げた人間の事情をあえて知ろうとしてくれただけでも、やっぱりこの人はいいい人なんだろうな。

「そういう想いは自分の口から自分の言葉で表さなければ伝わらないでしょうから」

「……なんか、変な勘違いしてません？」

あれ？ そうなっちゃいます？ そういう感じに取れなくもなかったかもしれないけど。

「あの、僕の好きな人に代わりに告白してくれとか　そういう話だと思ってます？」

「……違うの？」

「違います」

今会った人ですよ？　普通に伝言頼むことすらはばかり相手にそれは頼まないでしょう。

ふうん、と彼女が興味を失くしたように息を漏らして、僕と話すために変えていた体の向きを元に戻したので、僕は彼女がまた本を読み始めるのだと思った。でも彼女は本を脇に置いて、ほんのわずかな間目を閉じた後、だったら　と再び僕の方を見て言った。

「誰に何を伝えて欲しいの？」

……あ、やばい。具体的なこと何も考えてなかった。

「ええと相手は、僕の母なんですけど……内容は、まあ、いろいろなので一口には……」

実は何も考えていませんでした、と正直に言えない僕は駄目な人間だなあ、と思う。だけど、そんなことを考えている間に具体的なことを考えるんだ僕！　何の確証もないけど、ここで何も言えな

つたらものすごく恐ろしい目にあつ、ような気がするから。

「例えば？」

うぐぐ。畳み掛けてくるなあ。何も用意していないのを知った上で聞いてませんよね？

僕が目泳がせて必死に思案していると突然に、音楽が鳴り響いた。機械的な音の、聞き覚えのある曲。それは、僕の携帯の着信音、だった。

発信源となつてゐる僕を見つめる彼女へ反射的に手の平を向けてから、ブレザーの内ポケットに入れていた携帯電話を取り出す。

僕は、僕の死体から携帯を回収してはいない。それ以前に、僕は物を動かせない。

……なにこれ？ 携帯の幽霊？

魔王。

意味が分からない。でも、携帯の画面に表示されている発信相手は間違いなく　魔王。

僕は、とりあえず二つ折りの携帯を開き　着信を切ることにした。

言うまでもないことだけれど、僕は携帯の電話帳に魔王の番号を登録したことはない。

……これって、待望の？お迎え？なんだろうか？　でも……仮にそうだとして、携帯に連絡してくるってどうなの？　死んだ人が携帯持ってたらずんさのさ。

そんなことを考えている間に、携帯が再び音楽を奏で始める。掛けてきた相手は当然に、魔王だった。

これって……出ないと延々鳴らされるパターンなんだろうな、きつと。

んー、仕方ない。出よう。言っても電話だしね。一応話してみても、あまりにもあんまりな感じだったら　まあ、携帯を投げ捨てるのかすればいいし。

僕は意を決して、通話を開始し携帯を耳にあてた。

『なんで切んのよ！』

聞こえてきたのは意外にも若い女性の声だった。そして僕にとってはこちらの方が余程意外なことだけど、かなり怒っている。いや、普通は切ると思いますがね。だって

「なんか怪しかったんで……」

『怪しい？　あんた、死んだ後にまで詐欺に会うとも思ってたんの？　死人のくせに』

死人のくせに、か。さすがこんな携帯に掛けてくるだけあってお見通しなんですわ。てことはやっぱり？お迎え？なのかなあ？　て

つきりいないと思ったんだけど。もう少しあそこで待ってた方が良かったんだろうか。まあ、今更そんなこと

『あんた人の話聞いてんの？』

「はい。あ、いえ、その、だいたいは」

『全部聞いてろっつーのよ。あんたに話してんでしようが』

「はい……すいません」

すっげえ怒ってる。今のはまあ、僕が悪かったかな、と思いますけど。

「ええと、それで用件の方は？」

『あんた……なんも聞いてねーじゃねーのよ！』

ばれちゃった……いきなりそんな重要なことを話してるとは思わなかったなあ。

『……あんたはもういいわ』

落胆したと言わんばかりの深いため息が聞こえてくる。こんなに短時間でここまで失望されることってそうないよね。

『あんたのいる所からそう離れてねー場所からもんじあらひとに烏文字新仁からもんじあらひとって子がいるはずだから、その子にこの電話代わんなさい』

「え？ カラス、モンジ……なんですって？」

『烏文字新仁からもんじあらひとっ！ 人の話聞けつつってんでしょ！』

「いや、そんな戦国武将みたいな人は……」

いないだろ　とは思いつつ一応辺りを見回してみる。駅にはたくさん人はいるけど、この周辺に限ればさっき僕が抱きついたサラリーマンくらいしかいないから、あの人なのかな？ いやでも、子って言ってたしなあ。ううん、ということはやっぱり

「……いませんけど」

『はあ？ あんたちゃんと探したの？ 目え開けてんでしようね？』
もうそんなところまでランクダウンしてたんですね。別にいいですけどね。くそう。

「誰もいないですってば。どれだけ目を見開いても　お？」
ふと視線を感じて目を向けた先、そこにはいないことが分かって

いたから見もしなかった方向から、さっきまで僕と噛み合わない会話を交わしていたあの人が、僕を見ていた。

さすがにそれはないだろう、とは思いつつも、いったん耳から携帯を離して尋ねてみる。

「あー、えっと、もしかして烏文字……新仁さん？　なんですか？」
「ええ」

彼女は頷きながら答えると、相手に教えていないはずの名前を言い当てられたことに大して驚いた様子も見せず、続けた。

「確かに、私は烏文字新仁よ」
思わず、うめいてしまった。気を悪くしただろうか。戦国武将と
か言っちゃったし。

いや、でもそうだな。なんせ幽霊がいるくらいだ。それに比べれば烏文字新仁って名前の女の子がいるくらいのことはまったく普通　なんて思えないよ。

どう考えてもおかしいだろ。どういう経験を積むと自分の娘に新仁なんて名前をつける選択肢が生じるんだ。現実には僕の常識を揺るがすのをそろそろ止めてくれないだろうか。

でも、僕がどう思ったところで実際に存在しているのだから、そういうものなのか。

「えっと、今電話で話してる人が烏文字さんに代わって欲しいみたいなんですけど……」

そう告げてから、僕は手にしている携帯を烏文字新仁さんに差し出した。

「……その相手の人は誰なの？」

「誰、と言われても……僕も知らない人なので。あ、でも無理には言いませんから。僕の方から断られました、って伝えますよ？」

当然の反応として、烏文字さんはあからさまに怪しい申し出に躊躇した。だけど、一体何が彼女をそうさせたのか、訝しげな目をしたまま、差し出された携帯を手に取った。

そして、手にしたそれを、すごい目で睨みつけた。

まあ、そうなりますよね。なんせ通話相手として表示されているのが？魔王？なんだから。怪しまない方がおかしいと思う。

「ねえ」

だいたい登録されていない名前を表示させるっていうのはどういう技術なんだよ。魔王ってそんなに電子機器に強いのか？ いや、これはそういうことでもない気が

「ねえ、と言っているのだけど」

「はい？」

どうでもいいことを考えている間に烏文字さんは睨む対象を携帯から僕に変更していた。

まあ、何を言われるのか大体の予想はつくけれど、言われたところで僕にはどうすることもできない、と思う。思うんだけど、この目を見てなお無視するという芸当ができるほど僕の場合は強靱ではない。

だから、とりあえず聞いてみる。

「えと、なんででしょう？」

「どのボタンを押せばいいの？」

親指と人差し指で眉間を押さえゆつくりとまぶたを下ろしてから、同じようにゆつくりと上げた。

すげえ！ 携帯電話の使い方を知らない女子高生だ！ 絶滅危惧種をこの目でとらえたのは初めてかもしれない。思わずテンションが上がってしまった。

「……聞いているの？」

「え？ あ、はい。えーと、別に何も押さなくてもそのまま話せます」

これを聞いた烏文字さんはすぐに「わかりました。烏文字です」と電話に出た。

家の電話みたいに保留してるとか思ったんだろうか。確かに家のならそういうことするのが普通かな。そういえば携帯に保留機能つてあるのかな？ 本気でどうでもいいけど。

……携帯か。そういえば僕の死体が持ったままの携帯はもう警察の手によって調べられているだろうか。かあさんの携帯番号は登録されてるから、連絡がいつてるかもしれない。

いや、でもまだ電車の中だろうから電話には出ないか……それ以前に寝てて気付かないって可能性の方が高いかな。いい加減、会社に近いところに引越せばいいのにさ。なんだっていつまでもあの家に……あ、でも僕がいらないなら、かあさんだってもう

「私について来なさい」

「……は？」

特にやることがなくなってしまったので、組んだ足の上に肘を置いてばけーっとしてみると、いつの間にか烏文字さんが正面に立って僕を見下ろしていた。

そして僕が、なんですって？ と聞き返す間も無く、彼女は手にしている僕の携帯で魔王との会話を再開し、颯爽と改札さうそうの方に向かって歩いていってしまった。

もおー、と子供じみた不満の声を上げつつも、僕は烏文字さんの後を追いかける。

何の説明も無いのは気になるころではあるけれど、どうせこのまま帰ったところでどうにもならないのだから、それならいつそ事態が好転しそうな方に賭けてみるのもいい。今以上に悪化することもそうないだろうし。

僕は先行する烏文字さんに追いつこうとするけれど、なかなか追いつけない。僕が駅に着いた時からそれなりに時間が経っているのだ、その分の人が増えていて歩きづらいのだ。

しかし歩くの速いなあ、あの人！ むしろ僕を置いていくつもりなんじゃないのか。それに、なんでもうほとんど小走りになって僕が、普通に歩いているようにしか見えないあの人に向に追いつけないんだよ。いくら人間と幽霊っていうハンデがあるにしたっておかしくないか？ あれか、身長差か、歩幅の差ですか。

烏文字さん背高いもんなあ。百七十くらいあるのかな。いいよな

あ。僕なんて百五十六しかないっていうのに……いや、でもまあ、あれですよ。僕はこれからなんですよ。これから毎年十センチくらい伸びていきますよ。怖すぎるだろ。やだよそんなの……幽霊って、身長伸びるのかな？

ああ、あの人もう改札出ちゃうよ。本気で容赦ないなあ。よこしや

「烏文字さん！　ちよつと待つてくさいよおー！」

冗談抜きで置いていかれる、という危機感を覚えた僕は思わず彼女を呼び止めたけれど、彼女は既に改札を出て僕の視界から外れているので、待つてくれているかどうかは分からない。加えて、魔王様との会話を続けていたあの人に僕の声が聞こえていたかどうか。

あのさ、これってあの人を見失ったらどうなるの？　携帯は烏文字さんが持つてるからもう魔王（自称）とは連絡取れないし。いやでも、さすがに放置ってことは、ねえ？　駅にすることは知ってるんだから、入口付近で待つてれば探してもらえ……いや待てよ、魔王様は僕を嫌ってるっばいから、僕は別にいないならいいでいいかっていう感じに……

やつばいですよ！？　このままだと絶賛放置プレイ実施中になるかもですよ！？

「待つてえええー！！！」

恥も外聞も無く、情けない大声を上げて懇願した。どうせ周りの人達には聞こえないんだし。いやまあ、聞こえる状況だったとしても同じことをした自信があるけど。

「烏文字さあー！！！！　置いてっちゃだあー！！！！」

頭の片隅で、お前は三歳児か、という声が聞こえたような気がしたけれど、当然のように無視した。僕に手段を選んでいる余裕など無いのだ。

ようやく改札までたどり着いた僕は自動改札機の上を乗り越えて駅のエントランスに出ると、必死になって烏文字さんを探す。

ベンチ、売店、券売機、時刻表、出入口……いない、よ？　ええと、マジですか！？

「あんなところを通るのは行儀が悪いからやめなさい」

「おわあああああ！」

泣きそうになっていたら、いきなり背後から声がしたので、僕は普通に、悲鳴を上げた。

「……もう少し静かにして」

「す、すみません。後ろにいたとは思わなかったんで」

「待ってくれと言われたから待ってただけでしょう。どうしてそんなに驚くの」

ああ、ばつちり聞こえてたんですね、あの辺のやつ。まあ、それで良かったんだけど。でもなんか、こう　うん、良かったんだけど、ね。なんだろうね、この感じ。

「それから、これ。ありがとう」

そう言っただけで鳥文字さんが僕に差し出したのは僕の携帯だった。

ありがとう、ってこっちが無理矢理押しつけたんだから別にお礼なんか言わなくても、とは思ったけれど、僕はそこには触れず「いえ、どうも」というよく分からない返事をして携帯を受け取った。

こういうものに対してあえてどうこう言う必要はないだろう。むしろ、礼を言わなければいけないのは僕の方なのだし。

そう、だよ。考えてみれば僕は結局この人に失礼を謝ってもいなければ、待っていてもらったお礼も言っていない。よろしくないなあ。うん。とりあえずお礼はちゃんと言っておこう。

「どうかしたの？」

「あ……あー、いえ、別に……」

駄目だ。なんか、この人にまっすぐ見つめられると、どうにも変な感じに……って、なんだそれ。恋する乙女か僕は。気持ち悪いな。「なら、早く行きましょう」

僕が場違いなことを考えている間に、鳥文字さんが再び僕に向かつて手を伸ばす。でも、今度はそこに何も持っていない。空の左^{から}手だ。

えと、これってその　手を繋げって、ことですか？　さすがに

それは、ちょっと……

烏文字さんの中では僕はもう完全に三歳児と同レベルの扱いになっ
ているということなのか。そりゃあまあ、そう扱われても仕方が
ないことをしたのは僕なんだけれども。

僕が烏文字さんと手を繋ぐことを躊躇していると、唐突に烏文字
さんが僕の視界から消えた。そして、彼女が立っていた場所には駅
員がいて、いたんだけど、その駅員も僕が何か言う間もなく、僕
の前を通り過ぎていった。

……なに？ どういうこと？ と、僕は軽く混乱しつつ、とりあ
えず烏文字さんを探す。

彼女は、さっきの駅員が歩いていった方向、ここから少し離れた
ところで倒れていた。

「だ、大丈夫、ですか？」

「ええ。大丈夫」

慌てて駆け寄った僕に、烏文字さんはすぐ、実際まったく問題は
無いという風に答えると、スカートのすそを手で払いながら立ち上
がった。

「人が多い場所に長居するのはやめましょう」

そうして烏文字さんは僕の手を取って、何事もなかったかのよう
に出口に向かう。

いや……おかしいよね？

今起こったことって要するに、歩いてきた駅員が烏文字さんにぶ
つかって、結果烏文字さんがはね飛ばされて地面に倒れた、ってこ
とだよな。

駅の職員が利用客、いや例えそうじゃなかったとしても、誰かに
そんなことをした上に何も言わずに放っていくか？ それに駅員だ
けじゃない、周りにいた人達も一切今の出来事を気にしてる様子が
なかったし。

なんか……これによく似た状況をつい最近見かけた、ような気がする
んですが。

「あの、烏文字さん？」

僕の手を引いて歩く烏文字さんに、おずおずと呼びかけた。こんなことを聞いていいものかどうか、よく分からない。

「なに？」

烏文字さんは振り返ることなく答えた。それは僕の意図を見越しての拒絶の意思表示なのか、それとも、単純に歩くことに集中しているのか。気を付けて進まなければ、先程と同じようなことになりかねないから……

「えっと、なんと言うか……ありがとうございます」

気付いたら、なぜかこのタイミングで、さっき言おうとしていたお礼を口にしていた。僕の小心者っぷりがよく表れている。それしても烏文字さん、訳が分からないだろうな。

「礼を言われるようなことはしていないでしょう。はぐれたら面倒なもの」

思いのほか、烏文字さんは僕の脈絡のない言葉に戸惑った様子もなくそう答えると、今までよりほんの少しだけ強く、僕の手を握り直した。

なるほど、そうになりましたか。別にそれについて言ったわけじゃなかったんだけど。いや、いいんですけどね。それはそれで。自分でもよく分からなかったし。

烏文字さんに手を引かれ駅を出た僕は、その後も彼女に導かれるままに歩を進め、駅近くの駐車場へ向かっていた。

「これって、今更ですけど さっきの電話の人のところに向かつてるんですよね？」

「ええ」

「あの人が僕らにどういう用があるのか、烏文字さんは聞きました？」

「私も詳しいことは聞いていない」

「そうですか……」

不安が無いと言えば嘘になる。なにせ相手は魔王なんて名乗っているのだから。いろんな意味で怖い。

駐車場には十台以上の車が停まっっていて、人も何人がいたけれど、目的の相手はすぐに分かった。その人は大型のアウトドア車に寄りかかって、僕らに手を振っていたからだ。

まだ少し遠目だからはっきりとは分からないけれど、話した時の印象通り、若い女性だった。とは言っても僕らよりは年上なのだろうけど。二十歳くらいだろうか？

烏文字さんにも劣らない長身、髪は肩に届くかという程度のショートヘア、身に付けている服は上下共にスポーツ選手が着ているようなジャージだ。

僕らは思わず歩く速度を上げ、程なくして彼女の眼前に立った。

「……付き合ってたの？」

「いいえ……」

僕は烏文字さんの手を離しながら、そう答えた。恐らく、かなり死んだ目をしていると思う。初めて顔を合わせて、まず言うことがそれってどうなの？

だいたい、もしそんな関係だったらさっきの電話で烏文字さんの

名前を聞いた時に誰それ？　みたいな反応しないでしょ。人のことをどうこう言ってた割にはこの人も人の話聞いてないじゃないですか。

「この子が迷子になりそうだったので、念のためにです」

「はあ、そう」

ああ、きつとまた僕のランクが下がったんだろうなあ、これ。

「ま、なんでもいいけど。揃ったんならさっさと行くわよ」

「え？　いや、ちよつと待ってくださいよ」

早速車に乗り込もうとする魔王を焦って制止する。なんだってこの人達は説明つてものをしないのかなあ。今のところ説明率0パーセントですよ。

「なによ？」

「魔王さんは今からどこに……って言うか、なんで魔王なんですか？」

焦りから勢いあまってどうでもいいことを聞いてしまった。今更な感は相当強いんだけど、あえて聞くまでもなくこの人　絶対魔王じゃねえだろ。

うん、どうでもいいことでもないのか。この先なんだこれ、と思いつつ魔王って呼び続けるのもなんか嫌だし。

「……あんた何言ってるの？　初対面の人間に魔王呼ばわりされる覚えはねーんだけど」

「え？　いやでも、携帯に着信があった時の名前が、その……魔王だったのよ」

予想外の答えに、僕は携帯を取り出して着信履歴を見せながら説明する。自分でも改めて見たけれど、そこに表示されている名前はやっぱり　魔王、なんだけど。

これを見た魔王（仮）は心底うんざりしたように「あの馬鹿が……」と毒づいた後、

「まあ、なんつーか、私は人から魔王って呼ばれることもあるから、それでよ」

「はあ……そう、なんですか」

どうやらあの携帯の表示はこの人の意図したことではなかったみたいだけど……でも魔王は魔王ってことなのか？ 結局よく分からないな。

「あの、ちなみにどういいうことがあると魔王なんて呼ばれることになるんですか？」

「どういいう……んー、そおねえ……まあ、説明はやめとくわ」

魔王（他称）はうつむき、腕を組んで、一瞬悩んでいるようなやつぱり悩んでいないような素振りを見せてから、もう一度僕を見て、拒否した。

「……人に言うとなんかまずい内容なんですか？」

「んや、めんどくせーから」

「そ、そう……ですか」

もちろん強制なんてできないことだからおかしい反応ではないけれど、そこまではつきり言われると腰が引けてしまう。電話で話した時から思っではいたけど、この人なんか苦手かも。

まあそれはそれとして、今後のためにとりあえずこれも確認するべきだろうな。

「あー、で、魔 あなたのお名前は？」

「人に名前を尋ねる時は、まず自分が名乗るのが礼儀ってもんでしようが」

めんどくさいなあ、もう。どうせ知ってるでしょうが、僕の名前くらい。烏文字さんの名前は知ってたんだからさあ。

「や、あんたの名前は知らねーわよ。なんか普通のようで案外普通じゃねーって感じだったのは覚えてっけど」

世間ではそれを忘れたって言うんだよ！ あと、なんで普通に人の心読んでんの！？ 魔王だから？ すげえな。二度とやらないでくださいね！

「……^{かがはるこ} 兎川遥、です。僕の名前は」

「加賀晴子よ。ハルちゃんって呼んだら殴っからね」

呼ばねえよ。僕のご近所での呼ばれ方とかぶってるし。

「それで加賀さん。加賀さんは、幽霊の僕らを迎えに来たってこと
でいいんですか？」

本人から聞いてはいないけど、烏文字さんが僕と同じ状態なのは
疑う余地がないと思う。

僕の姿が見える、僕の声が聞こえる、僕の携帯でこの人と話して、
僕の手を引いて歩いて、そしてなにより、駅でのあの出来事、この
結論に至るには十分な根拠。

あれ？ そう考えると……この加賀さんも同じってことに、なる
のかも。いや、でも、そうになると……どうなるの？ あれ？ 分か
んなくなってきた。

今更ながら正体を計りかねて、僕は加賀さんをじっと見つめた。
その加賀さんは僕の質問には答えずに、なぜか僕と烏文字さんを
交互に見比べている。

加賀さんは何度か僕らの間で視線を泳がせた後、首をかしげなが
ら言った。

「なに？ 今なんつったの？」

「だから、僕らを迎えに来たんですか、と」

「そこじゃねーわよ。その前」

「……幽霊の僕と烏文字さんを、だっただと思いますけど」

それがどうかしたんですか、と言おうとした矢先、加賀さんは僕
をとらえている両の目をすうと細め、発言する機を逸した僕としば
らく無言で見つめ合うと、不意にその視線を烏文字さんに移す。

「……こいつ、何言ってるの？」

「私に聞かれても困ります」

え、何？ 僕なんか変なこと言いました？ ううん、あれかな。
やっぱり、って言うのもあれだけど、烏文字さんは幽霊じゃないの
かな？ いや、でもなあ、どう考えても

「あんた、自分のこと幽霊だと思ってるの？」

「はあ？ え、ええ、それはまあ、そうですね……」

僕？ 烏文字さんじゃなくて？ 僕は間違いないだろう。だって……死んでるんだし。

加賀さんは、片手で顔を覆ってから、一度大きくため息をついて、恐らくは不思議そうな顔をして自分を見ている僕に、言った。

「幽霊なんているわけねーでしょうが。あんたいい歳して何言ってるの？ 大丈夫？」

……大丈夫じゃあ、ないですね。僕の存在全否定ですし。えーと、これは、だから……

「いないの！？」

「……どうして私に聞くの？」

混乱して反射的に烏文字さんに助けを求めたわけですが、実には確な回答をいただいた。

「今日び、子供だってそんなもん信じてねーわよ？ それを大の男が真顔で、僕幽霊ですけどなにか？ とか。本気でうぜーわね」

あ、まずいなこれ。大丈夫かな。僕、泣いてなきやいいけど。

「ええつと、じゃあ、僕は……なんなんでしょうか？」

「そういうことは人に聞くんじゃない、自分で答えを見つければいいかなーと思うわよ」

「そういうことじゃなくて……状態を聞いているんですよ。生きてるとか死んでるとか」

「状態？ はあ、状態……ねえ。ふうん、そおねえ、一言で言うなら」

そこまで言つて、加賀さんは腕を組み空を見上げて、んんー、としばし唸^{うな}った後、上に向けた手の平に逆の手で作った拳をぽん、と乗せるといふ古風な仕草を見せて、続けた。

「幽霊ね」

「めんどくさがりましたよね！？」

「ああ？ 失礼な奴ね。考えてみれば幽霊つてのも案外的を得てんのかなー、と思ったのよ。いきなり聞いた時は、こいつ残念な子なんかしらっと思ってたのは思ったんだけど」

そんなことはいちいち報告してくれなくて結構です。自分で分かっていますから。

「じゃあ、それで……結局加賀さんは何をしに来たんですか？」

「人を暇人みてーに言ってんじゃねーわよ。用があるからに決まっ
てんでしようが。これ以上ねーってくらいの大っ事な用があんのよ」
「大事な用、ですか」

「そーよ。でなきゃこんな朝っぱらからこんなとこ来ねーわよ。こ
んな朝っぱらから！」

急にキレられても。そこは別に僕らのせいではない、と思うん
ですけど。

「まあいいわ。とりあえず続きは移動しながらにしてくんねーか
しら？ 人待たせてんのよね。それに……」

「それに？」

「ここだと周りから私が、一人で延々喋ってる残念な奴だと思われ
んでしょ」

「……そういえばそうですね」

かなり今更な気はしますけどね。あ、でもそれならこの人は僕ら
みたいな？幽霊？じゃないのか。ふうん、結局なんなんだろう、こ
の人。

「じゃあ、とつとと行くわよ」

僕と烏文字さんは、そう言っさつさと車の運転席に乗り込んで
しまった加賀さんを見て、どうしたものかと顔を見合わせた。

「なによ？ まさか、ここまで来といて怖気づいたなんて言わねー
でしょーね？」

まるで車に乗ろうとしない僕らに加賀さんはドアを開き、半眼で
言うのだけれど

「いや、そういうわけじゃなくて、ですね」

「？ だったらなんだっつーのよ？」

「僕ら自分でドア開けられないんですけど……」

「ほんつとめんどくせーわね！」

一度車から降りて後部座席のドアを開けながら、加賀さんはそう言った。そして、運転席に戻った後、僕らがドアを閉めないのを見て、もう一度言った。

「だから、カーネルに対してプライオリティの高いコールが頻発して、通常のタスクがプールされてる間にリターンアドレスが破壊されてデッドロックが起きたって感じつつたわよね？ さすがにこれで分かったわよね？」

「だから、全っ然分かりませんってば」

僕と烏文字さんが加賀晴子さんの運転する車に乗ってから二時間程度が経過しただろうか。その間、加賀さんは僕らの身に起こった事を説明してくれたのだけれど、僕にはその内容が微塵^{みじん}も理解できなかった。

「これだけ噛み砕いて説明してんのに分かんねーってなんなの？ 殴られてーの？」

だってさ、説明に使われてる単語単語の意味がもう分かんないんですよ。そんなものでいくら細かく説明されたって理解できるわけないんですって。

「もうちょっと、こう 普通の人にも分かる表現ってないんですか？」

「ねーわよ。つつーか今のがそうよ」

「いやでも、僕分らないですし」

「それはあんたの頭がわりーからでしょうが」

あーあ、言っちゃったよ。そりゃあ僕だって自分が出来るいい方だとは思わないけどさ。でもほんとに普通の人分かるの？ 今の。ただの一つも分からなかったけどなあ。

「この子は今の状態の仕組みを知りたいのではなくて、自分が置かれている状況の概略を知りたいのだと思います」

この二時間ほぼ黙って僕らのやり取りを聞いていた隣の烏文字さんが唐突に会話に参加したので、一瞬妙な間ができた。でも、その発言内容に関してはまさにその通りだったので、僕はバックミラー

越しに加賀さんに、うんうん、と大きく頷いた。

「というか、今までののは状況の説明じゃなかったのか……てつきりそうなんだと。むしろここは烏文字さんに代わりに話してもらった方が効率が良いのではないだろうか　もう窓の向こうの景色見えますよ。」

「あー……そういうこと。なら最初っからそう言えっつーのよ」

そう頼んだつもりだったんだけどなあ。案外物分り悪いなーこの人。僕の言い方が悪かったのかもしれないけど。あとハンドル離して手を打つのやめてもらえませんか。

「そおねえ。分かりやすく例えるなら……RPGなんかでキャラのHPが0になつてまったく行動はできなくなっただけで、でもなぜか死んだ扱いにはなつてねーっていうバグが起きた、ってところかしらねえ」

「？　あーるぴーじーで……えいちぴーが、なんですって？」

この人の分かりやすいが本当に分かりやすかった試しは一度もないな。というより、むしろ分かりにくいんですが。前半部分でもうついていけなかった。

「だからRPGよ。ドラクエとかFFとかいろいろあんでしょ」

「あー、なんかそういう名前は聞いたことありますけど。テレビゲームですよ？　そういうのがなんか関係あるんですか？　僕そういうのやったことないんでよく分から　」

「あんたマジで言ってるの？」

「は？　はあ、マジですが……」

僕はまた何か変なことを言っただんどうか？　車中に漂う雰囲気からほんの少し前にあった幽霊発言の際の加賀さんを思い出す。

「あんた、確か高校生よね？」

「高校生？」

そうですね、と僕が答える前に、景色を眺めていたはずの烏文字さんが僕に疑わしげな目を向けて呟いた。

「ええ、まあ。これでも一応高校生なんです、が」

……烏文字さん、僕のこともと子供だと思ってたんですね……ランドセルを背負ってないからさすがに小学生だと思われてはいなかっただろうけど。たまにいるからな、僕より背の高い小学生……烏文字さんは僕の回答に特にこれといった反応も見せず、また景色を眺める体勢に戻った。あの、別に怒ってるわけじゃないですよ？　なんか、若干怖いんですが。

「高校生のくせにろくにゲームもやんねーなんて……そんなでよく高校生面してられっわね」

僕の心配をよそに加賀さんがなんだか妙な言い掛かりをつけてくる。いやまあ、確かに僕の周りでもゲーム好きな人は結構いるけどさ……くせに、ってなに？

それに、完全にただの偏見ではあるけれど、どう考えたって普段そういうことをしないけど普通の高校生然としておられる方が僕の隣にもいらっしやるのですが。

「烏文字ちゃんだつてゲームくらいすんでしょ？」

また僕の心の内を読み取った　のかどうかは知らないけれど、それに対抗するように加賀さんが無謀な賭けに出た。まったく、この人がするわけな

「しますよ」

すんの！？　なにこの裏切られた感。絶対しないタイプだろ、この人。

「ほら、やんでしょうが。今日びゲームやんねー高校生なんてあんただけよ」

だけ、ってことはないと思いますけど……いや、でもこの烏文字さんですら嗜む^{たしな}というのだから、本当にそれに近い、のかもしれない。

……ええ？　ホントに？　ホントにゲームするの？　この人が？　にわかには信じられないんだけど。

「あの、ホントにゲームなんかするんですか？　烏文字さん」

「……ゲームなんか？」

怖いってばだから。めちゃくちや怒ってらっしゃるよ。もー、それならそうと、あらかじめゲーム好きそうな感じをもうちよつと表に出しといてくれないかなあ。

「ちなみに烏文字ちゃんはどうなのやってんの？」

そうですね、最近では　と、たった今まで怒り心頭だったのが嘘のように、烏文字さんは加賀さんの問いに対して平素の様子で答え始める。なんだよ、ゲーム大好きじゃん、この人。あの、このまま普段やってるゲームの話になったりしないでしょうね？

「サラダの国のトマト姫ですね」

「なにそれ……？」

僕と加賀さんがまったく同じタイミングで思わず聞いた。なんというか……まったく内容が想像できないんだけど。まあ、少なくとも僕はゲームをしない人種だから分からなくて当たり前なんだろうけどさ。

「ご存知ありませんか」

「そおねえ。それはちよつと知らねーわね」

「そうですか……」

すつげえ寂しそうですね！　なんなんだよこの人は……僕の中で築き上げてきた烏文字さんの人物像がここに来て急速に壊れ始めているのですが。

「んで、ゲームなんかやる気にもならねーって言うあんたは、じゃあ普段何やってんのよ？　当然、さぞやご大層なことをなさっていらっしゃるんでしょうねえ？」

加賀さんのニヤニヤしている顔がバックミラーに映っている。なんだってこんなにアウェーな感じになっているんだろう。

「何って……これといって打ち込んでいるものはないんですが……」

「はあん、何それ？　あんた学校から帰ったらひたすらぼーつとしてんの？　怖ーわね」

「いや、そういうわけじゃ……僕の場合帰ったらまず食事の用意とか、家事をしなくちゃいけないんで。それが終わって次に宿題やつ

たら一日が大体終わってるんですよ」

正確には家事は義務ではないのだけれど、と言いかむしろ、かあさんはそんなことをしている暇があるなら勉強しろと言っただけで、でも会社勤めをして家計を支えているかあさんに家事まで押し付けるのは、家族としてはどうにも居心地が悪い。それに、そんなことを言う割にかあさんは異様に家事の類が下手なのだ。正直あの姿は見てられない。

「家事い？ 健全な男子高校生が家帰ったらまっ先に家事って。なにそれ？ あんた優等生？ あったまわりーくせに。ますますうぜーわねー」

僕そんなに悪いことしてますかね？ 別に褒めてくれなんて言う気はさらさら無いですけど。でも、うざくはない、と思うけどなあ……いや？ いや、ひどすぎるだろ。よくよく考えたら。頭悪いこと関係ないし。それに

「ってなんですかこれ！」

「っせーわねー。せめーんだからでかい声出すんじゃねーわよ」

加賀さんが例のめんどくせー、という気配を丸出しにして抗議してきたけれど、そんなものは知ったことではない。

「だって、ただの世間話になってるじゃないですか。現状の説明はどうなっただんですか」

「はあ？ それもう終わったでしょうが。あんたやっぱり全然人の話聞かねーわね」

「終……ええ！？ い、いつ？ いつ終わったんですか？」

困った時になぜか烏文字さんに聞いてしまう僕だった。今回はちゃんと聞いていたつもりだったんだけど、でも、僕だからな。普通に聞き流している可能性を否定できない。こういう時は第三者に意見を求めるのが……こっち見てもくれないよ。さっきのことまだ怒ってるのかなあ。

「だから、ヒットポイントがゼロになって死んだけどでも死んでねーんだってば。何度も同じこと言わせんじゃねーわよ」

「だから、それ分かんないって言ったでしょうが！」

ヒットポイントってなんだよ。さっきそんなこと言ってなかったじゃないかよ。そのポイント貯めるとどんな良いことあるんですか！
「ゲームなんですよ。その例え。僕は普段ゲームしないって言ったじゃないですか。そういう例えで説明されたってさっぱり分らないんですよ」

「んもおー、我がままな奴ねー。そんなのあんたがゲームやんねーのがわりーんでしようが。それを人のせいみてーに言ってんじゃねーわよ」

「すいません……」

……なんで謝ってるんだろう。僕が悪い、のかなあ？ 教えてもらう立場だからそんなに強くどうこうは言えないけどさ。でも今は、なんか違う気が……

はあ、と肩を落としてため息をつく。どうがんばってもこの人とうまく会話ができない。この際僕も烏文字さんみたいに景色でも眺めていた方がいいのかな、と思い僕はふと窓の外に視線を移す。

そして、目にした光景に、絶句した。

僕らが乗る車はしばらく前から高架橋と言うのか 高速道路のようなどころを走っているのだけど、その下に広がる街が、なんと言うか……おかしい。

「あの、加賀さん。聞きたいことがあるんですけど」

「また？ あんたほんといい加減にしなさいよ」

「いえ、さっきまでのとはまた別の話です」

「じゃあなんだっつーのよ？」

前にいる加賀さんは僕を見ていないのだからそんなことをしたって意味はないのだけど、でも僕は思わずそれを指し示して、聞いた。
「あれ、なんですか？」

ん？ と加賀さんは一瞬不思議そうな反応を見せたけれど、ああ、とすぐに僕の指したものを理解すると、顔をわずかにそちらへ向けて言った。

「穴でしょ」

確かに穴だった。どう見ても、穴にしか見えない。でもあれはそんな風に　その辺の道端にできた小さなくぼみでも説明するような言い方で表現できるものじゃない。

端が、穴の向こう側が、見えない。それに底も。手前の端自体がここからそれなりに離れた位置にあるとはいえ、それでも僕は今地上から何十メートルも上の位置にいるのだからかなり遠いところまで見渡せるはずだ。なのに穴の先には、やっぱり穴しかない。

あんなものが近所、とはいかないまでも自分が暮らしている地域に存在していて知らないわけがない。でも、僕はあんなものの話を一度だって聞いたことはない。多分、僕だけじゃなくて？誰も？なんだろうけれど。

「そういうことじゃなくて、なんであんなものがあるのかってことを聞いたんですよ」

「あんたはなんで私がそんなこと知ってると思うのよ？」

「なんでって、それはこう……あれですよ。加賀さんはなんかすごい人なんですよね？」

「あつたま悪そうな表現ねえ。確かに少なくともあんたよりは物事知ってる方だとは思うけど。でもだからって私に聞けばなんでも教えてもらえると思われても困んのよね」

「じゃあ、加賀さんもあの穴のことは知らないんですか？」

「知ってるわよ」

……なんか回りくどいなあ。意図がさっぱり掴めない。

「私はあんたの親や先生じゃねーつつてんのよ。なんでもかんでもそんな風に脊髄反射で人に聞いてねーで、少しは自分で考えたら？」

疑問符を浮かべていた僕に加賀さんは呆れたように説明した。それを聞いて僕は、なるほどそういうことが、とようやくこの人が言わんとしていることを理解した。

「めんどくさいんですね？」

「そういう言い方もあるわね」

加賀さんの言うことも一理あるとは思っけれど、でもあんな常識外れなものは僕の手持ちの物差しでは計ろうという気すら起きない。要するに考えるのが面倒くさいということか。人のことをどうこう言えなかった。

「だいたい、んなこと聞いてどうしようってのよ？ あんたがなんとかしてくれんの？」

「いや、そういうつもりでは、ないですけど……」

「さっきまではまあ、あんたに関係あることだったからまだしも、あんなもんあんたに何の関係もねーでしょうが。ほっときやいいのよほっときや」

そう言われてしまえばその通りなんだけど、それでもあれを気にするなっていうのはかなり難しいんですが。あきらかに異常なんだから。

「まったくの無関係、なのですか？」

またも突然に烏文字さんの発言。この人さっぱり興味なさそうな感じを出してる割には会話の内容をしつかり把握しているから侮れない。

「あー、まー、ほんのちよつとかすつてると言えばかすつてるけど。でもまあ、やっぱり関係ねーわね。なに？ 烏文字ちゃんもあれが気になるの？」

「あの穴そのものは気になりませんが、あれに対する周りの反応には興味があります」

……そうだ。言われてみれば、そうだ。確かにおかしい。
普通すぎる。

百年前からそこにあつたとしても言うように、周りがあの穴をまったく意に介していない。あれを除くすべてがただ日常が続いている。街の建造物をこそぎ落として存在しているのに、その姿が当たり前だと認識しているとは思えない反応。

そこにあるのに、気付かない。それはまるで

「言つとくけど、全然ちげーわよ」

「はえ？」

思考に割り込まれるようなかたちで加賀さんに断言されて、僕は妙な声を上げてしまった。しかし、僕の動揺などそれこそ何もないかのように二人は会話を続ける。

「私達の状態とは別なのですか」

「そう、全っ然。残念だけど　かどうかは知らねーけど、あれは意図的にそういう風にしてるだけ。対して烏文字ちゃん達のは純然たる不具合だから。一緒にしたらあの穴に失礼ね」

「そうですか」

失礼っていうのはよく分からないけど……今、なんかすごいことを

「そういう風にしてるって、そんなことでき　いや、しちゃって

大丈夫なんですか？」

「大丈夫って、何がよ？」

「だって気付かないってことは普通にあの穴に落ちる人がいるんじゃない、ってことですよ」

僕らみたいな幽霊相手ならぶつかつたところで僕らが倒れる程度ですむから別に問題はないのかもしれないけど、あれは……

幸い今のところそういう現場を目の当たりにはしていないけれど、だからといって誰も落ちていないということにはならない。むしろ、あれだけ広大な空白に気付くことができないのなら既に誰か、それにこれからもそうなることは避けられないと思うのだけど。

「ああ、その辺はまあ一応処理してるわよ。実際やったのは私じゃねーけど」

「処理って……あー、やつぱりいいです」

どうせ理解できないことを言われた拳句怒られるだけなんだろうなあ、と思ひ質問するのはやめた。人に害がないのなら、もうそれでいいような気がするし。

「私は何がどれだけ落ちようが別にいいでしょうが、つつつたんだ

けどね」

「そうですか……」

良くはないと思うけどなあ……大惨事でしょう、そんなの。もつともあの穴が空いた時点で既に大惨事ではあるのだろうけど。

僕は改めて街の真ん中に空いた巨大な空間を眺める。街をクツキの生地にも見立てて円形の型で抜いたような空き方をしている。本当に、何をどうしたらあんなことになるんだろうか？ 空いた場所 にいた人達は、どうなったのだろうか？

……考えて分かることじゃないよな、やっぱり。それに、考えてみたら今の僕は人の心配をしていられる身分でもなかった。

あれ？ そうだよ。僕、結局なんにも分かってないじゃん。

「はい！ はい先生！ 最後にもう一個だけ聞きたいことがあります」

それだけはどうしても聞いておきたかったので、特に意味はないけれど学校で先生に質問するように手を挙げて加賀さんに問いかけた。

「あんたは……私は先生じゃねーつつてんでしょうが……何よ？」
加賀さんはうんざりした様子を見せながらも、質問には応じてくれた。

答えてくれる内容はまるで理解できないけれど、こうやって答えようとしてくれるのだから、この人案外面倒見が良いのかもしれないな。

「加賀さんは僕らにどういう用があつて迎えに来たんですか？」

「はあ？ それ言つてねーんだっけ？」

聞いた覚えがない、ですよ？ と思いつつ僕は相変わらず烏文字さんの方を見てしまう。そして、相変わらず彼女は興味がないという風に外を眺めている。いや、なんで興味ないの？

「まあ、なんつーの？ あれよ、あれ。あんたもそれくらい知つてると思うけど」

「あれ？」

と言われても。当然分かるわけもなく、僕は首をかしげることしかできなかった。加賀さんも「えーと、あれなんつうんだっけ」と言いながら僕同様に首をかしげている。加えて腕を組んでいる。なんで隙あらばハンドル離しちゃうのかな！ 思わずそう言おうとしたら、加賀さんが馴染みの手を打つ仕草を見せて、言った。

「ああ。そう、捨て駒。捨て駒にしようと思ったのよね」

「……はあ？」

捨て駒って……僕の知ってるあの捨て駒のこと？ それで合っているとしたらなんと言うか、ずいぶんと加賀さんの言い方が軽い気がするんだけど……僕が思ってるのとは別に、なんかそういう表現があるのかな？

「捨て駒って、ええと、世間一般で言うあの捨て駒、ですか？」

「そ、捨て駒」

この人、捨て駒の意味分かってるのかなあ……まあ、あれだ。とりあえず、面倒見が良い人説は保留ということ。

「ここに、住んでいらつしやるのですか……」

「何よ？ ずいぶんと不満そうじゃねーの。なんか文句あんの？」

「いえ、そういうわけではないんですけど」

僕らが加賀さんに連れてこられた場所、彼女が居住しているという高層マンションの前で、僕は口を開けたままその頂上を見ていた。ここで僕らにしてもらうことがある、らしい。

それにしても何階まであるんだろう、ここ。敷地の面積もやたら広いし。入口自動ドアなんだなー。うわあ、奥になんかホテルのフロントみたいなのがあるんだけど。ついでに何人も警備員がいるし。とにかくすごい浮き方をしている。当然物理的にはなく、周りの環境から、という意味で。ここは首都の一等地ではなく、ありふれた片田舎の一角なのだ。農家と田んぼが点在しているような土地に建造されるものじゃないと思う。日照権とか大丈夫なのか？

「なに、ぼけえーっとしてんのよ。さっさと来いっつーの」

普段まったく縁の無い世界を前にして半ば呆れていた僕を、既に入口に達しようとしていた加賀さんが呼んだ。当然と言っべきなのか、烏文字さんは平然とその隣に立っている。

「はい！ 今行きます。ちょっと待つてください待ってくださいって言うってんのに！」

加賀さんは僕の返事すら待つことはなく、早々に自動ドアをくぐろうとしていた。あれが閉まりきったら僕にはどうすることもできないって分かってやってんのかな、あの人……分かってやってるよなあ、間違いなく。

「あああもう！」

野球選手がヘッドスライディングするような格好で入り口に飛び込み、なんとか自動ドアが閉まりきる前に中へ入ることができた。しかし、挟まれていたらどうなっていたんだろう……

僕がいまだ地べたで安堵のため息をついていた頃、加賀さんはそんな僕には一瞥もくれずに、おかえりなさいませ、と言って礼をするフロントの人達に軽く手を挙げて応えながら、三基のエレベーターが並ぶホールへ向かって歩いていく。

なんか、ものすごく恥ずかしいのですが。この分だと誰にもさっきの必死の行動を見られてないんだろうけど、それがなんかこう逆に、つらいな。こういう時、なにやってんだお前、とか言うてほしいなーとか思うのは贅沢なんだろうか。

はあ、と今度は疲労感からくるため息をつきながら僕がようやく立ち上がって顔を上げると、加賀さんの隣で同じくエレベーターを待つ烏文字さんが、なぜかこちらを見ていた。

……あの人も、僕がヘッドスライディングしてたところなんて見てないよね？ その割には、なんだか妙に視線が、冷ややかと言うか……僕が欲しかったのはこういうんじゃないんだだけ。まあ、あの人はそんなこと知ったことじゃないでしょうけどね。

そんなことを考えながら僕がのろのろと歩き出した時、エレベーターホールの方で、ポーンという機械的な音がして、加賀さんと烏文字さん、二人の前の扉が開いた。それを待っていた二人は、当然エレベーターに乗り込む。

僕は、まだ入口付近にいる。

あれ、もしかしてさっき烏文字さんがこっちを見てたのはもうすぐエレベーターが来るから、さっさと来いってことだったの？ そうなの？ って今頃気付いても遅いよ……ちつくしよう。もうやだ。ぐ、お、おおあああ！」

どうせ普通の人には聞こえないんだからもう知らん！ そう思い本能に従って、叫びながら全力で手足を駆動させた。既に扉は閉まり始めている。一手の無駄、一瞬の躊躇も許されない。

と言うかですね、人がこんなにも必死になつて走ってるのを見て眉一つ動かさないあの人達はなんなの？ あの人達にも見えてないの？ 見たくないものは見えないの？

「間、に、あ、う、ええええー！！！」

間一髪というのはこういうのを言うんだな。僕は荒い息をつきながら、逆さまになった視界にこれ以上ないというほどの蔑^{さげす}みの眼差しを向けてくる二人の女性を収めて、そう思った。

まあ、要するに扉が閉まりきる前になんとかエレベーターに飛び込んで、そのままの勢いで壁に激突した上に頭から床に落ちたら、二人が死ねばいいのという目で僕を見ていた、っていうだけのことなのですが。結局間一髪でアウトなんじゃ……完全にアウト？

とりあえず天地が逆転した状態から復帰して、床に座り込んで乱れた息を整えていると、

「あんたには落ち着きつてもんがねーわけ？」

加賀さんが鋭い視線もそのままに心底呆れたという風に言った。ちなみに烏文字さんはとうの昔に僕のことなど見ていない。

僕は荒い呼吸を抑えて立ち上がると、加賀さんの目を正面からまっすぐ見つめ返して言う。

「閉めるボタン押しませんでした！？」

加賀さんの問いは完全に無視して、まっさきに、走り始めた瞬間から言いたくて言いたくて仕方がなかったことを口にした。どう考えても、扉閉まり始めたの早すぎだろ。

「そりゃ押すわよ。なんで勝手に閉まんのを悠長に待ってなきゃなんねーのよ」

「なんでって……それは、その すいません……」

こういう時に謝らない人になりたい。例え悪いのが僕だとしても「とにかく、鬱陶^{うつとう}しいから家人中では大人しくすんのよ」

「善処します……」

間もなくして、つい先程聞いた忌まわしい電子音が鳴り、エレベーターの扉が開いた。現在の階層を示す表示を見ると、六十階最上階らしい。六十階ねえ……雲の上じゃないだろうな。

加賀さんはエレベーターを出た先で横に伸びている廊下を右へ進み、僕らもそれに従う。

廊下の左側、部屋のある方はただひたすらに壁が続いている。これが普通のマンションならそこにはいくつもの扉が並んでいるのだけど、ここには一枚も無い。

そして右側、外との境界には胸辺りまでの高さの塀と、その上から天井までを覆うガラスのような材質でできた壁がある。透明度が高く、通気性も考慮されているようなので閉じられてはいても閉塞感はない。雲はいつも通り上にあつたので安心した。

進行方向の先の突当たり、二、三十メートルは離れた位置に扉が見える。逆方向の突当たりにも同じように扉。この階に入口らしきものはその二つしかない。

「こんなに広いのに二部屋しかないんですね」

「二部屋？」

ここを外から眺めた時のように、驚きを通り越して呆れ気味に漏らした僕の言葉に前を行く加賀さんが何？ という感じで足は止めずに顔をだけをこちらに向けた。

「ああ、なんて言うんですかね、こういうの。二世帯分？ なんです、ってことです」

「んや、この階は一世帯よ」

「……なんですって？」

当たり前のように理解しがたいことを言われたので思わず聞き返す。一世帯って、この階には加賀さんとその家族しか住んでないってこと？

「だから、この階全部で一戸、一世帯分。下の方はもうちょい細かく分かれてっけど」

「え、だってドアが向こうにもあるじゃないですか」

なぜか居住者の言うことを信じずに、反対側のドアを指し示して抵抗する僕へ、加賀さんは平然と言い放つ。

「出入り口が二つあるってことでしょ」

「ええ……二つもいらないうでしょう、そんなの。なんですかその謎の設計思想は。勝手口って感じでもないですし」

「なんでよ？ 帰ってすぐに向こう側の部屋に行きてー、って時にわざわざ家の中回り込んで行くのめんどくせーでしょうが」

金持ちは発想も贅沢だな！ 回り込めばいいじゃん！ そう叫び出したくなるのは、僕の懐というよりは心が貧しいからなのだろうか。

それにしても、こんな広大な面積をたったの一世帯でどうやって使い切れるんだろう？ 書斎程度じゃ埋まらないよな、きっと。トロフィー飾る専用の部屋とか設定しないと無理だと思うんだけど。あとはすごい子沢山とか。全部この人のイメージにはそぐわないけど。

家の中は一体どうなっているんだろう、という少々下世話なことを考えている間に、僕は扉の前にたどり着いた。加賀さんがジージのポケットから取り出したカードキーで開錠し、扉を開く。

「早速だけど、私はちよつとやんなきゃいけないーことがあんのよ。だから、わりーんだけどリビングで待ってて」

僕らが玄関に上がった途端、加賀さんは靴を脱ぎ散らかしながらそう言っと、僕らの返事を待たずに廊下の奥へ消えてしまった。せめてリビングがどこか教えてからにして欲しかった。

「あーと、どうしましょう、か？」

僕が困った時の烏文字さん頼みを発動して彼女を見ると、烏文字さんは転がったままの加賀さんの靴を揃えようとしている最中だった。しかし当然、ピクリとも動かない。きつと条件反射なんだろうなあ……らしいと言えづらい気はするけど。

烏文字さんは加賀さんの靴を揃えることは諦めて自身の靴を脱ぎこれは揃え、既に誰もいなくなった玄関に「お邪魔します」と挨拶すると勝手知ったる我が家のように少しも迷う様子もなく、加賀さんとは別の 玄関から向かって左側へ伸びる廊下を進み始める。

「え、ちょ、待ってくださいよ」

烏文字さんが視界から消えかけてからようやく、僕は靴を脱いでそれを適当に揃えると、慌てて彼女を追いかけた。思った通りあの

人はまったく待つていてはくれなかったけれど、歩く速度自体は遅めだったのですねに隣に並ぶことができた。

「烏文字さん、リビングがどこ分かるんですか？」

何の躊躇もなく進んでいく烏文字さんに僕が怪訝な調子で聞くと、
「分からないから探すのよ」

というもつともな答えが返ってきた。はたから見た様子からはまったくその感じは伝わってこなかったけれども。

「この家やたら広そうでしたから時間かかりそうですね」

まず、今僕らが歩いている廊下が異様に長い。でも、ぱっと見た限り当分の間ドアは現れそうもない。おかげで今のところは迷いようがないけれど、ここを抜けた先に広がるであろう広大な空間を思うと気が滅入る。ほんとになんで教えてくれなかったの、あの人。

「広いと言っても限りはあるのだから、いつかは見つかるでしょう」
達観してるなあ。こんなことで大袈裟かもしれないけど。でも、

僕とそう変わらない歳のはずなのにこの差は……精神的には百年くらいは離されているんじゃないだろうか。

……あ、もしかして　まあ百年は言いすぎだとしても　烏文字さんって結構昔に死んだ人なんだろうか？　今時こんな真つ黒なセーラー服は見かけないし、言葉づかいとか立ち振る舞いもなんか微妙に古風だし、携帯電話の使い方知らないし、名前もなんか、アレだし……いや、あの名前は何百年遡ろうと無い気もするけど。

「あのー、まったく関係ないですけど、烏文字さんって何歳なんですか？」

「十六よ」

同い年……ですと？　って、あー、と言うか　まあ、死んだら数えないのか、歳なんて。僕は何がしたかったんだろう。

「それじゃあー、烏文字さんの新仁っていう名前は何か由来とがあるんですか？」

「……どうして急にそんなことを聞くの？」

いつ死んだんですか？　という事柄はなんとなく気が引けて聞け

ない。かといって会話を始めてしまった手前そのまま黙るわけにも
いけないので、とりあえず気になっていた要素その二を尋ねてみた
結果、睨まれてしまった。

「いえ……特に意味は無いんですけど……珍しいなあと思って」

「そう」

これ以上続けるつもりはないと言うように、烏文字さんは僕を視
界から外して前を向く。

……ううん、烏文字さん自分の名前嫌いなのかな？ これなら別
にいいかなと思って普通に聞いてしまったけれど、なんか悪いこと
したな。

僕が烏文字さんの機嫌を損ねている間に、僕は廊下の終点に到
達した。一見ただの行き止まりに見えたそこには、左側の壁に出入
り口があった。ドアが部屋の内側に開け放されている。烏文字さん
はその中を覗き込むと今度はすぐに入っていくことはせずに、入口
を見つめたまま何かを思索しているようだった。

烏文字さんの前を横切って、僕も中を覗いてみる。

妙に薄暗い。廊下同様窓が無いことに加え、こちらはその上照明
の量が足りていないように思う。一応、天井に等間隔に設置されて
はいるのだけど、その間隔が広すぎるので間に闇ができてしまっ
ていた。むしろ、暗闇の中に灰色の床が点々と浮かんでいるように見
える。

そしてそれ以上に異質なのが部屋の内容、構造だった。部屋の端
が分らないくらい広大な上にその中には直方体状の柱？ のよう
なものがズラリと等間隔に並んでいる。

それは見た目は柱なのだけど、しかし柱だとも思えない。部屋の
容積に対してそれらが占有している割合が高すぎるからだ。柱のよ
うなものの床面積は一畳くらいはあるように見える。それが人一人
が通れる程度の間隔を空けて部屋中を埋め尽くしているのだ。

これらが柱だとすれば、部屋の中にほぼ柱しかないことになって
しまう。天井を支える必要があるのは当然としても、その結果柱が

あるだけの部屋になってしまつては本末転倒だと思う。

……人様の家にあまりこんなことは言いたくないけど、いい加減にしるよ？

僕は必要以上に不気味な部屋から出ると、ちょうど思案を終えたいらしい烏文字さんの前に立ち現段階で最優先されるであろう事柄を告げた。

「じゃあ、そろそろお暇いとましましょうか」

「玄関の扉開けられるの？」

「……えーと、どう、します？」

既に本日何度目になるか分からない烏文字さんに丸投げタイムだった。今朝会ったばかりの人にここまで頼ることになるとは夢にも思わなかった。いい加減にするのは僕の方だった。

「ここを通つてリビングに行く以外の選択肢があるとは思わないけれど」

「ええ……入るんですか？ここに？」

「入らなければ進めないでしょう」

「それはそうですね……」

てつきり脱出経路を考えているものだと思つていたのに。突入する気満々なんですか。

「ちなみに、さっきまで何を悩んでいたんですか？」

脱出経路ではなかったとするとなんだったんだろう。ふと思い返してみれば、この人が迷うのを見たのは初めてのような気がする。

「この中が普通の部屋には見えないから入つていいものかどうかを考えていたの」

「あー、なるほど……それで、入るという結論に達した根拠は？」

「ここまでは一本道だった。かと言って逆の方向はどこかに通じているような様子はなかった。つまりここを通る以外に道が無いのよ」そんなところしつかり見てたんですか。やるなあ。そっか、安全性についてはなんにも考慮されていないのかあ。

理路整然とした回答にうん、うん、と頷いていた僕を見てすべて

の不安要素は解消されたと解釈したのか、烏文字さんは前にいた僕の横を通り過ぎあの部屋の中へ入っていく。

僕はまた慌てて彼女について行くけれど、どうしたって恐怖を拭いさることはできなかった。しかも今歩いている廊下　というより広大な床の一部は狭いので烏文字さんと並んで歩くことはできない。目の前にある彼女の背中が暗闇に消えていく、というここを進む上で避けられないその瞬間に、どうしようもなく不安をかき立てられる。

次の明かりの下に出た時、そのまま彼女が消えているのではないかと。

その不安を少しでも和らげたくて、僕は思わず彼女の背中に声をかけた。姿が見えなくても、声が聞こえていればそこにいると分かる。

「あの一、烏文字さん？」

「……今度はどうしたの？」

ここに至る前に交わした会話を思い出したのか、嘆息交じりの声が返ってくる。たださえ視界が悪いのだから当然背中を向けたままの返事なのだけど、そこにはそれ以外の何かがあるような気がしてならない。

うつむ。さすがに今回は失礼のないようにしないな。単に話をしたいだけで内容なんてどうだっていいのだから、当たり障りのないことこの上ないものでいいこう。

「ええと、烏文字さんは怖くはないんですか？　この部屋」

「怖い？」

聞こえてきたのは、予想外のことを聞かれた、という様子の予想外の返事だった。かなりタイムリーな話題だと思ったんだけどなあ。「あまりこういうこと言うもんじゃないかもしれないですけど……どうひいき目に見ても気味が悪いと思うんですが、ここ」

「確かに、言われて見ればそんな気もするけれど」

「特に気になりませんか……」

言われて初めて気付くレベルからは大きく逸脱していると思うんですが。そうですか。

「僕は……正直ものすごく怖いですけどね」

とっさに思ったことは口に出さず、ここに入ってから切実に感じていることだけを伝えた。あえて言うことでもない気がするけど、無言になることは避けたかった。怖いから。

「人が普通に生活している場所なのだから怖がる必要はないでしょう」

烏文字さんはやはり背中を向けたままなのだけど、それでも何を言っているんだお前は、という気配が伝わってくる。きっと本気でそう思ってるんだろうなあ。

「いや、でもこの空間に限っては人が生活している気配は無いような気がしますけど……どちらかと言えば人以外の何かがいるような感じが」

僕がそう言いかけた時、烏文字さんが、碁盤の目のように区切られているこの部屋を　だけど一度も曲がることはせず　入口からまっすぐに進んできた彼女が、立ち止まった。

「？　どうかしましたか？」

照明の下で待つ烏文字さんに僕も自然に足を止めて問いかける。

「……なんでもない」

彼女は一瞬何かを言いかけける仕草を見せたけれど、結局それを言うことはせずに、ただ一度だけ、きゅっ、と左手を握り締めると、再び前を向いて奥に進み始めた。

え？　なに？　どうしたの急に。説明はしてもらえないんですか？

あー、もしかして、お前自体が人以外の何かの同類だろうが、というようなことを言おうとしたけれど、つまらないことに巻き込まれたくないからやつぱりやめようとかそういうことを思われたのですか？

あれ、なんか、恥ずかしい、な……別にウケを狙ってあんなことを言ったわけじゃ。すげえ寒い奴だと思われただろうか。まあ、そ

もそも面白い人間だつていう自負があるわけじゃないから、別にいいけど。でも今のはなんと云うか、事故なんですよ？

こころなしか歩く速度を上げた気がする烏文字さんに置いて行かれないよう、足早について行くと、しばらくしてまたも彼女が立ち止まった。

また何かあつたんですか？ そう聞こうとして、だけど聞けなかった。今度は僕ではなく、左へ続く空間をじっと睨んでいるから。その様子はさつきとは違い、何かを警戒しているようだ。

「今、何か……人影のようなものが」

「うわ……ちょ、やめてくださいよ。そういうこと言うの」

この状況で一番言っちゃいけないことですよ。何のために怖いと言したと思ってるんですか。

「いざという時のために心構えができた方がいいでしょう」

「……まあ、そういう考え方もありますけど」

一応全部踏まえた上での、この人なりの親切だったのか。完全に裏目ではありますけどね。間違いなく今ので恐怖が増大していますから。

「出会い頭に悲鳴を上げてもしたらこの家の方に失礼だもの」

別に僕の心配をしてくれていたわけではなかったのですか。そうですか。

「確かに怖いとは言いましたが、でもさすがに悲鳴を上げたりはしないと思いますけどね。僕だつて一応男ですし」

「それならいいのだけど」

烏文字さんはそう言つと、何事も無かつたかのように正面に向かって歩みを再開する。

……いや、信用してない感が筒抜けすぎませんか？ それならもういつそ「ああ？ 調子のんなよヘタレが！」とか言ってくれた方が清々しいのですが。絶対言わないだろうけど。

にしてもこの人、自分で人影見たつて言つてたのにその後何も気にしないんだな。そりゃもう通り過ぎてるつていうのもあるんだろ

うけど、完全に前しか見ないもんなあ。

それに引き換え僕はといえば、口ではささやかな抵抗を試みてもものの行動はどう見ても挙動不審になっていた。

部屋の奥の闇をびくびくしながら覗き込む。後ろに誰かいるかもと急に振り返る。かと思えばその間に暗闇の中に烏文字さんを見失い、小走りで追いかける。

そんなことを繰り返している間に、僕は部屋の端までたどり着いた。

密かに、まっすぐ進めばそのまま通り抜けられるかも、と思っていた僕の期待はあっさりと裏切られ、そこには壁が立ちふさがっているだけだった。

「困りましたね……」

烏文字さんが僕と同じことを考えていたかどうかは分からないけれど、当ても無くこの部屋の中をうろろするというのは避けたい事態だった。人影騒ぎもあったし。

「この壁伝いに歩いていけばいつかは抜けられるでしょう」

……なんなんですか、その一切揺れない心は。そりゃ部屋の外周をぐるりと回ればいつかはどこかに出るだろうけど、この環境でよくそんなことを平然と。

自身が言った通り壁伝いに、あえて人影を見たという左へ歩き始めた烏文字さんを追いかけようとしたその時、僕はギギという鈍い音を耳にした。

思わず足を止め音のした方を見る。それは部屋の奥の暗闇からでも、烏文字さんが立てた音でも、当然僕が立てた音でもなかった。

壁からだった。さっきまで向かい合っていた壁、突き当たりだと思っていたその壁の一部がドアのように部屋の外側へ開いていきそこから溢れんばかりの光が注ぎこまれてきて暗闇から突然に強い光の下へ出て視界が狭まって目を凝らしていると急に腰の辺りに何かがぶつかってきて

「ひいあああー！！！」

それはもう情けない悲鳴を上げて、僕は床に手をつくこともできずに尻餅をついていた。

「あ、あの、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

聞きなれない声に僕が恐る恐るまぶたを上げると、見た目七、八歳くらいの男の子が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。そして、烏文字さんもすごい目でこつちを見ていた。

「え？ あー、うん。大丈夫、かな」

とりあえず烏文字さんのことは見ないようにして男の子に返事をする。

まだ動揺が残っていたから多少挙動におかしいところがあったかもしれないけれど、大丈夫という点に嘘はない。まあ死んではいるんだけど。でも、そのおかげと言うべきか、せいどと言うべきか幽霊状態になってからというものの苦痛というほどの刺激を感じなくなつた気がする。心が痛いことは沢山あつただけ。

「えっと、本当にごめんなさい」

男の子が僕に対して頭を下げる。ここまで恐縮されるとなんだか、すごく申し訳ない。

この子は確かに僕にぶつかりはしたけれど、それは人が倒れるような強さではなくてむしろ軽く触れた程度だった。要するに僕が倒れたのは僕が自分で思っていた以上に　駄目だったというだけだ。うん。案外大丈夫じゃないかも。

「いや、気にしないで。僕もぼけーっと突っ立ってたしさ」

僕がひらひらと手を振って怒ったりはしていないことを伝えようと、男の子は、はいと頷いてから僕と烏文字さんに一礼して、暗い部屋の中に消えていった。

うつん、とつさのことで聞きそびれたけどあの子、加賀さんの家族なんだろうか？ あの子の子供にしては大きい気がするけど。というかあの人に子供がいるとは思えないけど。

あの子が向かった方を見つめながらそんなことを思っていると、烏文字さんがすごい目で僕を見ることを止め、男の子が入ってきた

入口の前に立ち、中の様子をうかがっていた。

「リビングに着いた、みたい」

隣の空間を眺めながら烏文字さんが呟いた言葉に、僕は耳を疑った。

いやいや、こんな隠し扉みたいなものの向こうにリビング？　こんなあの子が入って来なきゃ絶対気付かなかったよ？　いくつもある出入口の一つで、その中でも特殊なものということなのだろうか。だとしても壁と同化させる意味は分らないけど。

烏文字さんを疑いたくはなかったけれど、そんな生活に密着した部屋がこの先にあるということがどうにも信じ難かったので、僕は壁と烏文字さんとの間から顔だけを覗かせて向こう側を見る。

そこには、やたら見晴らしの良い、物が一切置いていない空間が広がっていた。僕の感覚ではそれが本当にリビングなのかどうかは判断しかねるけど、こと違い床がフローリングになっているのはまあ、それらしいという気はする。明かりも十分にあるし。壁は遠すぎてよく分からないけど、コンクリート剥き出しってことはなさそうだ。

むう……リビング　なの、かなあ？　そう見えなくてもないけど、物が何も無いっていうのがなんか生活感に欠けると言うか、空き家みたいだな。まあ生活感なんて言い出したら、今いるこの部屋の方がはるかにひどいんだけど。

「行きましょう」

今いる謎の部屋が謎の出入口によりリビングと直結していることにいささかの疑問も感じない様子の烏文字さんは、僕に一瞬だけ視線を戻してから隣の部屋に踏み込もうとする。

「あ、ちよつと待ってください」

「……どうかしたの？」

ゴールを目前にして動かない僕を烏文字さんはもはやお馴染みとなった　何をやってるんだお前は？　という目で射抜いてくるのだけど、僕はそれを真っ向から受け止める。

言わなければならないことがあるのだ。たつた今、不意に気付いてしまったこと。

「さっきので腰が抜けて立てません」

……人間というのは、度を越えると無表情になるものなのだろうか？

「えーと、そういうわけなのでですね？ 手を貸していただけるとありがたいかなあ、なんて思っているのですけれども……」

烏文字さんに人間らしさが戻ってきたのを見計らってから、意表を突いて逆に助けを求めてみたりしたのだけど、彼女は微動だにしない。

あ、これは本当にまずいかもしれない　そう思い始めた頃、彼女はようやくかけるべき言葉が見つかったというように、長い間を置いてから重々しく口を開いた。

「……男のくせに情けないわね」

「……面目ないです」

烏文字さんから頂戴した非の打ち所の無いお言葉に、僕は思わず頭を垂れた。無論恐ろしくて彼女を直視できないからだ。直視どころかむしろ視界にすら入らないように思いっきり目を背けている。できることなら僕が彼女の視界から消えたいけどそれができるならそもそもこうはなっていなかったわけでああもついいやどうでも。

「どうしたのー？」

突然、このいたたまれない空気を打ち砕くような気の抜けた声が聞こえて、僕と烏文字さんは同時にその声がした方を向く。

見れば先程男の子が入ってきた入口に人が立っていた。一見して若いサラリーマンという風情の、落ち着いたスーツで身を固めた青年　というのか二十代半ばくらいの男性だ。

その人はしばしの間驚いたように僕らを交互に見比べ、その後悩ましげに眉間に皺を寄せ顎に手を当てて、ううーん、と唸った後、
「ええつとー、こういう時はー」

何か思いついたようにそう言って、背広やズボンのポケットを探

り始めた。

「あのう、あなたは……あーいや、その前にまず僕は」

「んー？　ちよつと待ってくれない？　とりあえずやっておきたいことがあるからさー」

はあ、と生返事をする。まずは僕らの素性を明かすのが無難かと思っただけ、あっさり中断されてしまった。見れば烏文字さんどう対処したものかと思案しているようだ。

まあ多分、加賀さんの知り合いとか友達とか家族とかなんだろうから危険は無いと思うけど。さすがになんの話も聞かされていないってことはないだろうし。いやでも、そもそも加賀さんが僕らに危害を加えないと決まったわけじゃないんだよなあ。思い返してみればあの人、僕らを捨て駒にするとか言ってたしなあ。

急に不安になりつつ、それにしてもこの人はさっきから何をしているのだろう、と訝しげな視線を送っていると、彼はようやく手を止めて「あー、そっか」と言ってから何かを思い出したように続けた。

「充電してるんだった」

そして「電話電話ー」と、どこか楽しげに口ずさみながらリビングに戻っていく。

「通報しないでもらえます!？」

危険人物じゃありませんように、と思っていた人から完全に危険人物だと思われていた。

え？　この人、加賀さんに関係してる人じゃないの？

「いやー、ごめんねー。早とちりしちゃって」

スーツ姿の男性、清寺耕四郎さんきよでらこうしろうがちゃぶ台の向こうでにこやかにお茶を淹いれながら、改めて僕らに謝る。

別に謝られるようなことをされたわけでもなかったのですが、僕は「いえ、こちらこそ」というよく分からない返事をしながら今の自分が置かれている状況を考えていた。

烏文字さんとは言えば、僕の隣できれいな姿勢で正座をして、相当遠くにある窓から外を眺めている。

あの謎の部屋の隣に位置するリビング、らしき部屋。この何も無いと思っていた部屋の一角にはなぜか六枚の畳が敷かれていた。僕と烏文字さんはその後、清寺さんに案内されこの疑似六畳間とも言うべき場所の中心に置かれた小さなちゃぶ台を囲んでいる。

ここにあるのは 日焼けした畳。あまりにも四角いテレビ。くすんだ色をした茶だんす。金属感丸出しの扇風機。ダイヤル式の黒電話。等々、時代がかった物しか置かれていない。まるで昔のテレビドラマに出てくる安アパートの一室でも再現したかのような佇たたずまいを醸かもし出している。

ちなみに何故これらが隣の部屋から確認できなかったのかと言うと、出入り口のあった壁に沿って配置されているから視界に入らなかった、というだけだ。

どうせならこんな端っこではなく、もっと真ん中の方に置けばいいのに、と思って聞いてみると、テレビ等の電源コードがコンセントに届かなくなるから、という非常に分かりやすい回答をいただいた。ただ、このテレビが電力を得たところで正常に機能するかは疑わしい。

なんと言ったのか、世の中にはこういう無駄遣いの仕方があるんだなあ、と感心してしまった。自分がこうなりたいとはまったく思わ

ないけれど。

「それにしても、ハルちゃんもひどいねー。自分でここまで案内してあげればいいのに」

清寺さんが嘆息しながら僕らの前にお茶の入った湯呑みを置く。

「確か、やることがあるからって言っただけ」

「ふーん？　なんだろ」

あえて確認しないけど、ハルちゃんって加賀さんのことですよね？　なんか、そう呼んだら殴るとか言われた気がするけど、あれはつまり清寺さん以外がそう呼ぶことを許さないってことだったんだろうか。ふうむ、この人達どういう関係なんだろう？

「烏文字君は何かお気に召さないことがあるのかな？」

「いえ、そんなことは　ってなんで僕に聞くんですか」

出された湯呑みに手を添えてそれをじっと見つめている烏文字さんを見て、清寺さんはなぜか僕に彼女の機嫌を尋ねてきた。やめてくれませんか、そういうことするの。

「いやー、なんか本人に聞いたら怒られそうなのがしてさー」

「そう思うなら僕を巻き込むのは　じゃなくて、大丈夫ですよ。

怒りませんよ。そんなことで……いや、まあ多分ですけど」

「そうなの？　ずっと無言だから機嫌悪いのかなーって思ってたんだけど」

「必要なこと以外はあまり口にしない人なんですよ。烏文字さんは」
いや、どう考えても本人を前にして交わす会話ではないだろう、これ。

大体、僕だって烏文字さんとは今日会ったばかりでどういう人かなんてよく分からないのだから聞かないで欲しい。怒られたくないから。手遅れな気もするけど。

「せっかく淹れたお茶も飲んでくれないしさー。これは兎川君もだけど」

「それは……僕らは飲みたくても飲めないのでから」

「……あー、あー、なるほど。そっか、忘れてたよ。ごめんこ

めん」

そう言って、清寺さんは僕らの前に置かれた湯呑みを自分の所へ引き寄せた。

今思うと烏文字さんは一応あのお茶が飲めるかどうか確かめていたのだろうか。僕なんかは最初から試す気にもならなかったけど。律儀な人だなあ。

「うーん、でもこうして改めて見るとなんだか……」

清寺さんが唐突に真剣な顔をして腕を組み、じつと僕と烏文字さんを見比べる。会ったばかりだけど、この人がこんな表情を見せるのは意外な感じだ……。どうしたんだろう？

「お化けみたいだねー」

うふふ、と楽しそうに笑う清寺さん。僕がこういうことを言って加賀さんに散々馬鹿にされたことは黙っておいた方がいいんだろうな。というか不謹慎だなこの人。

はあ、と呆れ気味の生返事をする僕をまったく気にした様子もなく、清寺さんは「そう言えば兎川君はさー」と、気さくに話しかけてくる。まあ、完全に目を閉じて瞑想でもしているかのような烏文字さんに話しかけるのは、ハードル高いですよ。

「なんで死んじゃったの？」

あー、それ聞いちゃうんだ。別にいいけどさ。今までのこの人の感じからすればあまり驚きもしない。でも、自分の意思で死んだみたいない方はやめて欲しかった。

「包丁で刺されたんですよ。後ろから、こう、胸の辺りを」

「うわー……なんで？」

「なんで、って言われても……なんででしょう？」

恐らくは、本来そうしたい人と間違われた、のだろうけど。実際なぜそうなったのかは僕にも分からない。こういうことはされた人ではなく、した人に聞いてもらわないと。

清寺さんは僕のを領を得ない答えに「ふーん。そっか」と曖昧に頷くと、自身の後ろにあるテレビに向き直って電源スイッチを入れ

た。あれ、ちゃんと動くのか？ という僕の心配をよそに、テレビの画面はブツンという鈍い音を立てて明るくなっていく。

にしてもこの人、自分から始めた話に興味失くすの早いなあ。まあ僕自身、掘り下げたい話じゃないから引き止める気はないけど。特にすることもないので僕も何気なしにテレビを見始める。そこには少女が背を向けた男にもたれ掛かっているところを後ろから撮った画が映っている。

今の時刻を把握してはいないけど見た感じから、昼ドラかなんかな？ と思って見ていると、少女が男から離れ、それと同時に男は地面に崩れ落ちた。そして、わずかに身体を震わせている少女が言った。

『シ、シンヤが悪いんだから、ね。シンヤが、私を裏切ったりするから、だから』

……なんか、少し前に聞いた覚えのある台詞だなあ。

背筋に冷たい気配を感じつつ、淡々と続いていく映像を見ていると、それはやはりと言うべきか、僕の知っている内容だった。

間違いなく、僕が殺された時の映像、ですね。

……なんなんだよこの見た目に反しまくったハイテク家電は。一体どういう原理だ。

「んー、これってつまりー……痴情のもつれ？」

「違います……」

「あれ、そうなの？ でもなー、これはどう見てもなー」

僕の残念な遺言シーンの前に映像が砂嵐みたいになってしまったのだから、そう思われても仕方がないのかもしれないけどさ。でも良く思い出してくださいよ。

「僕、最初に名乗りましたよね、一応。僕の名前覚えてないですか？」

「いやー、覚えてるよ。兎川君もハルちゃんなんだねーっていうやり取りしたし。でも、友達からはシンヤってあだ名で呼ばれてるのかなーって」

「呼ばれてませんよ。友達には大抵　まあ、普通の呼ばれ方されてますから。遥とか」

「そっかー……ん？　じゃあー、なんであの子にはシンヤって呼ばれてたの？」

「だから、間違えたんじゃないですか？　そのシンヤ君と僕を」

これを聞いた途端、清寺さんはちゃぶ台をバンバン叩きながら体を震わせた。分かりやすく言い換えるなら、大爆笑している。ちくしょう。

清寺さんを見るのに耐えかねて、ふと視線を隣に向けると、烏文字さんと目が合った。

「……あの、今の全部見たり聞いたり、しました？」

「ええ」

彼女は眉一つ動かさずに答える。瞑想してると思ってたのに。思ってたのに！

「そうですか……」

いいけどね。どうせもう烏文字さんの僕に対する評価に下がる余地はないだろうから。

「さーて、じゃあ次は烏文字君のをー」

人違い殺人事件にはもう飽きたのか、清寺さんがまたテレビと向かい合いダイヤルのようなものを回し始めた。口振りからすれば今度は烏文字さんが死んだ時の映像が

「痛あつ！　いや痛くない。痛くないけど……え？　ちょ、なにこれ？　烏文字さん？」

テレビに再び何かが映ろうとした時、僕は烏文字さんに顎を掴まれて強引に明後日の方向を向かせられた。思わず痛くもないのに痛いとか言ってしまうほど突然に。

「あー、確かにこれは見ない方がいいかもねー。うん、烏文字君はやさしいなー」

それって、烏文字さんは僕に自分が死ぬところを見せたくなかったってこと？　まあ、よくよく考えてみれば僕も人が死ぬところな

んて好んで見たくはないけれど。

「テレビを消していただけませんか」

「そだね。余計なこととしてごめんね」

電源を入れた時と同じブツンという音がして恐らくテレビの映像が消えてから、烏文字さんはようやく僕の顎を解放してくれた。うん、前を向けるって素晴らしい。

「それにしてもさー、烏文字君はどうして電車に立ち向かおうと思っただの？」

「……台無しじゃないですか。何のために烏文字さんが　え？
電車……電車？」

戦車じゃなくて？　確かに電車って聞こえたけど……まあ、いくら戦時中でも女学生が戦車と対峙するシチュエーションはないか。うつん、なんか、思ってたのとだいぶ違うな。

僕と清寺さんが互いに相手の言っていることが理解できないという顔をして向かい合う。そうしてしばらく見つめ合った後、僕らの視線はある一点に向かった。

「……私にどうして欲しいのですか？」

「いや……えと、もう聞いてしまいますけど　烏文字さんは電車でその、なんですか？」

「ええ」

「そう、ですか……あの、ちなみにそれは、いつ頃のことですか？」

「今朝よ」

「今朝！？」

あれ？　あれ！？　いや、そりゃあ、僕が勝手に思ってたただけなんだけど、さ。じゃあ、じゃあさあ、おもいつきり今の人ってことなの？　烏文字さん。ええ、今時こんな人いるかなあ。んん、でも実際にいる、んだしなあ。

「そんなに驚くようなことかなー？　兎川君だって今朝でしょ？」

「え？　ええ、そうですね。なんか、こう、なんででしょうね？　あはは」

今度は僕が二人の視線を一身に受けることになった。なんだこいつ、という視線を。

そうか、昔の人じゃなかったのか……あ、そういえば今思い出しただけ、烏文字さんはゲーム好きだって言ってたんだ。そんな昔にゲームなんてあるわけないんだから、そうじゃん。なんで昔に死んだ人だなんて思ったんだろ。

「でー、でー、烏文字君对電車の理由はー？」

ああ、この人まだこの話する気満々なんだ。さっきまで怒られそうだとか言ってたのに。

「寝惚^{ねぼ}けていたので」

烏文字さんも普通に答えるんですね。いやちよつと待って。何それ？　どんな状況？

「あの、寝惚けて電車に立ち向かったって………どういことですか？」

聞いていいものか迷ったけれどあまりにも気になったので　僕も人のことは言えず　結局聞いてしまった。さっぱり見当つかないんだけど。烏文字さん、どこで寝てたのさ。

「あの駅で電車を待っている時にうとうとして、気がついたら線路の上にいただけ」

「……いや、そんなこと………あります？」

「実際そうだったのだから仕方がないでしょう」

「人違いの人に言われたくないよねー」

「………でしたね」

考えてみれば僕は人のことをどうこう言える立場ではなかった。清寺さんにどうこう言われる筋合もないと思うのだけど。

「ハルちゃん来ないねー。忘れてんのかなー」

僕らが死に至った要因を聞き終わってからしばらくした後、清寺さんはいかにも退屈だという様子で後ろ手に体重を預け、天井を仰いだ。

僕はその姿を見て、どうせ暇なら今度はこの人に僕の話に付き合ってもらおうと思った。

「あの、清寺さんに聞きたいこと　　と言つか教えてもらいたいことがあるんですけど」

「なーに？」

「僕らって、なんでこうなっちゃったんでしょうか？」

「んー？　ハルちゃんは教えてくれなかったんだ」

「いえ、説明してはもらったんですけど、何一つ分からなかったの
で」

「なるほどねー、ハルちゃんは言葉が足りないところがあるからなー
そういう問題ではなかったような気がするけど。まあいいや、言
つても始まらないし。」

清寺さんはしばらく腕組みをして「うーん、なんて言えばいいん
だろ」とちゃぶ台の中心を見つめてから、ふと顔を上げて言った。
「神様っていると思う？」

この人はこの人で説明下手なのではないか、という気がすごくし
てきた。

「さあ……いない、と思いますけど……」

「それがねー、残念ながらいるんだよねー」

別に残念ではないと思うのだけど。いると何か不都合なことがあ
るのだろうか。

「昔々あるところに神様がいました」

ええ……急に昔話始まっちゃったんだけど。なんで？　なんで神

様の話なの？

「神様が暮らす世界はことは別の遠い遠いどこかで、そこは……んー、なんて言えはいんだろ？ うん、数え切れないほど沢山の本が並んだ図書館のようなところでした。この図書館の本には、あー、世界の……なんだろ、決まり、約束事？ のすべてが書かれていて、退屈だった神様は来る日も来る日もそれらの本を読んで過ごしました。しかし、数え切れないとは言っても限りはあるもの。ある日、神様はとうとうすべての本を読み終えてしまったのです。神様は困りました。このままではこれからずっと退屈な毎日を送らなくてはなりません。神様は退屈しないですむ方法を考えました。考えて考えて考えて、そして遂に一つの答えを見つけたのです。今まで読んできた約束事を元に別の世界を創り、それを眺めることにしよう、と」

すっごい見られてる。まあ、僕に向かって話してるんだから当然といえば当然だけど。

「ここまでいい？」

「いいって……はあ、まあなんとか。話の筋くらいは」

話の意味はまるで分からないけど。

「神様は自分の世界を創るための領……うーん、世界の元となるラクガキ帳を図書館の本棚の中に加えました。^{トゥエルフ・コード}？ 創造の秩序？ と名付けられたこのラクガキ帳は あ、僕らが勝手にそう呼んでるだけなんだけどね？ えーと、このラクガキ帳にはそこに書かれたことがその通り形になる、という力がありました。神様はこの力を使って新しく世界を創り、それを眺めて過ごすことにしました。しかし、それからしばらく経ったある日、神様のところへもう一人の神様が……神様って一人二人って数えるのかなー？ まあいいや。別の神様がやって来て、そんなことをしてはいけない。そのラクガキ帳を捨てなさい、と言いました。図書館では本棚に勝手に本を足すことは禁じられていたのです。ですが退屈に戻ることを嫌った世界を創った神様……あー、長いから悪い神様ね？ 悪い神様はもう一人の

神様　善い神様の言うことを聞きません。考えの合わない二人はとうとう喧嘩を始めてしまいました。が、お互いに触れることができないう彼らは、ただ言いたいことを言い合うことしかできません。二人が言い争いに疲れた頃、悪い神様がある提案をしました。それは、このラクガキ帳で創った世界にお互いの駒を置いて、それを使って勝負をしよう、そして負けた方は勝った方に従う、というものでした。善い神様は規則を破って存在するラクガキ帳を使うことをためらいましたが、このままではどうにもならないという思いから提案を受け入れることにしました。こうして世界に？混沌の御使い？と？理法の眷属？というそれぞれの神様の僕が生み出され、彼らは決められた通りに日々争いを繰り返しました。そして時は流れ、多くのイーヴィル　悪魔でいいかー、もう悪魔と天使で、悪魔と天使が現れては消えていきました。しかし、決着がつく気配はまったくありません。戦況はいつも一進一退の連続だったからです。まるで意図的にそうなっているかのように。時間が経つにつれて悪魔も天使も次第に疑いはじめました。神様達はただ楽しんでいただけなのではないだろうか、と。悪い神様はもちろん、咎めたはずの善い神様も結局は退屈で、最初はどうであれ今となってはもう悪い神様と同じように楽しんでいる、そう思うようになっていきました。そうして悪魔と天使はだんだんと戦うことが馬鹿馬鹿しくなってきたので、彼らは争うことをやめました。めでたし、めでたし「めでたいですかね！？」

なんか最後の方ぐだぐだな感じがしたけど。

「平和になっただじゃない」

平和というか……めんどくさくなって全部放り出しただけのような気が　でも、うん、争ってるよりかはいい、のかなあ？　じゃなくて

「あの、結局なんで僕らが幽霊みたいになっただけかが全然分からないうんですけど」

「あー、そういえばそんな話だったねー」

忘れてたんですか。結構なボリュームの話をされてましたけど、あれがまったく関係ないってことはないですよな？

「とりあえず、今の話を踏まえた上で……そうだねー、デジカメってあるじゃない。デジタルカメラ。あれをさっき言ってたラクガキ帳だと思っただけじゃない。デジカメで写真撮ると中にデータができるでしょ？ それがラクガキ帳に？元？を書いた状態だと思っただけ。でー、その撮った写真をプリントアウトするのが？元？から僕らが今いるこの？こつち側の世界？を創るってことになるのかなー」

「はあ」

またよく分からない話になってる気がする。さっきの話が無関係じゃないのは素直に嬉しいんだけど。でも、それも理解できないと意味ないしなあ。

「でね？ その？元？と？こつち側？の関係をデジカメで説明するとしてー、デジカメで撮った写真 例えば赤いりんごを撮ったとしてー、それをプリントアウトします。そしてその後データ側のりんごの色を赤から青にしちゃったとするでしょ？ まあ、この際は方法置いておくとして、変えちゃったとする。そうするとー、プリントアウトした方のりんごの色も青になっちゃうの。これは逆もそうだね、プリントアウトした方を変えた場合も、それに合わせてデータの内容が変わるんだよねー」

「ええーと……要は、二つは対になっていて常に同じ状態になる、ということですか？」

「そういうことなのです」

まあ、なんとなくは分かったけど……やっぱり関連性が分からない。

「さあー、これで兎川君と烏文字君がどうなってるのか分かったかな？」

「いいえ」

「張り合いないなー。もっと考えてよー」

「そう言われても……」

今ので分らないといけなかったんですか。どう考えても必要なパーツが足りてないと思うんだけど。それも圧倒的に。

「私達はラクガキ帳の中だけの存在になっている、ということですか」

「おー、烏文字君、正解！」

待ってー！ー！！置いていかないでー！ー！！ずるいよ。あんな説明で何で分かるの？ だいたいどう見ても全部聞き流してるようにしか見えなかったのに。いっつも急に参加して来るんだもんー。

「全っ然分らないんですが……」

何の臆面も無く全面降伏を表明する。正解が出た後ですら微塵も見当がつかないのだから、それも仕方がないだろうと思う。

「うーん、さっきの例えで言うところ、そうだねー、プリントアウトした方をビリビリーっと破かれちゃったんだけど、デジカメの中ではそのままデータが残ってる状態、って言えばいいのかなー。だから、二人は今ラクガキ帳の中でだけ動いてるんだと思えばいいと思うよ」

「え、でも、デジカメの写真とプリントアウトした写真は同じ状態になるって言うてたじゃないですか。なら、プリントアウトしたやつが破れたら中の方も　その、壊れるんじゃない……」

さっきの話と今の説明の辻褄つじつまが合っていない。どういうこと？

「本来はそうなるはずだったんだけど、今回はちょっと事情があってそうはならなかったんだよねー」

「じゃあ、特殊なケースなんですか？ これって」

「そうだねー。僕が知る限りではこんなこと初めてじゃないかなー。そんな貴重な体験だったんだ、これ。全然嬉しくはないけれど。」

「でも、なんで僕らに限ってそんなことになったんですか？」

「いやー、別に兎川君と烏文字君が特別っていうわけじゃなくて、なんて言うか　とぼっちりを受けたのが二人だけだった、ってい

う話なんだけどねー」

あはは、と清寺さんは楽しそうに笑っている。僕が聞いた限りでは笑える要素は特になかったように思うけど。

「とばっちり、なんですか……」

「うん。完全に。どうしよ、これを例えるには……これかなー、うん。兎川君が病院に行ったたしよ。兎川君はちよつとした、何だろう、まあ、かすり傷程度の怪我で診察を待ってたのね？ でもその間に病院の近くで大きな事故が起きてしまいました。その後すぐに大怪我をした人達が大勢運び込まれてきたので、お医者さんはその人達を最優先で治療しました。この治療っていうのが、ラクガキ帳の内容を？こつち側？であつたことに合わせるってことだと思つてね？ そして、お医者さんは大怪我をした人達の治療に追われている内に、兎川君を治療することをすっかり忘れてしまったのでした。めでたし、めでたし」

「だから、めでたくないですってば」

「まあいいじゃない。なんか気に入っちゃってさー」

実際ぼんやりとは理解できたからいいんですけど。

要は……？こつち側？で死んだ僕らがラクガキ帳の中でも死んだことになる前に　まあ、何かがあつたってこと、だよな？

「それで……僕らはいつになったら思い出してもらえるんでしょうか」

「んー、多分もう無理だろうねー。さっきは忘れたつて言っただけど、正確には記憶から完全に無くなつちやつたつていう状態だから。無いものはいせないでしょ？」

そりやあまあ、無いものは無いですからねえ……いや、えーと、それって

「……僕らずっとこのままなんですか？」

「んーん、そうじゃないけど……この話はかなり長くなるなー。まずどこから　」

「じゃあいいです」

このままじゃないって分かればそれでいいや。またよく分からない昔話が始まって、ぽかんとするだけだろうし。

自分からいろいろ質問したくせに素っ気ない僕に、清寺さんは「そうですかー」と口をとがらせながら、僕らに出した後自分の手元に戻した湯呑みを一つ、再び僕の前に置いた。

なんだろう？ と首をかしげつつ湯呑みを手に取る……やっぱり持てないじゃん。もしかして飲めるようにしてくれたのかと思ったのだけれど。えっと、仕返しですか？ 実はかなりイラッとしてたんだろうか。

「見えてはいるんだよねー」

「はあ？ 何がですか？」

急に意味の分からないことを言われてさらに戸惑う。この人は何がしたかったんだろう。

「湯呑み、と言うか全部」

清寺さんは一度湯呑みを指差した後、その指先を上に向けてくるくると回す。

僕らに湯呑みが、全部が、普通に見えてるって言いたかったの？

この人。

「なんで今更そんなことを……？」

「うーん、別にラクガキ帳の中にしかないからってさー、そんなの関係なく普通の人はラクガキ帳の中を覗くことはできないはずなんだけどなー。なんで？ こっち側の目？ が無いのに見えるのかなー？ 」
と思つて。動かせないんだから、書き換えることができないっていうのはそのままみたいけど」

「はあ、そうですか……あ、でも動かせるものもありますよ？」

僕はブレザーの内ポケットから携帯を取り出し、一度かざして見せてから、清寺さんに差し出すようにちゃぶ台の上に置いた。

清寺さんは、最初は目を見開いて驚いていたけれど、すぐに合点がいったのか、

「あー……あー！ そういうことか」

嬉しそうに、ぱんと両手を合わせると、ちゃぶ台に置かれた携帯を僕に返して、続けた。

「そっかそっか、なるほどねー。そうなってるんだ。考えてみれば服 いやいや、手や足だって動かしてはいるんだから、書き換えもいたんだねー。あまりにも当たり前前にそうなってたから気付かなかったなー」

了解了解ー、と一人頷きながら、清寺さんは携帯を動かしたついでなのか僕の前の湯呑みをまた自分の手元に戻す。別にもうそのまま置いとけばいいと思うんだけど。

「ええと、結局どうなってるんですか？」

何がなんだかなのですが。聞いても何がなんだかになる可能性は否定できないけど。

「えっとねー、死んでるっていうのは意識がない状態、と言うか寝てる時と同じ扱いってことなんだろうね。寝てる間は普通の人でもラクガキ帳の中身を見たり書き換えたりできるようになってるからでも……そう考えると結構造りが甘いんだなー。よっぽどのことがないと死んだらすぐに別の領域に移されちゃうから、死んだ状態のまま？こつち側？にいる人のことなんて最初から考慮されてないんだね」

「はあ……えーと、よく分かりませんが でも、最初の方で言ってた寝てる間は普通の人でもラクガキ帳を書き換えてるっていうのは、なんか問題がある気がするんですが……」

「あー、もちろん神様みたいに好き勝手はできないよ？ 人は寝てる間に記憶を整理してる、って話聞いたことない？ まあ、だいたそんなようなことかなー。ラクガキ帳は、兎川君ならここは兎川君のスペースですよっていう風に区切られてて、そこを？こつち側？が休んでる間に整理整頓しましょう、っていうことで一時的に弱い権限がもらえるの。でも？こつち側？にいる人、ある物の？現状を維持する？っていう権限の方が強いから、物を動かせないのはそういう理由かなー。見るだけなら制限なんか無いからそういうの関

係ないしね」

「なるほど」

とりあえず分かった振りをしておいた。まったく分からなかったとは言わないけれど、改めてこれを人に説明しろと言われたら何一つ説明できる気がしない。

「まあー、こんなこと分かんなくても別にいいと思うよ？ 使うことないだろうしねー」

ばれてる……僕は思いつきり表に出るタイプだからな。

「あー、あとついでで、ですね？ なんかさつきから質問してばかりで申し訳ないですけどお　さつき言ってた、病院の近くで起きた大きな事故、ってなんなんですか？」

適当な反応をごまかすように　まあごまかせていないだろうけど　僕はいまだ残っている疑問について尋ねた。こうなっている理由の、本当の根っこがまだ分からない。

「病院？　の事故？　なにそれ？」

……忘れていらつしやる。自分で持ち出した例えだったのに。

「いや……少し前の説明で、僕が順番待ちしてる間に忘れられたっていう　」

「あー、はいはい、あれね。あれはねー、今日　」

不意に、ドバン！　という派手に硬いもの同士がぶつかったような大きな音がして、何事かと思ひ音の聞こえた方を見ると、ほとんど忘れかけていた存在　加賀晴子さんがあの分かりづらい入口のドア？　を蹴り開けた　多分　ところだった。

「耕四郎おおおー……！！」

すごい剣幕で清寺さんの名を叫ぶと、足を踏み鳴らして僕らのいる六畳間に迫る。言うまでもなく、めちゃくちゃ怒っている。

「あんたはあ……この子のことちゃんと見ててつつたわよね？

私言ったわよねえ？　なのに、なんで迷子になつてんのよ！」

見れば、加賀さんの背後には彼女に手を引かれて歩く子供　僕がここに来る途中で出会った男の子がいた。つまるところ、どうい

う関係なんだろうか。

「そんなのハルちゃんに僕に任せるからでしょー」

なんという……なんという強靱な精神……詳しいことはよく分からないけれど、でもどう考えてもこの人が悪いだろうに。しかもついさっき同じようなことで加賀さんを非難していたというのに。それでも、何の躊躇も無く、これ。

加賀さんがああいう人になったのはこの人のせいなんじゃないだろうかと思えてきた。

「ハルちゃんって呼ぶんじゃねーって、何度言えば分かんのかあんたはー！ー！」

そっちなの？　と言いか清寺さんにすら許さないのか。何人たりともなのか。どっちにしろ呼ぶ気はないから別にいいんだけど。

「お客さんの前で大きな声出さないでよー。恥ずかしいなーもう」

「あーら、そう。だったらその大っ事なお客様がなんだってあんな辛気臭せーところを不安げな顔で一人ウロウロしてたのか、納得のいく説明をしていただけんのよねえ？」

既に僕らの目の前にいる加賀さんは空いている方の手で清寺さんの頭を掴んで、ぎぎぎ、という不安の残る音を鳴らしている。対する清寺さんは、それをまったく意に介した様子もなく、平然と答えた。

「トイレに行きたいって言うから」

「なんで一人で行かすの、つつてんのよ」

「トイレくらい一人で行ける歳でしょー。ついて行ったら逆に失礼だと思っけどなー」

「行けなかったから迷子になってたんでしようが。普通の家と一緒にすんじゃねーわよ」

「この家無駄に広すぎるよねー。ほんと困っちゃうなー」

「私らは家じゃなくてあんたに困ってんのよ」

……不毛だ。会話が成立しているようでしていない気がする。

しかし加賀さんはこういうやりとりに既に馴れてしまっているの

か、案外あつさりと清寺さんの頭を離すと、男の子と一緒にちゃぶ台の前に腰を下ろした。

「……？ あんたなんで一人で三つも湯呑み使ってるの？」

「はー、まったくもー。何を言ってるのさハルちゃん。そんな意味の分からないことはしませんー。ハルちゃんと天野君の分ですー」
この人平然と嘘つくなあ。さっきの話全部嘘つてことないだろうな。

「ふうん、あんたにしては気が利いてんのね。それはそれとして、二回言っただな？」

加賀さんは何の疑いもなく目の前に置かれたお茶を口にして、そして当然のように、

「ぬるっ！ なによこれ！？ あんた、これいつ淹れたのよ？」

「分かんない」

「いつ淹れたのか分かんねーようなもんを人に出してんじゃねーわよ」

「えー、飲めるでしょー」

「自分で飲めつつってんのよ！」

いつになったら僕らの話になるのかなあ。当分かかりそうだなあ、これ。そういえば烏文字さん、静かだな。暇すぎて寝てるんじゃないのか……あー、恒例の景色を眺めるタイムですか。ここからじや空くらいしか見えないけれど、まあ、付き合っていられない、つてことなんだろうな。むう、いつの間にか雨降りそうな空模様になつてる。天気予報そんなこと言っ

「あんた聞いてんの？」

「聞いてませんでしたよ」

なんで急にこっちの話になってるのさ。僕が悪いの？ これ。僕が悪いんだろうな……

既に見慣れた感すらある呆れ顔で、加賀さんは深いため息をついてから、

「もう一度だけ言っわよ？」

自身の隣に浮かない感じでちょこんと座っている男の子、確かに天野君の頭に手を置いて言った。

「あんた達にはこの子をぶっ殺してもらおうわ」

……この人はとうとう頭がどうかおなりになってしまわれたのだろうか？

「あの、通報した方がいいんじゃない……」

「なんで？」

何も、加賀さんのぶつ殺してもらおう宣言にこんなことを言っているわけではない。まあ、あれはあれで通報した方がいいような気もするけれど。でも今問題にしているのはそのことではなく、僕らの目の前の光景の方だ。

清寺さんが疑問符を返してくる理由がさっぱり分からないけど、今日の前に、今朝僕が見たものと同じにしか見えないもの 要するに死体が転がっているのだ。それも二人分。

加賀さんはあの正気を疑いたくなるような発言の後、一度隣の不気味な部屋に戻り、そして程なくして一見よく分からないものを両手に一つずつ持って、それらを引きずりながら帰ってきた。それが、まあ この死体だったわけだ。

「そのままじゃいろいろと不便だから、とりあえずこの中に入ってもらうわ」

「中に、入る？」

意味は分からないながらも、加賀さんの指し示すそれらを改めて注意深く見ると

「これって…… 僕らの死体、ですか？」

床に生気の欠片もなく横たわる人の形をしたモノの容姿は、それぞれが僕と烏文字さんそのものだった。ただ、なぜか烏文字さんは男物のスーツ、僕はパジャマ？ を着ている。

「生きてた時みたいにラクガキ帳と？ こっち側？ とでちゃんと対の状態になるように新しく造った体だよ。二人が失くしたのと、まあだいたい同じようにはなってるかなー」

すっかりぬるくなったお茶をすすりながら、清寺さんが代わりに説明してくれた。当の加賀さんは「ラクガキ帳ってなによ？」と言

って、不思議そうな表情を浮かべている。

要するに代わりの体、か。でもだいたい同じって……それって、人間を造った、ってこと？ そんなこと、できるの？ この人達が普通でないことはある程度理解したつもりでいたけど、だとしてもそれは……確かに見た限りでは人にしか見えないのだけれど。

「まあよく分かんねーけど、そういうことだから。早く入って」

「触るだけで後は自動的に自分の体になるからね」

「はあ……」

二人にまくし立てられて、今朝失くしたものの代わりを見下ろしながら生返事をする。実際このまま幽霊でいるよりいいとは思っただけど、でも、どうしてもこれが気になる。

「あの、なんで僕はこんな………なんと言うか、だいぶたけ丈の余った服なんでしょうか？」

「ここにはあんたみたいなちびっこに合う服なんかねーのよ」

これ、この人達の自前の服なのか。人間が造れるなら服くらい簡単に作れそうなものだけど。

「いや、でもパジャマ、ですよ？ これ。せめて加賀さんが着てるようなジャージに」

「なんでさつき会ったばかりの奴なんか私に私の大切なジャージを貸してやんなきゃいけねーのよ？ つーか、せめて、って何？ ジャージ馬鹿にしてんの？ やんの？」

「すいませんでした……」

ジャージ大好きか。別にいいけど。全裸でないことに感謝しよう。こうなったらもう。

「なぜこの子を殺すのですか？」

僕が自分の体に触れようと動いた時、依然座ったまま姿勢一つ崩さなかった烏文字さんが、唐突に、造作もなく聞いた。

僕らと同じ姿をした死体もどきと、それについての僕らの会話になど微塵の興味も示さずに、僕があえて考えまいとしていたことを、あの男の子をまっすぐに見据えて。

「説明は長くなるからしねーけど、簡単に言えば　邪魔だから、かしらね」

問われた加賀さんも、週末の予定でも答えるように平然と返す。
殺人の理由を。

「さつき悪魔と天使は元々争ってたけど今は仲良くしてるって言ったじゃない？　それに関することだね。まあ要するにー、この子がいると悪魔と天使がこれまでにみたいに仲良くできなくなりそうだから　そうすること」

「あんたさつきから何言ってるのよ？　天使と悪魔だとか、ラクガキ帳がどうしたとか。私がいねー間に頭でも打ったの？」

「失礼だなー。？創造の秩序？^{トゥエルフ・コード}のことや僕らのことをそういう感じで二人に説明してたの。あー、ちなみに僕らは悪魔だけど天野君は天使ね」

最後の方は加賀さんではなく僕らに向けて、清寺さんが説明する。だけど、今はそんなことどうだっていい。

「自分達で手を下さない理由はなんですか？」

烏文字さんは清寺さんには一瞥もくれずに、今度は加賀さんを見つめて問う。

「その子そう見えてめちゃくちやつえー……や、強いつてのもちよいちげーかもだけど。まあなんつーか、厄介な相手なわけよ。だから、ここに来る途中に言ったでしょ？　ええと、なんつったっけ……そう、捨て駒にするって」

確かにそんなことを言っではいたけれど、だけど子供を殺す手伝いなんて聞いていない。

「ここに来るまでにすごいおっきな穴が空いてるの見なかった？」

「……見ましたけど」
女性二人は互いしか相手にするつもりがないように向かい合ったままだったので、清寺さんの脈絡のない問いかけにはすこし遅れて僕が答えた。

「あれはねー、今朝天野君が空けたんだよ」

……どういうこと？ 何をしたらあんな そりゃ僕らが見える
時点で普通の子じゃないんだろつとは思ってたけど……あ、でも
「もしかして……さっきの、病院の近くで起きた大きな事故ってい
うのは」

「あー、そうそう。天野君が生まれたのとほぼ同時にあの穴が空い
て、それで二人は忘れられちゃったの」

そう、か。だから今朝死んだ僕は 僕らは……今朝？ は？
なんか今、変なことを

「生まれた？ この子が、今日、ですか？」

「そうだよ。少し前にね。あーでも」

「この子に抵抗する意思があるようには見えませんが」

烏文字さんは僕らのやり取りをまるで相手にせず自分の話を進め
ていく。

「ああ、ねーわよ。実際どうかまでは知らねーけど。まあどつちに
しろ、これはもうこの子自身も、この子の仲間も、当然私らも、全
員納得済みの話だから 一方的にこっちがやるだけよ」

天野君と呼ばれた男の子は、自分を殺す算段をする大人達の前で
ただじっと、身じろぎ一つせず座っている。話の内容が理解できて
いないということはないだろう。なら、加賀さんの言う通りそれを、
そうされることを当然だと受け止めているとでもいうのだろうか。

「本人が納得しているのであれば、自分で始末をつけてもらえばい
いのではないですか」

これに加賀さんは一度大きくため息をついて「そうね」と同意し
た後「でも」と続けた。

「少し、欲をかこうと思ってるのよね」

視線は烏文字さんから外さずに、清寺さんを指差してさらに続け
る。

「こいつからいろいろと説明されたみたいだけど？ 混沌の御使い？
ライトイス・レイスと？ 理法の眷属？……私らやこの子の仲間がどうやって増えるのか
は、聞いたのかしら？」

「いいえ」

「死んだ人間を仲間にするのよ」

「だから今日生まれた天野君が　？天野君？なんだよねー」

……つまり元になった子がいるってことか？　いや、というより
本人、なのか。

「でも、もちろん全員じゃねーわよ。その中で適性の高い、要は使えそうな奴を適当に引つ張ってくんの。死んでから完全に消えて無くなるまでの間に、まあ？保護？してね。つってもこれはそういう仕組みがあつて勝手にそうなるから、私ら自身は何もしねーんだけど。で、この仕組みの中で今困つてるところってのが　」

加賀さんはそこで一度言葉を切つて、握り締めた拳から一本だけ伸ばした親指で自身の首を、とんとん、と示しながら、

「自分で死んだ奴は問答無用で除外される、つてとこなのよ」

言葉通り、どこか困つたような表情を浮かべて言つた。

「当然と言えば当然だけど。死にたくて死んだ奴に、もっかい生きろつて言うのもねえ」

よく分からないけど……これつて要するに、今は天野君が加賀さん達と敵対　そうは見えないけど　しているから、その仕組みを使つて自分達の仲間にしたいつてこと？　でもそれなら

「そんなの、別に説得とかそういうことで解決できる、じゃないですか」

相手に争う意思がないのなら、それはそんなに難しいことじゃない、と思つけれど。

「耕四郎がこの子は今朝生まれたつつたでしょ。この子はもう既に？創造主？共の眷属イクナイブルスなのよ。眷属けんぞくになった奴が死んでもまた眷属として蘇る、なんて仕組みだったら永遠に終わんねーでしょうが。

眷属が死ねば、消えるだけよ」

「だったらなおさら　」

「眷属が死んでも蘇りはしねーけど、今言つた仕組みを通りはすんの。通つて　必ず不適格になる。だけど、通つた奴は誰だろうが

解析はされる。私らが欲しいのはそれで得られるかもしれないこの子の？力？の情報、ただそれだけよ」

烏文字さんとの会話に割り込んだ僕に、加賀さんは鋭い、だけれど憐れむような目をして告げる。

「私はこの子と仲良くしてーわけじゃねーの」

言外に、理解できない奴は引っ込んでいろ、という意味をにじませて。

「他者が手を下すことが必要な理由は理解できました。ですが、それでも代行が必要な理由はないように思います」

「ま、それはその通りなんだけど……念のためってことね。いざとなったら、ってことがあるかもでしょ？ この子の？力？で一つ判ってんのは、一回使うと次使うまでにはある程度時間を置かなきゃいけねーみてーなのよね。だから」

「捨て駒、ですか」

「そゆことね」

いざ殺される段になって天野君があの子の穴を空けた様な反撃をした場合返り討ちにあうから、本当に天野君に殺される気があるのかどうか試させる、ということか。

殺される気があればそのままあの子は死ぬ。実はなくて抵抗したとしても、その時消えるのは僕か烏文字さん、その間に加賀さんか清寺さんがあの子を殺す。

確かに、これ以上ないってくらいの捨て駒だ。

「ここにいる全員が一度に消える、ということは」

「当然あるわよ。そうなったら消えた範囲の外にいた奴が殺しに来るってだけ」

「外側がなければ？」

「終わりでしょ」

……自分達も捨て駒、ですらないのか、この人達は。どこまで本気で言っているのか分からないけれど、これからやることに何もかも、この世のすべてをそっくり賭け金にして望むって、今そう言っ

たんだよな、この人は。

「私には何もしないでおくことがもつとも無難のように思えますが」
「言いてーことは分からなくもねーけど、私はそういうことなかれ主義みてーなやり方は気にいらねーの。運が良かったら大丈夫、なんてその方がどうかしてると思わねー？」

僕は烏文字さんの意見になんの異論もないけれど、加賀さんはそれを聞き入れるつもりはまったくないらしい。話は終わったとばかりに烏文字さんに背を向け、僕らの体が横たわっている場所のさらに向こうまで行くと、ズボンのポケットに手を入れて、

「さあ、結局ずいぶんと話が長くなっただけど、そろそろ始めましょうか」

一振りの剣を、中世に異国の騎士が下げていたような長大な諸刃の剣を、そんなものが収まるはずのないジャージのポケットから引き抜いて、床に突き立てた。

「なんで床に刺しちゃうのかなー」

加賀さんの挙動を見て、清寺さんがまっとうな内容とはいえ、あまりにもこの場にそぐわぬ緊張感のない声を上げた。この人に場の空気を読むことを要求することがそもそも間違いなのだろうけど。

「どうせあんたが直すんだから関係ねーでしょ」

「だから言ってるのー」

この人達にとって今から行われることは、なんというこのない日常茶飯事のようなことなのか？ 関わっていると頭がよけいに混乱しそудだと思った僕は、二人から目を逸らしてあの子を、天野君を見る。

彼はやはり前に見た時と同じ姿勢のままで、ちゃぶ台の一点いや、何も見てはいないのか、視線を動かすこともなく座っていた。自らの罪を認め裁かれる時を待っている咎人とがひとのよう。そんな風に思えるのはあの人達の話の聞いたから、なのだろうか。

「あと一つ、聞きたいことがあります」

清寺さんと床についた傷の話を続けている加賀さんに、烏文字さ

んはいまだ座ったままで、話はまだ終わっていないと示すように言った。これに加賀さんは清寺さんの相手をするのを止め「なに？」と聞きかえす。

「私達に利点はあるのですか？」

思わず息をのむ。そんなことを聞くとは思っていなかったから。それを聞いて一体

「死人に損也得もねーでしょ」

即座に返ってきた答えに、僕は自分でもよく分からないけれど、安心したんだと思う。でも、まるでそれを見透かしたように加賀さんは「って言いてーところだけ」と続けて、
「あるわよ」

そう言つて、笑った。

どんな？ とは聞けなかった。知らない方がいい、烏文字さんもそう思つたのかどうかは分からないけれど、僕らはどちらもそれ以上は求めなかった。だけど、

「私の役に立つた奴の望みを叶えてやるわ」

加賀さんは止めてはくれなかった。聞かれたことに答えているだけなのだから当たり前なのかもしれないけれど、でも、この人はあきらかにそれ以上の意志をもつて、繋げる。

「まあでも、死人の望みなんて一つよねえ？」

問うた本人である烏文字さんではなく、僕を見て、さも楽しそうに。

つまりは、あの子を殺した方を生き返らせてやる……そう言いたいのか。他人を犠牲にすればお前だけは助けてやる　そういう取引をしようと、誘っている。

加賀さんは、烏文字さんに負けず劣らずの美人なのだけど、ただ今この人はそれを台無しにするような、とてもいやらしい笑みを浮かべている。それを見て、僕はこの人が魔王と呼ばれていることを思い出して、そして、今更ながらに思った。

まるでおとぎ話のようだと。

僕はようやく、ここに至ってようやく、恐怖を覚えた。

「そんなこと」

できるはずがない。反射的にそう口にしようとした。何に対しての反論なのか自分で理解できていなかったけれど、それでも言おうとしたその時に、恐怖はさらに加速していく。

「そうですか」

烏文字さんが、立ち上がる。呆然と立ち尽くす僕の横をすり抜けて、自分と同じ姿をした体に何の躊躇いも見せず、触れた。それと同時に烏文字さんの姿が何の前触れもなく消え失せ、程なくして、横たわっていた方の彼女がゆっくりと起き上がった。

「調子はどう？」

「大丈夫です」

病み上がりの人間が交わすような会話をしてから、床に刺さった剣を引き抜く。そして、振り向いた彼女の視線の先には、あの子がいる。

「一応、その体の使い方を簡単に教えとくわ」

踏み出そうとしていた烏文字さんの肩に加賀さんが手を置いて引き止める。それから二人はしばし無言で見つめ合い、そのまま十秒も過ぎた頃に再び離れた。

今のやり取りの意味はまるで分からないけれど、僕は剣を携えてたすさ歩を進める烏文字さんに対して立ちふさがるように、天野君の前に立つ。既に体を手にした彼女の進行を幽霊のままの僕が止めることはできないのだろうけど、そう思っても退く気にはならなかった。

「本気、なの？」

あつと言う間に目前まで迫った烏文字さんに、僕はそんなことしか言えなかった。聞くまでもないことだ。冗談でこんなことをする人じゃないことぐらいは知っている。

「本気でこの子を……殺す、の？」

分かってはいても、聞かずにはいられなかった。冗談でする人じゃない。だけどそれ以前に、平然と他人を害する人のわけがない。

そう思っていたから。

「ええ」

極めて短く、しかし明確に、聞きたくはなかった意思を提示される。そこにはほんのわずかの迷いも感じ取れない、この人らしい返答だった。

「っ……じゃあ、やめて、って言ったら、やめてくれる？」

なんの意味もない。僕は一体何がしたいのだろう。この人はもう僕が何を言ったところで曲げることはしないだろう。それなのに、僕はこれ以上何が聞きたいんだ。

「あなたが先にする、と言いたいのか？」

僕の意図をはかりかねたのだろう。烏文字さんは僕が思ってもいなかったことを尋ねてきた。無理もない。聞いた本人ですら分かっていないのだから、相手が理解できるわけがない。

「違うよ。そういうことじゃなくてさ。そうじゃなくて……」

これ以上言葉を繋げられない。無いものは、繋げようがない。

「なら、単純にこの子を殺すな、ということ？」

何も言えないでいた僕に、きつと手を貸してくれたんだと思う。だけど、僕は追い詰められる。その通りだから。僕はそう言ったんだ。でもそこに、この人のような覚悟はなかった。

「そう、です」

結局、ただ逃げるように、答えをしばらく出した。さらに深いところに沈むだけだと分かっている、それでも耐えきれずに。

「どうして？」

そう聞いた彼女は、まだ幼い子供が空が青い理由を尋ねる時のような、なんの他意もない純粋な目をしていた。そんな、一切揺れることのない目を。

「どうして……って、だって、子供だよ？」

「子供だから、殺すな？」

「いや、そうじゃ……なくて、でも」

「……あなたは何がしたいの？」

分からないんだよ。

まるで大人と子供のよう。いたずらをした子供に大人は怒るといふより、なぜそんなことをするのか理解できなくてその理由を聞くのだけれど、子供は何も答えられない。

理由なんてないんだから。

「この子を許す人は誰もいない。恐らくこの子自身を含めても、誰も」

本当に、大人が子供をさすように穏やかに、

「それは、必ず誰かがこの子を殺す、ということよ」

けれどそれは子供に伝えてはいけないような残酷なことで、

「あなたか私が、あの二人のどちらかが、それ以外の誰かが、この子を殺すの」

僕はこんなこと聞きたくなかったけれど、彼女は許してくれない、「だから私が殺す」

この人の行く手を阻んだのは、僕なんだから。

伝えるべきことはすべて伝えた、ということだろう。烏文字さんは両手で持った剣を頭上^{かか}に掲げ、それを天野君に振り下ろすために構えた。

僕はまだ二人の間に立つたままだけど、関係ない。幽霊に剣は受け止められない。触れると同時にほじき飛ばされるだけだ。あるいは、単に幽霊だろうと切り裂ける剣なのか。

どうでもいい。どちらにしろ烏文字さんが天野君を殺めた時点で、僕に先はないのだから。同じことだ。

じつと無言で烏文字さんを見上げる。抵抗の意思表示、じゃない。ただ、この人が今どんな顔をしているのか知りたかった。

澄んだ目。それがとても怖い。人を殺すと決めたこの人がそんな目をしていることが、怖い。

僕が今まで正しいと思っていたことは　この人の前ではなんの役にも立たなかった。

いや、それ以前に、そんなものが僕にあったのだろうか？

鳥文字さんが、剣を、振り下ろす。

体のあちこちが、ずきずきと痛む。

それと同時に感じる固い床の感触で、六畳間の外に投げ出されたことを知る。

うつ伏せの状態から恐る恐る目をあけ、顔を上げた。

倒れた茶だんす。ひしゃげた扇風機。ひっくり返ったちゃぶ台。血に染まった人。

「あんた……何考えてんのよ？」

六畳間の真ん中で僕に背を向けて立つ加賀さんの、その背中から杭が生えていた。

腰の上、腹部の裏側に、大人の腕ほどある金属製の杭、のようなものがその先端を赤黒く染めた状態で存在している。

言うまでもなく、加賀さんの体を貫いて、そうなっている。

「そんなの、わざわざ聞かなくても分かるでしょー？」

まるで変わらない、どこか気の抜けた清寺さんの声が、この上なく不気味に聞こえる。

彼は最後に見た時と同じ場所、パジャマを着て横たわっている僕の体のすぐ隣で、楽しくてたまらないという風に、うふふ、と笑うと、両手を広げ、

「見ての通りの、反逆、っだよ」

最悪の答えをもたらしだ。

一体、何がどうなってるんだ？ この人達は仲間で、でもそうじゃなくなってる

「今後のためにも、理由を聞いておこうかしら？」

「もー、さつきから鈍いなーハルちゃん。もう頭に血が回らなくなっちゃったの？」

楽しそうな気配をあっさりと消し、ため息までついて、ゆっくりとした動作で指し示す。

「その子に決まってるじゃない」

僕同様に何が起こっているのか飲み込めていないのか、座り込んだまま呆然と目の前の加賀さんを見上げていた天野君は、清寺さんが向ける指にびくり、と体を震わせた。

「ああ、そう」

尋ねたはずの加賀さんが、心底どうでもよさそうに言う。

飽きた。そんな気配を漂わせて。自身の体を貫いている杭も、清寺さんの裏切りも、すべては取るに足らないことだと言うように。

「じゃあ死ね」

ぎり、と鈍い音を響かせて、剣を掴む。畳に突き立っていた剣を。それは烏文字さんが手にしていたもの。だけど、あの人は……どこにも見当たらない。

「その体じゃ無理だと思っけどなー」

「こんな程度で私とあんたの差が埋まるわけねーでしょ」

烏文字さんは……あの子に、天野君に、消されてしまった、の？「そういう意味じゃなくてさー。こういうことだよ」

殺そうとするなら、殺されても仕方がない。理屈の上では納得できても、その現実を受け入れられるとは限らない。あの人は元より死人だったけど、でも、ここにいたんだ。

気付けば、視界に杭があった。加賀さんの背中のもではなく別の、まだ刺さっていない、これから刺さる杭。僕に向かってくる、僕に打ち込むために放たれた杭。まだ床に座り込んでいた僕は反射的に立ち上がって避けようとするけれど、とても間に合わない。

逃げられない、そう思っただけで腕で顔を覆った時、僕と杭の間に加賀さんが割り込んで、手にした剣で迫る杭を受けた。しかし加賀さんは完全にはその衝撃を殺し切れず、杭は加賀さんの肩を抉って、僕の横をかすめていく。

「そうなるよねー。なんだかんだ言っただけでやさしいんだからー」

紅く染められた方の腕をだらりと力なく下げている加賀さんを見て、清寺さんは本当に嬉しそうに笑っている。それに対して加賀さ

んは、舌打ちして吐き捨てるように言った。

「鬱陶しいわね。まともに狙いもつけらんねーの？」

「やだなー。ちゃんと狙ってるから、さっきも今もああしたんじゃない。お腹に刺さってるものが見えないのかなー？」

それは、最初の杭も誰かを庇^{かば}って受けたもの、ということなのか。でも、誰を？

烏文字さんが剣を振り下ろした瞬間　あの時思わず目を閉じて、次の瞬間激しい衝撃に襲われた。あれは、この人が僕を庇^{かば}ったから？　天野君は殺す相手、烏文字さんはあの瞬間にはもう……なら自動的に　いや？　ちよつと待って　そうだよ、なんでこの人は

「私の後ろから外れんじゃねーわよ」

背を向けたまま発せられた言葉。だけどそれは間違いなく僕に向けられた言葉だった。

加賀さんは清寺さんと対峙した状態を維持しながら、少しずつ六畳間の中心へ戻る。僕はそれに身をかがめてついて行く。そして加賀さんは六畳間、天野君のところまで戻ると、

「この子には私の目の届くところで死んでもらわねーと困んだけど、今はそれどころじゃねーから、後で私が迎えに行くまでこの子の面倒見^{めんどう}について」

そう言つて、まだ使える方^{かた}の手で、剣を持ったままの状態^{じょうたい}で天野君の上着の襟^{えり}を掴むと、結局一度もこちらを見ることなく、背後の僕に向かつて天野君を放り投げた。

わあっ、という声を上げて、天野君が宙を舞う。相手をまるで見ずに投げた割には正確なコントロールではあったけど、それでも僕は慌てて彼の落下地点まで下がる。

今の状況を考えれば妥当な選択なのかもしれないけれど、あまりに乱暴な扱いに思わず、

「分かりました」

と頷いて、天野君を受け止めた。

……いやどういうこと？　僕は、なんてことするんですか、とおうとして……言おうとしたよね？　なのになんで……それに、それに今のって　不意に、さっきまで引っかかっていた疑問がよみがえる。

どうして加賀さんは僕を庇ったんだ？

僕は幽霊なんだから、あんな杭なんて関係ない、はずだ。せいぜいが跳ね飛ばされるくらいだと思う。それを、身をていして守る理由は

「いくら待ってもハルちゃんは来ないと思うけどねー」

自分の意思とは関係なく、既に背を向けて立ち去ろうとしている僕にしろ、立ち止まらないので首だけを振り向かせると、加賀さんの向こうに見える清寺さんがにこやかに手を振っていた。これを見る限りあの人が加賀さんを無視して追ってくることはなさそうなんだけど……じゃなくて、いやこれはこれで重要だけでも、今はまずこっちだ。

「か、烏文字さん！　烏文字さん！？」

あの人を呼ぶ。正しい方法が分からないから、なぜかきよきよと辺りを見回してしまっただけ、いるわけではない。それは承知済みだったから構わず続ける。

「僕……　烏文字さんになってるよね！？」

《……私にはなっていないでしょう》

ええ……　なんか頭の中に直接声が聞こえてくるんだけど……　ってああー！　めんどくさいなあもう！　そういう細かいこと言ってるんじゃないって分かってるでしょうが！

「そういうことじゃなくて、なんで　なんで!？」

《あまり余裕がないからどうでもいいことで煩わせないで》
Chen

どうでもよくねえー！　！　大事なことですー！　！　！

ええっとお、あれか、あの時か。僕が目つむっていた時、清寺さんは加賀さんが庇うことを見越して烏文字さんを攻撃した。それを見た加賀さんがその通り烏文字さん突き飛ばすとか蹴り飛ばすな

《そんなもの待ってられない》

「待ちましようよお。なにやってるんですかもー！　もおーー！
！」

《少し静かにしていて》

「しず……だつて、だつて！　だつてえ！　死んじやうでしょこれ
え！？」

《もう死んでいるでしょう》

「はあ！？　なにそれ！？　そう言えば「あ、そうか」って言うと思
った！？　言わねえよ！

「あーー！　もーやだ！　もーーやだ！　痛い！　もう痛い
！　今痛いのおー！！」

《子供ですら静かにしているのに……男のくせに情けないわね》
いやどう見ても怖すぎて絶句してるだけだろう。顔真つ青だぞ。

あ、でもこういう子供っぽい、と言うか普通なところもちゃんとあ
るんだなあ、この子。そう思うとなんかちよつと安心　できるか
あーー！！　そんな場合じゃないんだよおおお！

遂に、硬そうな地面が目前に迫ってきたその時、烏文字さんはお
もむろにマンションの壁に向かって手を伸ばし、そこに触れる。激
しい摩擦を起こしながらも離すことはなく、それどころかコンクリ
ートの壁に指を食い込ませて、壁を削り取りながら落ちていく。結
果的に落下する速度は軽減されて、それでも結構なスピードのまま、
とうとう地面に

ズドンッ、という重く、だけど派手な音をさせて着地した。足
元のアスファルトは陥没してひびだらけになっているけど、烏文字
さんの体に傷は、それに痛みもない、と思う。

「ど、うなつて、んの……？」

子供がふざけて遊具から飛び降りるのはわけが違つ。六十階か
ら飛び降りたのに、それなのに、無傷つて。これじゃあほんとに人
間じゃ……

「つて、ええ？　ちょ……教えてくれないんですか！？」

烏文字さんが何事もなかったかのように走り出したので、思わず驚きの声を上げてしまった。まさか放置とは。この人ほんとに説明しないよな。そういえば何か言うのは普通にできるんだな。うん、今はもう指一本動かせないのに。なんか一瞬動くような気はするんだけど。

《……邪魔をしないで》

「はえ え？ 何ですか？ 邪魔って」

悩んでいたら怒られてしまった。なんだろう。いいから黙ってろ、ってことかな。

《体を動かそうとするのはやめて》

ああ、なるほどさっきの。確かに指とか動かそうとしたな。でも動かなかったけど……僕が動かそうとしても本当は動くけど、それを烏文字さんが中止させた？ のかな。少し前までは動いてたし、今も動きそうではあったし。中止させるのが面倒くさいからやめろっていうことだろうか。

「分かりました……って、話すのも駄目ですか？」

《話せないと意思表示ができないでしょう》

そこは意図的に僕の自由にさせてくれているってことなのか。説明はしないけどいい人なんだよな、この人。

「でも……それはそれとして、これからどうするんです？」

《とりあえずここを離れましょう》

その先はまだ分からないってことか。加賀さんは特にどうしてろとは言わなかったし、それに、清寺さんの言っていたこと。

迎えは来ない。

烏文字さんがこんなにも焦っているのは、多分そのせいなんだろう。

僕の相手をしながら、今この瞬間も走っている。

居住スペースのみならず敷地自体が広大なこのマンションの、その敷地を囲う柵の前に到達した時、ここまで大人しく胸に抱えられていた天野君が、

「あの……」

と、急に呼びかけてきたので烏文字さんはいったん彼を下ろした。そして、

「これ、あの人が」

向かい合った彼が差し出してきた手の上にあつたのは、車のキーだった。恐らくは加賀さんの車のものだろう。でもなんで天野君が？ あの人、どんな手品使ったんだ。

烏文字さんは鍵を受け取ると柵の前から離れて 飛び越えようとしたのか壊そうとしたのかは分からないけれど 加賀さんの車の元に向かうようだった。僕らはあれに乗ってここまで来たのだから駐車してある場所は分かっている。

「あれ？ でも、烏文字さん車の免許なんて持ってるんですか？」

《いいえ》

「駄目じゃん！」

《手順は知っているから問題は無い》

ああー、免許はなくても運転することはできると。なるほど。それ、問題無いのかな？

結論から言えば、烏文字さんの運転は加賀さんのそれよりもはるかに安定感のあるものだ。もともと、走行中にハンドルから手を離す人は比較対象にならないのかもしれないけど。

「烏文字さん……以前に無免許運転してたわけじゃないんですよね？」

《ええ》

してた、と言うかむしろ今してる真つ最中ではあるのですが。

だけど外見的には大人にしか見えないこの人が、男物という違和感はあるけれどスーツを着て運転している姿を見て、高校生が無免許で運転しているとは思わないだろう。

ひどい考え方だけど、これなら警察のご厄介にでもならない限り問題はなさそうだ。

あの高層マンションを離れてから三十分程が経っただろうか。その間、車内は時折僕と烏文字さんがさっきのような続かない会話を交わすだけで、ほとんどが静寂に支配されていた。

このまま何事もなかったように済ませる、訳にはいかないよね……
加賀さんの家を出た後から、その思いはずっと僕の中で大きくなり続けていて、だから

「あの……天野君？」

僕は意を決して 恐る恐るという感じになってしまったけど
助手席に座っている天野君に呼びかける。

「！……なんですか？」

ここまでずつと一言も話すことなく大人しくしていた天野君は、急に話しかけられて一瞬驚いたようだったけれどすぐに我に返り、今は不思議そうな顔をして僕を見ている。

「えっと、その、加賀さんの さっきまでいたマンションでの事、
なんだけど……」

この子の周りにいた大人達がこの子を殺す算段を立て、そして、烏文字さんがこの子に剣を向けた。でも

「烏文字さんは　あ、この人、烏文字さんっていうんだけど、烏文字さんは、その、なんて言うのか……悪い人じゃ、ないんだよ？　いや、僕も今日会ったばかりだから詳しいことは知らないけど、でもここまで来る前にも今日会ったばかりの僕を何度も助けてくれたりして、だから、むしろいい人って言うか……あー、つまり、烏文字さんがああいうことをしたのは君が憎いとかそういうことじゃなくて、何かいろいろと理由がある、と思うんだ、よね。いや、理由があるならどうこうっていうことじゃなくて……ええと、結局何が言いたいのかって言うと　」

言いたいことは最初から決まっていた。でも言い出す勇気が無かったから長々と話して逃げ道を塞いで、そしてようやく、口にする。「烏文字さんのこと、嫌いにならないで欲しいんだ……」

勝手なことを言っている。天野君にも、烏文字さんにも。こんなことは僕が言っていることじゃない。

それにきくと、烏文字さんはこんなこと望んでいない。僕がこんなことを言うのはお節介だっているのは分かっている。だけど、あれを、あれだけを烏文字さんだと思われるのは、僕が嫌だったから。

「この人が悪い人じゃないって、いい人だっていうのは、僕にもなんとなく分かります。あれは、きつといい人だから……いえ、とにかく、大丈夫ですよ。僕はこの人のこと、嫌いになったりはしません。それに、あなたのことも」

天野君は、まっすぐに僕らを見つめて、そう答えた。嘘偽りの無い本心だと明らかに分かる、そんな目をして。この子は……まだ小さな子供だというのに、どうしてこんな

「あの……僕、なにか変なこと言いましたか？」

天野君の予想外の反応に驚いていたら、怪訝な表情をされてしまった。

「ん、んうん。そんなことないよ。と言うか、ありがと。そう言

ってもらえると、嬉しいな」

我に返って慌てて答えると、天野君は照れくさくなったのか顔を赤くしてうつむいてしまった。マンションから飛び降りた時もそうだったけど、こうしていると普通の子供にしか見えないんだけどな。「あー、だから、って言うのも変だけど、あの時はあんな風になっちゃったけどさ、加賀さんが迎えに来た時にもう一度ちゃんと話してみようよ。あの人も、悪い人には見えなかったし。話せば何て言うか……他の方法がある、んじゃないかな」

なんだか天野君が困っていたようなのでフオローのつもりで言ったのだけど、「そうですね」と答えて顔を上げた彼の表情はさつきまでとは別の意味で、困っているようだった。

それを見て、自分の命に関わるような話を軽々しく持ち出すのは無神経だったと反省した僕は、自分で持ち出したこの話題から遠ざかるために、さほど重要ではないけれど気にはなっていた話題へ切り替えることにした。

「ところでさあ、天野君の下の名前はなんていうの？」

「彰あきひ、です」

「じゃあ、彰君って呼んでもいい？」

一瞬意外そうな顔を見せた後、彰君はこくん、と頷いて了承してくれた。

「僕は兎川遥っていう名前だから、遥って呼んでね。それで烏文字さんはねー」

と、烏文字さんの紹介をしようとしたところで気になることができたので、紹介を中断して尋ねた。

「烏文字さんの声って彰君に聞こえてるんですか？」

あの直接聞こえてくる声だ。聞こえていないなら僕が代わりに伝えないと彰君が置いてけぼりだしな。いや、伝えたい時は烏文字さんが直接話せばいいのか？ でも断片的にだと彰君の中で話の整合性が

《聞こえている、と思うけれど》

そう言われ隣を見ると、彰君が頷く。そっか、聞こえてるんだ、これ。仕組みはどうせ聞いたって分からないんだろうから聞かないけど。

……なんか、かなり今更だけど、僕普通に首動かしたりしてるけどいいのかな。邪魔にならない範囲なら怒んないってことですか。動かそうとしないでって言われた時は簡単に分かったなんて言っちゃったけど、動かそうとしないようにするって案外難しい。

「あーと、それでね、この人は烏文字　あのさ、烏文字さん？」

《なに》

またも中断して烏文字さんを呼ぶ。こちらはそこそ長く思っていたことなのだけど、この際なのでついでに聞いてみることにした。「紹介ついでに烏文字さんのこと、からすさん、って呼ぶようにしてもいいですか？　烏文字って長いので」

《……構わないけれど》

「いや、別に駄目なら駄目って言うてくれていいんですよ？」

嫌そうな気配全開で許可してもらっても申し訳ないんですけども、「でもなあ、あっちゃんだと彰くんとまぎらわしいし……あらさん、じゃなんか変な感じだし。あ、この人の名前、新仁っていうんだけどね」

「あらひと？」

急に矛先を向けられた彰君が不思議そうに首をかしげて聞き返してきたので、僕はうん、と頷いて見せる。まあ、そんな反応になるよね。全然新仁って感じじゃないもの。それに、この人自分の名前嫌ってるっばいからそれに関するやつはさらに嫌がりそうなんだよなあ。

「というわけで、からすさんって呼びます。僕は。からすさんがいよって言ったんですからね？　からすさんも僕のこと好きに呼んでくれていいですから。はい、もう決めました！」

《どちらかと言えば呼び方よりもその変な敬語を改善して欲しいのだけれど》

呆れたように言われてしまった。それにしても変な敬語って……
そうなんだろうけどさ。

「そう言われても……ちゃんとした敬語なんてよく分からないです
し 分からないのですから？ ですが？ ほらね？」

《普通で構わない、と言っているの》

「えー、だってからすさん年上ですよ。僕十六ですけど、から
すさんは？」

《私も十六歳だと言ったでしょう》

あ、そういえば加賀さんの家にいる時に聞いたんだっけ。そうだ。
それでこの人同じ年なんだなと思って……いやいや、いやいやいや
……でもほんとはそうじゃなくて……ということは、つまり……

「嘘つき！ からすさんの嘘つき！」

《……嘘をつく理由がないでしょう》

信じないぞ！ 僕は絶対信じないからな！ 幽霊も神様も天使も
悪魔も信じたとしても、これだけは信じな そうか、これはあれ
ですね？ 女の人は年齢サバ読むっていうあれのやつですよ？
これ。そうじゃなかったら、そうじゃないんだとしたら僕は……

「あの、ほんとに？ 本当に十六歳、なんですか？」

《ええ》

……いや、まだだ。まだ終わっていない。まだ、最後の希望が残
っている。

「が、学年は……学年は何年生、ですか？ からすさんは高校何年
生なのですか？」

《二年生だけ》

「いよっしゃあああああ！」

ふ、くふふふ、ふははははははは！ そうでしょう。そうだ
と思いましたとも！

「それ見たことか！ 僕は一年なのですよ。だから二年のからすさ
んに敬語を使っていたのですよ。だから僕がからすさんより多少残

念な子でも不思議ではないのですよ！」

守りきったぞ。僕は、僕を守りきったぞー！！！！

「あ、そういえば彰君は何年生なの？」

我ながらテンションの落差に驚くけれど知らない。あれはもう終わった話なのだから。考えたくない。

彰君もそれを特に気にした様子もなく、すぐに「僕は」「言っ
て、でもその後なぜかほんの少し間うつむいて沈黙してから、

「四年生、でした」

と、僕を見上げて答えた。

過去形で答える彰君を見て、この子がもう自分を普通の人間じゃないと僕ら以上に自覚しているのだと痛感した。僕にはよく分からないけど、いくら神様の駒になったといっても、この子が子供であることは変わらない、のだろうに。

でも四年生、か。驚くほどではないけど、思っていたよりかは少し上、かな。体つきは同年代の平均的な子よりも小さめなんじゃないだろうか。僕も人のことは言えないのだけど。

しかし四年生だとしても、この子はそれ以上に落ち着いてるよなあ。多分……いや絶対僕より落ち着いてるけど、でも十歳くらいなのか。そっかあ……からさんは言わずもがな、だし……僕は一体どこで何を間違えたんですかね？

……あれ？ 何の話をしてたんだっけ……ああ、敬語か。うっん、敬語、ねえ。

「じゃあ じゃあ？ まあいいか。じゃあー、みんなで敬語使うのやめるってことにしましょうか」

《私はそれで構わない》

「よし、じゃあ決定ね。彰君もここからは敬語使っちゃ駄目だよ？」
彼はわずかに驚いてから、神妙な顔をして頷く。

……急に一言も喋らなくなったりしないよね？ 元々積極的に話す子じゃなさそうだし。

「いや、別に敬語使ったからって怒ったりはしないからね？ 大丈夫

夫だからね？」

慌ててフォローを入れる僕を見て彼は、うん、と歳相応の笑顔を見せてくれた。もう、ほんとにいい子だなあ。あー、こんな弟がいたらなあ。毎日楽しいんだろなあ。

「はい！ からずさん、はい！ 今すぐ彰君の頭をなでなでしたいです」

《後にして》

いいじゃんちよつとくらい。加賀さんみたいに両手離さなきゃ大丈夫でしょー。けちー。

「にしても、こうしてるとなんか、僕ら友達みたいですね 友達みたいだよねー」

《……そうね》

怖いなあもう。この人意外に嫌なこと嫌って言わないタイプなのかな？ いやそれはないな、この人に限って。ううん、ちよくちよくよく分からない人だ。

こんな風に、僕らが他愛のないやり取りを繰り返している間に、車は目的地に到着した。

僕は彰君の手を引いて、自宅に向かって歩いていく。

車は家から多少離れた場所にあるショッピングモールの立体駐車場に置いてきた。あまり褒められた行動ではないけれど、駐車場自体はがらがらだったし、この辺りに有料駐車場の類はないし、それ以前に僕は一文無しなのであったところで利用できない。かと言って家の前に止めるのは当然路上駐車になるのでそれで問題になったりしても面倒、という言い訳で納得することに成功した。

自宅に向かうことは僕が提案したことだ。いや、あれは お願い、だな。

車の中での自己紹介等が終わった後、僕が改めてからすさんに車の行き先を尋ねると、無いという答えが返ってきた。だから最初は加賀さん宅からただ遠くへ遠くへと走っているのかと思ったのだけど、からすさんはひたすらそうするわけにもいかない、とも言った。僕らの行ける範囲には限りがあるそうなのだ。

おおよそではあるけれど、僕らが今いるこの県の外では、からすさん達はあの時のような マンションから飛び降りるような人間離れたことはできなくなる、と言われた。

僕はそれを聞いて、むしろ好都合じゃないかと思い、早くこの県から出ようと進言した。加賀さんや清寺さん、誰もが普通の人と同じになるのならその方が危険は少なくなる、そう思ったから。だけど、からすさんに話を最後まで聞きなさい、と怒られてしまった。

？外？へ出るためには？出口？を通らなければならない、と言うのだ。

からすさんが今の体になってすぐの、加賀さんと見つめ合っていたわずかの間に、あの人からこの体の使い方 普通の人間以上の能力やその有効範囲について聞いた話によると、そうなるらしい。どう考えても所要時間と情報量が釣り合っていないとは思っただけ

ど。

その時の情報によると、県境となっている川　それをまたぐ県と県を繋ぐある一本の橋の上を通らなければ、今の僕やからすさん、加賀さんのような存在は？外？に出ることはできないという。そして、だから　と、からすさんは続けた。

そこには必ず罠がある、と。

？出口？のことは加賀さんだけが知る事ではなく、あの人達にとつては周知の事実だそうなので、当然清寺さんの知るところでもある。あの人の反逆に仲間がいるのか、あるいは単独なのかを知る術はないけれど、僕らを見逃した時のあの余裕からすれば？出口？に誰か、もしくは何かがあるのは間違いない、からすさんはそう考えた。

つまるところ僕らは、際限なく遠くに行くこともできない。行ける範囲の中に行くあてもない。

それを知った時、僕は　最後にかあさんに会って、伝えたい。そう思ってしまった。

場違いなことを考えていると思ったけれど、この機を逃せばそれはもう叶わないかもしれないと思うと、僕はその望みをどうしても抑えきれず、からすさんと彰君に伝えた。

こんな僕のわがままに、二人の反応はあっさりしたものだった。

それは　別にもすることもないからいいんじゃないか、という返事。

彰君はともかく、からすさんについては間違いなく、お前はこんな時に何を言っているんだ、とこっぴどく怒られると思っていただけ、これには聞いた僕自身が驚いた。だけど、彼女は本当に何を気にした風でもなく、僕の自宅に向けて車を走らせてくれた。

だから、今僕らは僕の自宅に向かっている。僕のかあさんに会うために。

車の時計では既に午後の二時を回っていた。僕の死体が警察に発見された朝方からはかなりの時間が経過している。僕は身元を証明

するものを持っていたから、さすがにかあさんへ何の連絡もいつていないということはないと思う。かあさんが今どこにいるのかは分からないけれど、でも、もう帰ってきているか、しばらくすれば帰ってくるだろう。

「でも……どうやって説明するの？」

話のついでに僕らの死んだ経緯などを隣を歩く彰君に話していたら、彼がそう言って、わずかに顔を曇らせて僕を見上げる。

おお、心配してくれてる、ってことだよなあ、これは。この子はどこまでいい子なんだ。

でもまあ、当然の疑問ではあるけど。僕とからすさん、それに彰君は見ず知らずの他人なのだ。自身とも家族ともなんの関係も無い、男物のスーツを着て子供を連れている女性が急に訪ねて来て不審がない人はそういないと思う。

「んー、まあなんとかなると思うけどね」

繋いだ手をいったん離し、心配してくれた彰君の頭をなでながら答えた。今は僕の用事ということで体の主導権がからすさんではなく、僕に預けられている。つまり、今なら彰君をなで放題、というわけだ。

しかし彼は頭をなでられるのがくすぐったいのか、それとも恥ずかしいのか、それを避けるように離れて僕の後ろに回ってしまった。ああ……もう手も繋いでくれないんですね。元々そっちなも恥ずかしそうにしてたもんなあ。

「多分、からすさんを僕の友達だつて言えばそれで足りると思うよ」彰君を追いかけて進行方向に背を向けつつ歩きながら、僕はからすさんと僕が入っている体を自分で指差した。

なにも、僕は今朝死んだあなたの息子です、と言う必要はないのだ。朝に駅でからすさんに頼んだ時言ったように、伝えたいことが伝わればそれでいい。

《私達はいつ友人になったの？》

からすさんの権限で体を進行方向に向かされて、さらに追い討ち

をかけてくる。もう、細かいなあ。

「いや、別に実際にどうこうってことじゃなくてさ。そう言えばかあさんが話を」

《そういうことではなくて、私はあなたの母親と面識はないのだから、まず経緯を説明する必要があるでしょう、と言っているの》

「ああ、そういうこと？ いやでもなあ、聞かれるかな、そんなこと」

《なら、私はいつあなたが言うつもりの内容を聞いたの？》

「ええと……僕が死ぬ直前かな。かあさんに伝えて欲しいって言われた、って言う」

《私がその時あなたの側にいる理由が無いでしょう》

「たまたま会った、んじゃない？」

「僕のこと聞かれたら？」

「お、弟です、って言えば……」

からすさんとの戦いに、隣に戻ってきた彰君が参戦してきた。少し怒っているように見えるのは気のせいだろうか。まあ、確かに僕が真面目に答えているようには見えないよね。

《私はどうして平日の昼間にどう見ても小学生の弟を連れ回しているの？》

「あー……家の法事……とか？ でもまあ、全部聞かれない聞かれない。大丈夫大丈夫」

《……失礼だけど、あなたの母親はどういう人なの》

あからさまに信用していない様子のからすさん。隣を見れば彰君も疑いの眼差しを向けてきていた。むう、この子にこんな目をされるのはつらいな。からすさんは今更だけど。

「かあさんはさ、おおらかと言うか　細かいことは気にしない人なんだって」

二人に言い訳するようなかたちでからすさんに答える。とは言っても、僕はなにもごまかしているわけではなく、本気で大丈夫だと思っただけ。

僕が彰君よりも小さな子供だった頃、何をしたらこんなに汚れるんだってくらい泥だらけになって家に帰った時も、怒られもせずただお風呂場に連れて行かれて洗われただけだったもんなあ。

そんな大雑把だから家事が苦手なんだろうなあ、と密かに思っていることは、かあさんには内緒だ。

《だとしても限度はあると思うけれど》

「だーいじょーぶですってー。長年一緒に暮らした人が言ってるんだよ？ 信じようよ」

心配性だなあ、と思いつつ、僕は怒っているような顔から心配そうな顔に戻った彰君を今度は逃げられないように抱き上げて、彼の後ろに回した手でその髪をくしゃくしゃにする。

「ねー？ 彰君は信じてくれるよねー？」

「……しい、ら……て」

限界を超えてどうしていいのかわからないのか、自分の服をぎゅう、と握りしめてうつむく彰君が、恐らくは拒絶の意思を表した、のだろうけど うん、やめないよ？

「なんですかー？ はっきり言わない子の言うことは聞いてあげられませんかー？」

自分でやっておきながら意地が悪いなあ、と思う。でもこれが普通だとも思っけどね、この場合。

「恥ずかしいからやめて欲しい……」

はい逆効果ー。上目づかい補正ー。何をしてるか自分では分かってないんだろなあ。

「やめなーい」

言葉通りやめるつもりはまったくなかったけれど、そうも言っていられなかった。

兎川の表札が下がった門。いつの間にかそこにたどり着いていたから。

びっくりした。もう少しで通り過ぎるところだった。彰君は恐ろしい子だ。

門の前で「ごめんごめん」と言いながら彰君を下ろし、なんとなく、ずいぶんと長い間帰っていないような気のする、今朝出たばかりの我が家を見る。

住宅街の一角にあるやや古めの、取り立てて大きくも小さくもない平屋。とうさんの生家。でも今は、かあさんと僕の二人きりいや、もう、かあさん一人、か。

かあさんは、帰っているだろうか。

急に、これまで幾度となくたぐつてきた柵も扉もない門が、今は越えがたい境界として立ちふさがっているように感じた。まるで、赤の他人の家に入ろうとしているように。

かと言って、このまあいっまでも門の前にいるわけにもいかない。ので中に入ろうとした時、門の違和感とは別のあることに気付いて、足を止めた。

そういえば僕、からすさんにならないといけないんだよな。

考えてみれば、言う内容は決まっているけれど、言い方を考えていなかった。今の僕は見た目がからすさんなのだから、僕の普段どおりの話し方で、という訳にもいかない。

「あのだ、今からちよつと、からすさんの真似するから見てくれない？」

急に意味の分からないことを頼まれた彰君は、ぼかん、という表情を見せたけれど、僕は、まあ後で説明すればいいか、と思い、辺りに誰もいないことを確認してから、

「私はあなたの息子の友人よ。彼から伝言を預かってきたわ」

演技のことなど何も分からないなりに、精一杯やってみた。

「……なんか、変」

うん。僕もそう思う。なんか異常に偉そうだし。なんで腕組んで見下してるんだろう。

「からすさん、怒ってない？」

《いいえ》

……怒ってる。別に悪気はなかったんだけど。思ったより難しい

な、これ。

《そもそも、どうして私を真似る必要があるの?》

「え? だって、今の僕は見た目からずさんなんだから」

《あなたの母親は私のことを知らないのだから、容姿と人格の整合性を考慮する必要はないでしょう》

「あー、そつか。そうだね。だったらこう、もっと普通の女の子っぽく感じていいのか。そうだな」

「遙さん……今は新仁さんに失礼だと思うよ……」

僕を見上げる彰君が、僕の下手な物真似を見せられた時とは比べ物にならない程の、どうしよう、という表情をしている。ええと、どうしよう……

「いや別に今のはからずさんが変だとか悪いとか駄目って意味じゃないよ? 単純にそっちの方がやりやすそうだなあっていう……ね? その」

《あまり家の前で騒がない方がいいと思うけれど》

「そうですね……」

うん、もう練習はいいや。傷を広げることにはかなりそうもないし。適当に女子っぽく話し方をすれば大丈夫だろう。多少変でもかあさんなら気にしないよ。

とりあえず玄関まで行こうと意を決して、彰君の背中に手を置き、いまだ抵抗の消えない門をくぐり敷地の中へ入る。そして、入ってしまえば、あつと言う間に玄関の前に着いてしまう。

いて欲しいような、まだいて欲しくないような そんな緊張を抱えながら、呼び鈴を鳴らそうと指を伸ばした、のだけど、玄関の戸 すりガラスが嵌^はった引き戸の向こう側に影が見えたので、その指を止める。

かあさん? そう思ったけれど、なんだか様子がおかしい。玄関の床、家上がりもしていない所で、座り込んでいるような……それとも、倒れて

「かあさん!」

気付けばおもいきり戸を開いて、叫んでいた。

中にいたのはやはりかあさんで、やはり玄関に膝をついて座り込んでいた。だけど　むしろ当然と言うべきか　こちらを見て驚いている。

「あ、あの、ぼ　私は、ええと、なんと言うか　」

とつさに変な行動をとってしまったせいでハードルが上がってしまったけれど、僕は当初の予定通り振る舞うことにした。目を逸らし、先の発言には触れずこのまま押し切ろう。

「……遥？」

かあさんが、僕の名を呼んだ。からすさんの姿をした僕を見て。

どうして？　僕は名乗っていないのに。今のは確にかあさんの声。だけど、いつもとは様子が違う、震えた声。どうして？

かあさんはどうして、こんな所で座り込んでいたの？

僕を見つめるかあさんと目が合って、僕は　それに背を向けて、逃げ出した。

雨が降り始めていた。

どこをどう通ってきたのかは覚えていないけれど、僕は立体駐車場に置いた車の前に戻ってきていた。車に背を預けて、服が汚れることも構わず地面に腰を下ろしている。

彰君は　こちらも覚えてはいないけど、僕が走り出す前からすさんが抱え上げたか何かしたのだろう　僕の前にいる。僕と同じように、うつむいて雨に打たれている。

僕らがいる最上階には屋根がない。吹きさらしのこの場所に雨をさえぎるものは何もない。だからなのか、とても寒い。さっきから震えが止まらない。耐えきれずに自身の肩を抱く。

「風邪ひいちゃう、よ？」

その様子を見た彰君が僕の隣に来て心配してくれたけれど、僕は動くことができなかった。

「かあさんが、泣いていたんだ」

誰に言っているのか分からない言葉。自分で確認するためだけに言った言葉。

《……わが子を亡くせばそれが普通でしょう》

何を今更、そう思っただろう。そんなことは承知でおもわたのではなかったのか、そう言われても仕方がない。確かに、普通はそうなんだろう。だけど僕は

「僕は……かあさんの本当の子じゃ、ないんだよ」

からすさんと彰君にとってはそんなこと、どうでもいいことだ。そう思っても、止められなかった。

「かあさんは……かあさんって、変なんだよ？　通勤するのにさ、片道二時間半もかけてるんだ。毎朝ほとんど始発の電車に乗っているの。二時間半だよ？　往復したら一日の四分の一くらいかかるっていうのに、それなのに何回言っても会社の近くに引っ越そうとし

ないんだよ。それに、そんな行って帰ってくるだけで疲れるような生活してるのに、僕が家の事すると、そんなことしてる暇があるなら勉強しろって怒るんだ。仕事して帰ってきた上に自分が晩御飯作るとか言い出してさ。料理苦手なのに。それからあれもだ。かあさんは、僕が言うのもなんだけど、結構きれいだと思うんだ。だからとうさんの代わりって言ったならなんだけど、そういう人がいてもいいんじゃないかと思って聞いたことがあるんだ。そしたら、今度そんなことを聞いたら殴るって言うんだよ？ ひどいと思わない？」全部お前のせいだ。いつかそう言われるんじゃないかと、心のどこかで怯えていた。

「ずっと、僕はかあさんの邪魔になっているんだって、思ってた。血は繋がってないけれど、一応は息子だからって、仕方なく面倒みてるんだと思ってたんだ」

そんなことを思っていたから、死んだと分かった後でも、あんなに気楽でいられた。

「だから、だから僕は　僕が死んでかあさんが泣くなんて、思っ
てなかったんだよ！」

僕はどうしようもない息子だったんだ。本当に、自分で思っていたよりもずっと。

「おばあちゃんが死んだ時も、とうさんが死んだ時だって、かあさんは泣かなかったのに。なんで？　どうして僕が死んだ時は泣いてるの？」

僕が知らなかったただけだ。泣いていたんだ、きっと。僕はいつも好きなだけ泣いて、他のことなんて何も考えていなかった。かあさんは、僕がいたからそうはできなかったんだ。でも今は、もうその必要がなくなってしまったから、ただ泣いている。

「僕はさ、ごめんなさい、って言おうとしたんだよ？　迷惑かけてごめんなさいって」

笑えない冗談だ。

そんなことを言ったら、かあさんはどんな顔をしただろう。怒っ

ただろうか。それとも、あれ以上に、泣いただろうか。

「せいせいしたって、笑ってくれていればよかった。これでようやく自由になれるって、喜んでくれていればよかった！ あんな奴はいない方がいいって！ それなら、そうなってくれていたら……こんな思いをしなくてすんだのに！」

あまりの自分の愚かしさに、思わず笑いがこみ上げてきた。震える肩を抱きしめる腕にさらに力を込める。僕がどうして震えているのか、もう分からない。

「そんなこと……そんなことはっ、言っちゃ駄目だと、思う」

彰君が、僕のそでを握りしめて、泣きそうな顔をしている。

僕は、かあさんだけでなく、今日会ったばかりのこの子まで泣かせている。

「……そう、だね。そうだね。僕は、いつも自分のことばかりだ……」

つらいのはかあさんなのに。自分が楽になることばかり考えている。それを子供に怒られるまで気付きもしない。本当に、どうしようもない。

《気はすんだ？》

「うん。一応は、だけど……」

ようやく立ち上がった僕に、からすさんは今までと変わらない調子で聞く。この人らしいと思う。考えてみれば、この人にも世話になりっぱなしだ。

《それで、もう一度あの人のところに行くの？》

隣の彰君に向き直って、頭をなでようとして、やめた。代わりにまだ心配そうに見上げている彼の肩に両手を置いて、一度、無理矢理の笑顔を作ってから答えた。

「行かない　行けないよ……何を言えがいいのか、分からないから」

死んでようやく気付いた僕が、かあさんに言えることなんて……何も無い。

「そうだねー。それはやめた方がいいんじゃないかなー」

背後からの声と同時に、それをかき消すような轟音が響いた。すぐそばにあった加賀さんの車が、それが鉄のかたまりだとは思えない勢いで吹き飛んでいった。そのボンネットと、運転席から屋根にかけての二箇所に、先端が鋭利な電柱のようなものが突き刺さっている。そして数秒後に着地した後は、車がほとんど停まっていなかった。駐車を横倒しに転がっていき、端の塀にぶつかりようやく止まった。

「巻き添えにしたくないでしょ？」

振り向いて、声の主を確認する。

清寺さん　清寺耕四郎が、別れた時に見た笑顔のままで、そこにいた。

「ひさしぶりー、でもないか。元気ー？　って、あは、大丈夫？　ずぶ濡れじゃない」

ばったり友人に会ったような気さくさで近づいてくる。今にも手をぶんぶん振りだしそうなほど楽しげに。実際本人はそうしたかったのかもしれないけれど、それは叶わない。

左手は、傘を持っている。右腕は、無い。

空っぽのそでだけが、彼の歩みに合わせてひらひらと揺れている。清寺さんも傘を差してる割には濡れてると思いますけどね」

話し合うには少しばかり遠い位置で足を止めた清寺さんに、僕は相も変わらず場違いなことを言っていた。

「んー？　そう？　バランス悪くなっちゃったからかなー。うまく差せないのかも」

「片腕が無いから……ですか」

「ハルちゃんはさー、容赦ないからねー。だいたい身体におつきな穴開けられててなんであんなに元気だったんだろーな？」

「その加賀さんは、どうしたんですか？」

「あー、まー、だいたい分かるでしょ？　ハルちゃんじゃなくて僕が来た時点でさー」

結局は、この人の言った通り、からすさんの危惧きくした通りになつてしまったのか。

僕の、からすさんの体が身構える。僕の意味じゃない、つまり体の主導権がからすさんに戻った、ということ。

彰君を背後に置いたまま、片足をわずかに後ろに引いて腰を落とし、清寺さんに対して体を横に向ける。戦うための、構え。

「やめた方がいいと思うけどな」。烏文字君達にはちよつと荷が重いでしょ」

この人の言う通り、からすさんは加賀さんからやり方を習ったとは言つても、それはつい数時間前、しかも数秒の間のこと。恐らくは、そういうことをずっと続けてきたであろうこの人には、手負いであることを差し引いても、きつと勝てない。

「ちよ、ちよつと待ってからすさん！ 清寺さんも、待ってください」

体がまったく動かない状態で話しかけているからなんだか変な感じに映っているだろうけど、僕は構わずからすさんと清寺さんに呼びかけた。

「清寺さんの目的は彰君の、なんなんですか？ この子に何をするつもりなんですか？」

そもそもこの人と僕らが争う理由はあるんだろうか？

この人は加賀さんが彰君を殺そうとしたから逆らつた。それはつまり、この人は彰君の死を望んでいない、そういうことだろう。からすさんだつて、加賀さんがもういないのなら清寺さんと戦う理由は無いはずだ。それなら、話し合っていけば、争う必要はない、そう思えるようになれるんじゃないのか。

僕は彰君に死んで欲しくない、からすさんに殺して欲しくない、それだけなんだ。加賀さんと清寺さんの争いに興味はない。だから正しいことではないのかもしれないけれど、例えこの人が加賀さんを殺してここにいるのだとしても、それは、少なくとも僕がこの人と争う理由には、ならない。

「その子はねー。神様と同じなんだよ」

突然よく分からないことを言い出した清寺さんに、体が自由に動くなればかんとした表情を返していたことだろう。それでも、清寺さんはその表に出なかった僕の気配を察したのか、言っていることの意味が分からず反応に困っている僕に問いかけてくる。

「あの話覚えてないかなー？　世界を創った神様と世界を壊そうとする神様がいるって」

……ラクガキ帳で世界を創ったっていうあの昔話のこと、だよな。
「一応覚えてはいますけど……その神様と彰君の何が同じなんですか？」

「？力？が、だよ。僕らのような悪魔や天野君達のような天使にはラクガキ帳を書き換える権限があるって……言っただっけ？　まあいいや、あるのー。そういう権限が。ちなみに僕らはそれを？改竄^{ウイズ}特権？って呼んでるんだけど。でもねー、そうは言ってもさー、普通の悪魔や天使ができることなんてたかが知れてるんだよねー。ところがだよ？　天野君に限ってはなんと、神様の権限と同等なのです！　すごいでしょー」

まるで、我が子の優秀さを誇らしげに自慢している父親のようだけど

「僕にはいまいちすごさが分からないのですが……」

なんとなくすごいんだろーな、ということは分かるけれど、その程度が分からない。

「ものすごく簡単に言うとなー。なんだってできる、ってことかなー」

「……なんでも？　ですか？」

「うん。なんでも。まあ、その子に扱いきれるのかどうかは、知らないけどね」

なんでもって……それは、全能、ということなのか？　それじゃあ本当に、ただの　神様じゃないか。

そんな？力？がこの世に　確かにこのわずかな間で現実離れし

たものをたくさん見せられたけれど、でもあれば、言ってしまうば人より力が強いとか知識が多い、という程度だ。目的を果たすために、手段を必要としていた。全能にはほど遠い。

全能なんて、そんなものは無いから、世界は成り立っているんじゃないのか。しかもそれを、そんなものを一人の人間の意思に預けているなんて……それが、加賀さん達が彰君の死を求めた理由で、そして、彰君がその殺意に抗わなかった理由、なのか？

「あー、あと？力？を使うには対価が必要みたいなんだよねー。そういう意味じゃ、なんでも、とはちよつと矛盾してるなー」

清寺さんは空を見上げて　傘にふさがれてはいるけれど　思
い出したように加えた。

彰君は全能の力を少なくとも一度は使っている、はずだ。清寺さんの言葉をすべて信じるならば、僕らが加賀さんの家へ行く途中に見た巨大な穴、あれは彰君がその力を使って空けた、この人は言っていたのだから。

でも、彰君には清寺さんの腕のような、目に見える形で失ったものはないように思う。なら、この子は代償として何を支払ったというのだろう……いや、今はそれより

「つまり、清寺さんはその力が欲しい、ということですか？」

彰君を都合よく利用する。あるいは彰君の？力？それ自体を自分のものにする。どっちだ？

前者なら考えるまでもない。例えば彰君の命は保障されたとしても、それだけだ。何かは分らないけれど？力？の使用に代償をとまなうなら　違う。そういうことじゃなくて、それ以前に、例えば代償なんかいらなくても、この人が彰君の意思を無視するというのなら、僕はそれを？無事？だとは思わない。

だけど後者なら、仮にこの人が彰君からその？力？だけを取り出して己のものとする、と考えているのなら、そしてその過程で、またそれ以降に、彰君になんの害もないのなら、僕はの方がいいと思う。

僕が勝手に決めていいことじゃないことは分かっている。当事者は彰君なんだから。だけど、僕には彼がその力を望んで宿しているようには見えない。

それに、全能なんてものが人の手の上にあるなら、その手が誰のものかなんてことに意味はないと思う。誰であろうとそれが人の手である時点で、大差はないと思うから。

だったら、この人がそれを好んで受け入れるというのなら、彰君がそれから解放されることを望むというのなら、僕は進んで協力したっていい。

「んーん。別に欲しくはないな」

予想とかけ離れた返答に僕は拍子抜ける。それなら、なぜこの人はこんな話をしたんだ。

清寺さんはまたも僕の困惑を察したのか、答えに続きを付け加えた。

「なんだろう……興味、かなー？ 単純に、どうなってるんだろう？ っていう」

「……それなら、加賀さんと同じじゃないですか。それが目的ならどうしてあの人に逆らったりしたんですか」

「同じじゃないよー。ハルちゃんのはついで、でしょ？ 僕は知りたい方がメインだもの。あのやり方じゃ駄目だよ。多分可能性はコンマ以下だろうなー。ハルちゃんだってそんなことは承知の上だったんだろうけどさ。まー、そういうことだから、まずはいろいろ調べてみたい、っていうのが目的になるのかなー」

「……結局あなたは、何をするつもりなんですか？」

「それがまるで見えてこない。彰君をどうすることが望みなのか。だよねー。まー、あえて言うなら……その子の中身をいじってみたい、とか？ そんな感じかなー。だからそうだねー、これはもう決まってるっていうのは、壊すのは最後でいいかっていうことくらいかな？」

……駄目だ。この人は、駄目だ。この人にとって、彰君は珍しいモノなんだ。前提として人とすら思っていない。

僕の思い違いだった。この人と話し合う余地は、加賀さん以上に無かったんだ。

「僕の勝手に始めた話し合いでしたけど、僕の勝手に終わりにしてもいいですか？」

既に交渉は決裂したことを伝える提案。清寺さんと、そしてからすさんに。

「二人も変わってることは変わってるけど、さほど興味はないからな」。できれば天野君を置いてどっか行ってくれないかな。荒っぽいことって好きじゃないんだよね」

僕の意図は十分伝わっているらしい。だけど、不意打ちで仲間風穴を空けて、さっきは一瞬で車を鉄くずに変えておいて、よくそんなことを言う。

からすさんに関しては、僕らの話し合いになど最初から興味はなかったのだろう。この人は僕らが話している間から今に至るまで、一瞬たりとも臨戦態勢を崩さなかった。きっと、始めから分かっていたんだ。話し合っても無駄だつてことを。僕が泣きごとを言っていた時と同じで、ただ僕の気がすむようにさせてくれただけだったんだ。

「そっかー。じゃあー、仕方ないかー」

無言の僕と、構えを解かないからすさんを見て、清寺さんは心底残念そうに言った。

彼は大きなため息をついてから、持っていた傘を開いたままそつと地面に置いて、その空いた手で、ぶん、と何も無い目の前の空間を薙^ないだ。

次の瞬間には、目の前に杭。加賀さんを貫いていたあの杭が、ある。

僕にはそれが突然そこに現れたように感じられた。でも、からすさんには杭がここまで飛んで来るまでの軌道が見えていたらしい。

でなければ、僕が杭が現れたと認識した時点で、からすさんの手がその杭の腹に触れているはずはない。

からすさんは触れた手で杭の軌道を体の外へ逸らしながら、同時にその逆へ上半身を傾けた。杭が一瞬で目の前を通過していく。

からすさん、すごい。僕がそんな気の抜けたことを思っている間にも戦いは続いている。

杭を避けた後、からすさんは即座に体を反転させる。その先にいたのは　いつ拾ったのか、傘を手にして　こちらに向けて片足を浮かせた清寺さんだった。からすさんが身構える間も無く、腹部を狙った蹴りがまっすぐに伸びてくる。

ぎ、というからすさんが奥歯をきしませる音が聞こえた。蹴りをまともに受け、体をくの字のように曲げて後方に吹き飛ぶ。それでも、その瞬間に横にいた彰君の腕を掴み、僕らが引き離されることだけはかろうじて免れた。

「うーん。やっぱり重心がずれてて動きづらいな」

地に片膝をつくからすさんと、急に後ろに引つ張られ着地もままならず尻餅をついている彰君を目にすれば、普通ならば好機と見て追撃するように思うけれど、清寺さんは手にした傘を器用に片手でくるくると回しながら、困ったように首をかしげている。

どうとでもなる相手、そう思っているようにしか見えない。だけど、それは実際その通りなんだろう。

今の攻防でこの人が全力を出していたとは思えない。にも関わらず、からすさんが一方的に押されて終わった。力の差は歴然、そう解釈するしかない。

「からすさん、僕に何かできることないの？」

《大人しくしていて》

再び彰君の腕を掴んで起き上がらせると同時に、自身も立ち上がったからすさんに即答されて、僕は今更ながら自分の体を取り戻しておかなかったことを後悔した。

こんな半端な状態ではなく、れっきとした体があれば、からすさ

んのようにとはいかないまでも、弾除けくらいにはなれただろうに。だけど、そんなことは本当に今更だ。いくら悔やんだところで、今の僕にできることはただ見ていることだけだ……くそっ！

「騒ぎになるのを待つてるんだろっけとさー、誰も気付かないよ？」
清寺さんがゆっくりとこちらに向かつて歩いてくる。警戒するような素振りはいま一つ見せず、無造作に。彼は僕らまであと数歩という所で足を止め、傘を首と肩で支えると、自由になった左手で明後日の方向を指す。

《何があるのか見て》

からすさんは清寺さんから一切視線を逸らさずに、無論僕ではなく、彰君に対して彼が示したものを確認するように頼んだ。気配で、彰君が恐る恐るそちらを向くのが分かる。

「人がいる。車に乗ろうとしている人達。でも……」

ごく普通にそうしている、のか。

今ここに来て、からすさんと彰君、清寺さんが何事か話しているのを見た程度ならばそんなものだろう。多少おかしい組み合わせと状況だけど、これだけであえて関わる人はいない。でも、ここには僕ら以外に、清寺さんがぐしゃぐしゃにした車が転がっている。

あれを見て平然としている人なんているだろうか？

それだけじゃない。よく考えてみればあの瞬間に響いた音だって相当なものだった。事故でも起きたか、と誰かが様子を見に来てもいいはずだ。それなのに、何の騒ぎにもなっていない。

この人がそうさせているのか。いつか見た、あの巨大な穴に誰も気付かなかったように。

「まだ続けるの？」

また、清寺さんがため息をつく。それは勝利を確信した いや、勝者の姿だ。

からすさんは、駆け出した。数歩で埋まる距離、一瞬で清寺さんの眼前へ。

そうなるはずだった。でも、からすさんの、僕の視界にあるもの

は コンクリート製の地面。清寺さんの革靴。自分の両手。

知らぬ間に、手を着いて倒れていた。僕は思わず起き上がるうとしてしまう。だけど、当然体は動かない。今はからすさんにすべてを預けている。だから、今のはただの

「……ごめん、からすさん」

これすらも邪魔になるか、そう思っても言わずにはいられなかった。結局僕は、手を貸すどころか足を引っ張っている。からすさんはその僕に何も言わない

……おかしい。からすさんが何も言わないことがではなく、起き上がらないことが。僕はもう何もしていない、はずだ。それなのに、からすさんはまるで動こうとしない。

この状態が予定通りだって言うの？ 倒れたところから打てる手なんて、あるだろうか。

ぎしり、という歯を食いしばる音。そこから伝わってくるのは、からすさんの焦燥。ウレウレ

起き上がりがたくても、起き上がれない？

また反射的に、今度は顔を上げようとしてしまっ、それなのに

僕は見上げることができた。

清寺さんがつまらなそうに僕を見下ろしている。子供が飽きたおもちゃを見るような目。

この人が、からすさんの動きを封じているっていうのか？ からすさんが、僕が動こうとするのを中断させるように。からすさんの体の中どころか、触れてさえいないこの人が。

なんだよ、それ……そんなの、どうにもならないじゃないか。

清寺さんはもう一度傘を自分の体に引っ掛けて、空いた手を、そのまま振り下ろす。

「ぐう、あ……」

からすさんが声にして、苦痛にあえぐ。右手が杭に貫かれ、地面に繋ぎ止められたから。

「さようなら」

その声に、からすさんが伏せた顔を僕が再び上げた。靴の底が見える。頭上に清寺さんが持ち上げた足。これが下ろされた時、僕とからすさんは終わる。

何もできず、痛みすら与えてもらえず、こんな 傍観者のまま、僕は消えるのか。

あの時と同じように、ただその前に立って、そして薙ぎ払われるだけ。

……嫌だ。

僕は、死にたくない。

眼前に迫っていた靴底、そのかかどが額に触れ、そのまま落ちていった。

地面に靴が落ちている。清寺さんの革靴が、靴下が入ったままの状態で、両方とも。

その先で、清寺さんも落ちていた。傘を放り出し、仰向けに寝転んで雨に打たれている。

彼の脚が、根こそぎ無くなっていた。ズボンの大部分が自身と雨の重みで平らになっている。血の跡のような、そこに脚があったことを示す痕跡は何も無い。ただ、抜け落ちたように。

「……なに、これ？」

いつの間にか体も動くようになっていた。からすさんが自由な左手で右手を貫通している杭を引き抜く。途端に血が溢れ出しすごく痛そうなのだけれど、僕にはなんの痛みもない。それに今はさつきと違い、からすさんにも苦痛はないみたいだ。それがまだ救いだっ

た。

「……あ、僕、は」

彰君が、起き上がったからすさんの服のすそを遠慮がちに掴んで、これから怒られることが分かっているというような、不安げな面持ちでこちらを見上げている。

……この子がやったのか？ これを。

清寺さんが言っていた、彰君が持つという全能の力。それを使っ

たということなのか。だけど、それには対価が必要だとも言っていた。ならこの子は、今何を失ったんだ？

「うふ、ふふ、うふふふふふ」

突如聞こえてきた不気味な笑い声に、僕と彰君は横たわる清寺さんの方を見る。彼は手足の中で唯一残っている左手で口元を押さえられているけれど、それでもあからさまに分かるくらい、本当に嬉しそうに笑っていた。

あんな状態になって、一体何がそんなに嬉しいというんだ。

《とりあえずここから離れましょう》

からすさんは笑い続けている清寺さんを既に危険ではないと判断したのか、早々に背を向けて、彰君の手を取り歩き出す。

「え、ちょっと、いいの？ あの人あのままで」

《あの状態ですら、きつと今の私では手も足も出ない》

いや、別にとどめを刺そうっていうことじゃなくて。単純に、問題にならないのかなあっていう疑問だったんだけど。でも、今の言い方からすれば、あの人はまだ危ないってことなんじゃ……いいのかな、こんな風におもいきり隙を見せて。

しかし、僕の不安が現実となることはなく、彼が再び襲ってくるようなことはなかった。

僕は駐車場のエレベーターホールに向かうまでの間、振り返ってもう一度あの人を見る。

あの人は最後に見た時と同じように横になったまま笑っていて、ただどその笑い方は、もう無理に抑えることは止めたのか不気味ではなく、むしろ爽やかだ。

なぜだろう、僕の目にはあの満身創痍で笑う姿が、とても楽しそうに映った。まるで、無邪気に遊ぶ子供のように。

彼が視界から消えた後も、僕の中ではその笑い声がいつまでも響いていた。

僕は再びマンションの前に立っている。

と言っても、加賀さんの部屋があるあの高層マンションではない。今日の前にあるのはあんな非常識なものではなく、ごく普通の、見た限り十階建て程度のものだ。

からすさんが暮らしていた場所　そう聞いた。

清寺さんと戦った駐車場を離れた後、からすさんの提案で僕はまっすぐここに向かった。

既に雨は上がって晴れ間が見えているけれど、その空は赤い。もう日が暮れ始めている。

それでも、ここに来るまでの間からすさんは人目のない所では彰君を抱えて人間離れした速度と持久力で走っていたので、移動した距離を考えれば相当に早く着いたのだろう。

からすさんは一度マンションを見上げた後　自分の部屋を確認したのだろうか　マンションの玄関口の屋根に彰君を抱えて跳び乗ると、そのまま塀を越えて二階の廊下に降り立った。

……いやいや、なんで？　普通に入ろうよ。そりゃ鍵が無いんだからオートロックの扉を開けられないのは分かるけど、でも

「こんなことしなくても家の人にインターホンで、開けて、って言えばいいじゃん」

《無理よ》

……あー、そうだ。僕と違って容姿が今までと一緒だから大丈夫だ、なんて間の抜けたことを考えていたけれど、この人だって死んでいるんだ。普通に家に帰ることなんて、もうできない。

「あれ？　大丈夫からすさん？　どうやって説明するの？」

よくよく考えてみれば、姿が同じというのはむしろハードルが高くなっている。僕のように　未遂だけど　聞いた話を伝えるというやり方は通用しない。のみならず、この人はここに来る前、私

の部屋で今後の身の振り方を考えましよう、と言った。それはつまり、家族と話をするだけではなく、家に上がり込もう、ということだ。

……そんなことできるの？ どうすればいいのか見当もつかないんだけど。

《大丈夫よ》

僕の不安を一蹴して、からすさんは彰君を下ろすとエレベーターに向かい歩き出す。そのままエレベーターに乗り七階に到達すると当然だけども迷うこともなく、向かって右端にある部屋へ。扉の前で一度ドアノブを手にした後、思い直したように離し、その上の鍵穴と言つか扉を固定する機構そのものを力ずくで破壊してから扉を開け、僕は部屋の中に入った。

いやだからさ、そういうことしちゃ駄目だと思うよ？ 怒られちゃうよ？

「……いいの？ あんなことして」

いいはずがないのだけど、聞いてしまう。心なしかこれには彰君も軽く引いている気がする。

《大丈夫よ》

あれも？ 嘘でしょ？ どれだけ子供に寛大な親でもあれは無理だと思うけど……あんなことしたら僕のかあさんだつてさすがに怒るかなあ？ いや、まあいいですよじゃあ。それより微塵の躊躇もなく家の中に入らずか上がり込んでいる方は本当に大丈夫なんですか？ 家の人に見つかったら国家権力に通報程度じゃすまないのに。

からすさんの家は、ざっと見た限り3LDKくらいの、核家族が暮らすには標準的な広さの部屋だった。つまり、誰かが入ってくればすぐに分かるくらいの広さだ。でも

「誰もいない、と言うか……」

家の中は人の気配もなく、静まりかえっている、だけに留まらず全体的になんだか がらんとしていた。リビングには液晶テレビ

が床にそのまま置かれていて、その側に一抱え程度の箱があるだけ。ソファのような調度品の類は何も無い。キッチンにも調理器具はあるか、食器すら見当たらない。冷蔵庫がガスコンロの前というあり得ない位置にあるだけだ。

そして、その二つの空間に挟まれたダイニングには、やたら大きくて重そうなテーブルに椅子が一脚だけ置かれている。

大丈夫というのは、こういうことだったのか。

「からすさん……一人暮らし、なんだ」

《私が好んでそうしてただけで、家族は健在よ》

よけいな気を使わせてしまった。でも良かった。天涯孤独だなんて言われたら、どんな顔をしていいのか分からない。今の僕には無縁の心配ではあるのだけど。

からすさんはリビングを通り、その先にあるふすまを開けた。そこは八畳ほどの和室で、部屋の角に洋服だんす、奥に押入れがあるだけの他と同じような簡素な部屋なのだけど、一応 寝室、なのだろうか。

ここまで来てようやくからすさんは彰君の方へ振り返り、言った。

《服を脱ぎなさい》

「なんで!？」

はあ? という表情で見上げる彰君の代わりに、僕が叫んだ。あんな彰君になにするつもりなんだよ。部屋に上げた途端それか。

《服が汚れてしまっているから洗うと言っているの》

ああ、そういうこと? いきなり何を言い出すんだと思った。確かに濡れたり転んだりしてあちこち汚れてしまっただけはいるな。でもこういう場合はまずそれを先に言うべきだと思うんだけど。怖いから。

「でも……服これしかないし……」

彰君は理由は理解したようだけど気は進まないらしい。まあ、裸で過ごせっていうのもな。軽い虐待な気がする。軽くないな。虐待だ。ただの。

彰君のこの反応を見て、からすさんは押入れを開け、中にしまつてあつたタオルとパジャマを手にすると、それらを彰君に差し出して、

《服を脱いだら体を拭いて、その後これに着替えなさい》

彼をじつと見下ろす。

からすさん、今どんな顔してるんだろう。彰君が軽く怯えてる気がするんだけど。

「……分かった。着替えてくる」

わがママを言つて親に叱られた子のようにしゅんとして、彰君はリビングに戻っていく。

僕がそんな彰君を若干の罪悪感を抱きつつ見送つた後、からすさんは洋服だんすの前に膝をつき、その下部にある小さな引き出しを開けた。その中には小さな布のかたまりが敷き詰められていて、からすさんはその一つに手を伸ばし

ばんっ！ という派手な音を立てて、いきなり引き出しが閉じられた。

……ああ、下着か。今の。

《見たな》

「見たよ？」

見たけども、今のは僕が悪いわけじゃないと思うんだ。だいたいあんな丸まつた状態の下着なんて見られても別に

《謝りなさい》

「ごめんなさい……」

いや、なんかおかしくない？ 僕、なのかなあ……まあ、別にいいんだけど。いいんだけどなんと言つか、こう　　おかしいよね？ 《不便だろうけど、私が着替えている間はあなたの感覚を切らせてもらうわよ》

分かりました、と答える前に視界が無くなり、何も聞こえず、なんの感触もない世界へ。

うわ、なんか怖い。分からないけど、真っ暗な水の中を無限に沈

んでいつている、そんなイメージ。こんな状態で長時間放って置かれたら……よし！　なんか楽しいこと考えよう。すっげえ楽しいことしようぜ！　うん。無理だ。あ！　すっごい美人がいるよ！

「もう着替え終わったの？」

《ええ》

洋服だんすの扉の内側に掛けられた鏡に映るからすさんが頷く。

着替えるの早いなあ。おかげで助かった……ん、だ、け、ど　はあ……しかし、本当にきれいだな、この人。

「からすさんって、学校でもってもて？」

下駄箱の中にラブレターが一杯、みたいなことが現実にあるそう。本人は嫌がりそうだけど。

《私が通っていたのは女子高よ》

……この人の場合むしろもてるんじゃないのか、と思うのは僕の偏見だろうか。本人は嫌がりそうだけど。

「ねえ、ちよつと僕が体動かしてもいい？」

《構わないけれど》

僕がなぜそんなことを言い出したのか理解できない様子ではあったけど、からすさんは僕に体の主導権を譲ってくれた。そのまま彼女に理由を説明することなく、思いついたまま、おもむろに両手を胸の前で祈るように組み、上目づかいで鏡を見る。

「私……遥君のことが、好きなの！」

うおお！　いい！　いいぞこれ！　よし次は

《……何をしているの？》

「いや、からすさんはこういうことしなさそうだなあ、と思ったらつい……」

そんなに怒んなくてもよくない？　これは完全に僕が悪いの認めますけど。

《二度としないで》

「はい……すいませんでした……」

あ、しょんぼりしてるからすさんかわい　まずい、同じ過ちを

繰り返す前に早くここから離れよう。同い年の人にこんな怒られ方をするのはもうごめんだ。

そう思って、リビングの彰君の様子を見に行こうと洋服だんすの扉を閉めて歩き出した時、なんだか今まで感じたことのない違和感を覚えて、立ち止まる。

……分かった。スカートだ。さっきまでは上下共スーツで普段着てるブレザーと大差無かったから何も思わなかったけど、今の格好は白いブラウスとその上にややタイトで灰色をしたカーディガン、下は足首まで隠れるような紺のロングスカートという、確かにどこぞのお嬢様のようなこの人には相応しい服装で、そして僕にとって
は 未知の領域だった。

「なんか、この格好下半身がすーすーして落ち着かないんですけど……」

《すぐに慣れるわ》

にべも無かった。うん、ものすごく不安だ。世の女性はこんな頼りないものを身に着けて外出しているのか。しかも、これでもまだ露出が低い方というのだから。なんとこの胆力だ。たんにょく女性は精神的には男よりはるかに強いという話を聞いたことがあるけれど、なるほど頷ける話だ。

「あの……お手数だとは思いますが、ズボンにはき替えてもらえないでしょうか」

《私はさっき渡したパジャマ以外にズボンを持っていないの》

ええ……そんな人いるか？ 僕にさっきの仕返しがしたいだけなんじゃないのか、この人。まあ、悪いのは僕なんだから甘んじて受けるけども。いやでもなあ、それだったらそう言う人だよなあ。じゃあほんとに？ ううん、でも……例えばあれなんかは

「でも、学校で体育の授業受ける時はジャージ……じゃないの？

それくらいならここにも」

「あの学校は制服のままで受けさせていたから、無い」

「嘘お……スカートなんかはいてたら派手に動き回ることなんてで

きないじゃない」

「体育と言ってもほとんどが護身術の教習だったのよ。あそこには、普段と同じ服装で修練しなければいざという時意味が無い、という思想があつて、だから制服のままだったの」

……からすさん、すごい学校通つてたんだな。今の世の中に本当に特殊な訓練を受けている女子高生がいたとは……現実めええ。

「でも、でもじゃあ からすさんって、一人暮らしなんだよね」

《ええ、と言つたでしょう》

「じゃあ、お風呂場を掃除する時もスカートってこと？ ものすごくやりづらそうなんだけど」

《はかなければいいのよ》

反射的に「え？ それってどこまで？」と聞きそうになつたけど、なんとか踏みとどまつた。僕にも学習能力はあるということだ。だいぶ貧弱ではあるのだけれど。

それにしても、と意味もなく部屋の中をうろろしながら思った。どう考えても変なのだ。上着はスカートの外だからいいのだけど、ブラウスのすそはスカートの中に入っていて、動くたびに脚の付け根辺りでふわふわして非常に気持ちが悪い。これはこの状態が正解なのだろうか？

「からすさん、この服の着方ってこれであつてるの？ なんか変じゃない？」

《あなた女性用の服の着方なんて知っているの？》

知らないよ。それ言われたら終わりですよ。でもなあ。納得いかないんだよなあ、これ。

僕は寝室を出てリビングへ戻つた。そこでは思った通り、大きすぎるパジャマを着た彰君がなんとか自分の身の丈に合わせようと四苦八苦していた。

「彰君、これさあ、なんか変だと思わない？」

からすさんでは話にならないので彰君に判断してもらおうと、スカートのすそを胸あたりまで持ち上げて、ブラウスの端が無造作に

垂れているところをさらす。

呼ばれてこちらを見た彼は一瞬固まって、その後すぐに　パジ
ヤマそっちのけで慌てて背中を向けてうつむいてしまった。そして、
なぜか正座している。

えっと、いや、確かめて欲しいんだけど　あー……ああ、うん。
うん。そうか。なるほど。分かりました。

この時には既に僕の体は動き始めている。リビングを横切ってダイニングへ向かい、そこで立ち止まると右足を後ろへ高く振り上げ、視線の先には無駄に大きなダイニングテーブル。

ははあん、そうか、この人は僕を殺すつもりなんだな。さて、どうやってあやま

……動いた？　すごい重そうなテーブルが動いた。当たったの小指だったのにな。正直確信が持てないんだけど……小指、とれてないよね？

《あなたさつきからわざとやっていない？　ねえ？　馬鹿にしているの？　そうなの？》

「違うんですよ。そんなんじゃないんです。ただちょっと頭の方が悪いだけでえ」

床に倒れ伏しはしたけれど、がんばって、すぐくがんばって、泣くだけは我慢して謝った。正直なところ、まずはおもいきり泣いておきたかったのだけど、しかしこれ以上被害が拡大することだけは何にかえても防がなければならない。

《……ちよつと？》

「かなりでした」

鬼か。僕が悪いんだけど。なんかさつきからこんなのはつかりだな。あれ？　でもこれ……

「あのさ、これってからすさんも痛いんじゃないの？　はっ、駄目だねー。からすさんのバーカ」

《私に伝わる痛覚は遮断しているから何も感じない》

「うわー、きつたな　いった！　うう、ぐ……嘘、でした！　さ、

最高です！ からすさんは最高に素敵です！ 馬鹿は僕だけです！
つてもう、もうよくないですかね！？」

痛めた小指をたっぷりと固い床にぐりぐりされながら、僕はから
すさんが清寺さんと戦った時のことを思い出した。あの時、手に杭
が突き刺さっても僕はまるで痛みを感じなかった。だけど、からす
さんは痛そうにしていた。今はその逆でことか。あー、他ごと考
えても全然変わらないや。分かってたけど。まあこれはいいや。そ
れより

「からすさん、ありがとうございました」

《……気持ちが悪い》

お礼を言ったら即座に僕をいたぶる動作が中止された。どうい
う目で僕を見てるんだよ。

「そういうんじゃないよ！ 今で清寺さんの時のこと思い出した
からその時のだよ！」

《礼を言われるようなことはしていないでしょう》

本人がそう言うのならこれ以上は何も言いませんけども。あの時
のことを思い出した僕は、穴を空けられた右手を見て今更ながら驚
く。傷がもう完全にふさがっていた。治る早さが尋常じゃないな。

この体はこういうところも普通の人とは違うのか。

体の傷はふさがったけれど、この人に影響と云うか、負担のよう
なものが残っていないければいいのだけど。僕にはそういうことがま
ったく分らないことが、歯がゆい。

「……あ、大丈夫？」

さっきまでぎゃあぎゃあわめいていたのに突然静かになった僕に、
彰君が今日だけで何度見せたか分からない心底相手を案じている顔
をして、だけど今までとは違い僕が寝転んでいるので、見上げるの
ではなく、上から覗き込んできた。

うん。これはこれで大変良い感じです。この目が危ない人を見る
それじゃないところが、この子のいいところだと思う。

「大丈夫じゃないけど……こうしてればすぐよくなるかなっ！」

さっきの名残なのか正座している彰君のお腹に顔を埋めて、膝に体を乗せて抱きつく。彰君は驚いて、パジャマのそでから出てもない手で僕を引き離そうとするけど　ふっ、子供の力で高校生に勝てるわけがないだろう？

「こんなの別に怪我と関係ないと思う……」

腕力では敵わないとさとり、論理的に立ち向かってくる。しかし

「ありますー。ものすっごいありますー。こうしないと治らないんですー」

残念！　そんなものは相手に応じる意思がなければ意味をなさないのだよ。

しばらく彰君を抱きしめた後、この状態は話しづらいと思ったので僕は体を仰向けにして、今度は膝枕をしてもらう。恥ずかしいような困ったような表情を浮かべる彰君。そんな彼を見ていたらふと思いついたことがあったので「ねー、からすさーん？」と呼びかけた後、返事を待たずに本題に入る。

「僕がこれからずっとこのままだったらさあ、彰君と結婚するけどいいよね？」

《……何を言っているの？》

さらに複雑な顔をする彰君と、僕の正気を疑っている気配のするからすさんに構わず続ける。

「だって六歳くらいしか変わんないしさ、十年も経てば違和感ないでしょ？　いけるいける。その間は花嫁修業とかしてるから。いいお嫁さんになれると思うけどなー。家事好きだし」

《あなたは男でしょう……》

え？　ああ、それは……確かにその通りなんですけど……う、うん？　なんか……僕、踏み込んではいけない領域へ向かってひた走ってる、のだろうか？　別にそういうつもりじゃないんだけどな。なんだろうなこれ。あれだな、一応確認しておいた方がいいのかな。考えるのはそれからしよう。

彰君の膝から起き上がり、彼と向かい合って僕も同じように正座する。わずかに乱れた着衣を直した後、上着のすそと、そのすそ越しにブラウスを掴み、それらを首の辺りまで一気にまくった。

当然、胸が見える。飾り気のない白い下着に包まれた女性の胸がからすさん、なんとなく気付いてはいたけど　あんまりないんだね。でも……ものすごくどきどきするぞ！

なんだ。やつぱり僕はノーマルじゃないか。心配して損した。

あーあ、彰君がまた背中向けちゃった。耳まで真っ赤にして。もう、ほんとかわい

「ごめんなさい……ごめんなさい！　折れる！　腕を変な方向に曲げようとしなくて！　折れちゃう！　折れちゃうからあああ！」

《あなた……本当にどこかおかしいのじゃないの？》

あつはつはあつ！　何を言ってるの？　僕はどノーマルですよ？　からすさんはおかしいことを言うなあ。だって確認したもの。何の問題もありますね。左腕の肘関節以外は。

「それにさ、痛くなくてもさ、折れちゃったらからすさんも不便でしょ？　ね？　ね？」

《治せばすむことだもの》

「許してくださいお願いします二度としません誓いますから」

みしいっ、という人体からはあまり聞いたことのない音をさせてようやく、からすさんは腕を解放してくれた。まだびりびりしてはいるけど、動くところを見ると折れてはいないらしい。

「はあー、まったくもう。からすさんは加減つてものを知らないんだよなあ。ねー？　彰君もそう思うよねー……いや、ほんともうやめてねからすさん」

足の小指の痛みで悶絶していた時の再現のように、僕の心配をする彰君に再び膝枕をしてもらいながら、自分でも信じられないくらい横柄な態度をとって、その後それに怯えるというよく分からないことになった。

彰君と接する時はなんでこんな風になってしまっただろう。普段

の僕はここまでひどくない、と思っているのだけだ。

「？　どうかした？」

彰君がさっきのような恥ずかしがっている様子ではなく、あきらかに浮かない顔をしていた。やはり見た目は美少女でも中身が男の人間に膝を貸すのは不快なのだろうか。

「……遥さんは、僕が怖くないの？」

僕には、そう言っ僕を見下ろす彼の方こそが、何かに怯えているように見えた。彼の頬にそっと両手を伸ばし、互いに逆さの状態で見つめ合う。

「清寺さんの話を聞いた時は　正直、怖いと思ったよ」

彼の目が揺れる。きっとその気になりさえすれば、恐れるものなんて何も無いはずなのに。それなのに今は、どこにでもいる普通の子供のように、震えている。

当たり前だ。この子は、どこにでもいる普通の子供なんだから。

「でもね、今は全っ然怖くない。だって」

驚いた顔。彼が何かを言おうとしたところで、

「彰君、ただのいい子なんだもん」

触れていた手で頬をつまんで、引つ張った。そのせいでこの子がつむいだ言葉に意味は乗らなくて、僕はそれを見てあはは、と笑った。笑いながら、呆気に取られている彼から手を離して、

「助けてくれてありがとう」

もう一度、手のひらでその頬に触れた。

「でも……僕駄目だって　あの時、遥さんと新仁さんがあんなことになってた時でも僕は、これは使っちゃいけないだって思っで、でも気付いたら……だから僕、ほんとね、僕の本当は」

「うん。だから、ありがとう」

使っではいけないもの。そう思っていたのに、それでも君は、助けてくれたんだから。

「……怒らないの？」

憂いを帯びた目。自分は罪を背負った人間だと思っている顔。こ

の子は本当にどこまで

「怒られるのは、僕の方だ」

体を起こして、彰君を胸の中でおもいきり抱きしめた。

「君はあの時、何を失ってしまったの？」

力の行使にともなう対価。この子は何も言わなかった。僕のせいで失くしたものを。

彰君は僕の背中に回した手で服をぎゅうと掴むと、

「……分らない」

消え入るような声で、しぼり出すようにそう言った。

外から見てもそれは分からない。だけど、自分自身でも分からないなら……それは

「思い出が無くなるんだって、あの人は言ってた」

思い出……記憶、か。それも忘れるんじゃない、失う、のか。無いものは、思い出すこともできない。だから、何を失ってしまったのかも、分からない。それは、あの時失くしたのがこの子にとってかけがえのない記憶だったのかもしれない いや、違う。そうじゃない記憶なんてないんだ。

「僕は、車にはねられて死んだはずなのに、でも気がついたら目の前にものすごく大きな穴があって、頭の中がごちゃごちゃしてて、聞いたことのないはずの変なことを知ってて、家に帰りたいと思って歩いていたら、あの人が来て僕がどうなってるのか、全部教えてくれた」

その結果が、殺されることを待つ 望む子供。

「あの人だけじゃない。僕は、たくさんの人を」

抱きしめる腕に力を込めて、この子の言葉をさえぎる。聞きたくないよ。そんなことは。この子が気に病むことじゃないはずなのに、それでもこの子はきつと、自分を責めることをやめないんだ。

「覚えてること、教えて欲しいな。彰君の大事なこと」

代償の大きさが使った力の規模なのか、あるいは回数なのかは分からないけど、でもこの子はまだすべてを失ってはいないはずだ。

そうでなければ、こんなにやさしいはずがない。

「お父さんとお母さん、阿貴あたかのことは、覚えてる」

「阿貴、って？」

「僕の五つ年下の妹。よく僕が宿題してる時に、お兄ちゃん本読んでて、僕にもよく分からない本を持ってきて、僕はなんとか読んで聞かせようとするんだけど、でも阿貴はいつも本より、困ってる僕を見て笑ってた」

「そっか。彰君はいいお兄ちゃんなんだね」

お兄ちゃんが自分のために一生懸命になってくれるのが嬉しかったんだろうな、きつと。

抱き寄せていた彰君を離し、向かい合って彼の手を強く握って、まっすぐにその目を見る。

「僕が言うことじゃないって分かてるけど、でも 彰君、もうあの力は使わないで。大事な人のこと、失くして欲しくないから」
そうになったら、きつとこの子がこの子ではなくなってしまう。

「だから、もう彰君があのを使わないでいいようにがんばるからさ……からすさんが」

両手について絶望した。ひどすぎる。がっかりしてるだろうなあ。怖くて見れないけど。

「ねえ、からすさん？ほんとに僕にできることってないの？」

《無い》

ちよっとは考えてよ。僕にできる最善の行動が、邪魔にならないように何もしないようにする、って……あんまりだ。まあ、ほんとは僕が考えなきゃいけないことなんだけどさ。

「あ……えと、大丈夫、だよ？ 僕、嬉しかったよ？ だから、その」

「僕やつぱり彰君と結婚するうーーーーー!!」

叫びながら愛しい人の胸へ飛び込んだ。あー落ち着くなあれ。もうずっとこうしてたいなあ。駄目なのかなあ。なんで駄目なんだろう？ 駄目じゃないだろう。こうしてよう。

《いい加減これからの話をしたいのだけ》

「だからー、彰君と幸せな家庭を築くんだっ

あぐ、っぐ、はい

！はい分かりました！話しましょう！話しまくりましょう！

だから間接を極めないでください！」

《？出口？に向かいましょう》

初手から結論だった。それも、まったくの予想外の。

「……え？　だってそこには　」

必ず罠がある、そう言っていたのは、からすさんなのに。

確かに？　外？　に出られるのならそれはそれが一番いいとは思っけれど、それができないって言うから……ああなっただけで。

《ええ。だから今すぐということではなく、準備ができ次第に》

「準備って……何を用意していくの？」

何か当てがあつたからここに取りに来たってことなのかな。見当もつかないけれど。

《この体の扱いを完全に把握してから、という意味よ。それで必ず突破できるとは言えないけれど、それでもこのまま？　中？　に留まっているよりは望みがあるでしょうね》

「やっぱり、敵が清寺さん一人ってことはないのかな」

《それは分からないけれど、仮にあの人だけだとしても、長い時間を置けば体を治したあの人がもう一度現れることになると思う》

そうか。からすさんの右手のように、あの人体だって回復力が普通じゃないのか。

「むしろ、今頃はもう元通りになつてるんじゃない……」

《その可能性は低い。腕はともかく、あの脚をそう簡単に戻せるとは思えないから》

彰君の力は神様の権限と同じ　それに繋がることなのだろうか。僕にはまるで分からないけれど、あれは単純に失っただけではない、ということなのか。

「大丈夫、かな」

彰君がわずかにうつむいて、不安をあらわにする。彼が案じてい

るのはこの先にある危機なのか、それとも、清寺さんの安否なんだろうか。

《何をどうしたところでこちらが圧倒的に不利なことに変わりはない。助けが期待できない以上、逃げる以外の選択肢はないのよ》

「選択で思い出したけど、彰君の服放りっぱなしだね」

と言つてもそこは彰君なので畳んではあるのだけど。別に今から洗う服を畳まなくてもいいのに。

「……聞ってるよ？ ちゃんと聞ってるんですよ？ ただふと思い出したから……つい」

無言の圧力を受け止めきれなかった。いやだつてさ、全然話についていけないんだもの。

《それに、これは希望的観測だけれど 敵がそう安易に襲ってくることはないと思う》

僕をあつさりと無視して、からすさんは話を進めてしまふ。この人が彰君に服脱げつて言ったのに。

「……どうして？」

無論洗濯のことではなく、からすさんの予想に対してだ。さつき自分で僕らの方が圧倒的に不利だつて言つたばかりなのに、それなのにどうしてそんな風に思うのだろう。

からすさんは僕の疑問に何も言わずただ目の前を見つめるだけで

「！ 駄目だからね！ 彰君はもうああいうことしないんだから」

《相手がその事情を知る術はないでしょう》

「あ……まあ、それはそうだけど。でも」

清寺さんの状態だけ見れば、彰君は力を使うことをいとわない、そう思えるのか。

「結局彰君を利用しているみたいで、なんか嫌だな……」

あの時と同じように、この子の助けになりたいと思いがら、この子に助けられている。

急に、彰君が僕の手をぎゅっと握り締める。

「ありがとう」

とびきり明るい笑顔。向けた相手を信じきっている、そんな笑顔。
「ひゃっはー！ー！！ 誰も僕らの邪魔を ちいい」

抱きつこうとしたら、さすがに読まれていたのか避けられた。く
そう。でも好き。

《近所に何事かと思われるからもう少し静かにしていて》

「はい………すいませんでした………」

また怒られた。二度とごめんだ、と思ってから何度目だろう。う
ん。数え切れないな。

《どうせしばらくは時間が空くのだから、その間に好きなだけ遊ん
でもらいなさい》

からすさんは当然、僕に対して言っている。小学四年生に遊んで
もらう高校一年生か………構うものか。僕だって彰君に本読んでもら
う！ 膝の上で読んでもらうからな！ 僕が下だけど。

「じゃあ本貸して本。面白いやつ」

《無い》

この家ほんとに何も無いじゃないか！ 本が一冊も無い家なんか
この世にあるのか！？

「からすさん僕と会った時本読んでたじゃん。ほんとのほんとに一
冊すら無いの？」

《あれは参考書よ。それなら多少はあるけれど、あんなもの面白く
はないでしょう》

参考書………か。いや、彰君の話を思い返すと阿貴ちゃんはむしろ
そういうのを読んでもらっていたのかもしれない………えー、そんな
のつまんなーい。死んだ後でそんな知識絶対使わないし。いやまあ、
生きている時でも使わなかったかもしれないけどさ。

《ここにある娯楽と言えば、あれくらいよ》

からすさんが指差した先は、テレビの脇に置いてある箱。確かに
気にはなっていたけど。

「中見てもいい？」

返事がないことを了承の返事として、僕は彰君と一緒に箱に近づき、中を覗き込んだ。

……なんだつけこれ？ 子供の頃にお隣さんの茜ちゃん紅ちゃん家で見た覚えがあるんだけど……名前が出てこない。

「ファミコンだ」

彰君ナイスプレイ！ それぞれ。すっかり忘れていた。この白くて赤いゲーム機の名前。

《ファミリー・コンピュータ、と呼びなさい》

「へえ、正式名称はそう言うんだ。これ」

なるほどね、それでファミコンなのか。どうでもいいけど。

《ファミリー・コンピュータも知らないなんて……男のくせに情けないわね》

この人は何を言っているの？ほんと、ゲームのことになると執着の仕方がおかしいんだよなあ。

「だけど、僕らがあそ　まあ、時間が空く間、からすさんは何をしてるの？」

《私は準備をする、と言ったでしょう》

「いやそれは覚えてるけど、具体的に何をするのになって。僕が好きにして大丈夫？」

《ええ。私は　私が着替えていた時のあなたと同じ状態になるから。外のことは関係ない》

「……あれですか。なんか心配になってきたんだけど、ほんとに大丈夫？　手伝うよ？」

《大丈夫よ》

いつも通りの即答での肯定。いついかなる時でも不平不満など決して口にしない。この人は一体どういう教育をどこされて育てられてきたのだろうか。逆に心配になってくる。

《たまには息抜きをさせてもらうから》

からすさん……ほんとファミコンしたくしょうがないんですね。うん。なんか安心した。

僕らがからすさんの家を発った頃には外はすっかり暗くなっていた。

その暗がりの中を、僕らは予定通りまっすぐ？出口？へと向かった。

文字通り、まっすぐ一直線に。

彰君を抱えたからすさんが進行方向に存在する家やビルなどの障害物の上を、走るといふより飛び移って進んだ。そんなことをすればすぐに騒ぎになってしまう、はずなのだけど、でもそうはならなかった。

周りには僕らが見えていないのだ。駐車場で清寺さんが破壊した車のように、誰も気付かない。

僕には見当もつかないことだけれど、きっとこの数時間でからすさんの力は相当に向上したんじゃないだろうか。建物の上を通るといふのは、高層マンションから飛び降りたくらいだから以前にもできたのかもしれない。だけど、周りから認識されなくするというのは今まではまったくできなかったことのはずなのに、今はそれを実行するのに苦心している様子すらない。

あの暗闇の中で、この人はどれほどの修練を積んだのだろう。大変だったって、それくらいは言ってくれてもいいのに。

でも、それは僕のがままだろうな、そう思い至ったところで僕は　これだってそうかと、からすさんの家を発った時から抱えていたことを今ようやく口にして、思った。

「二人は、このまま進んでもいいの、かな」

僕らは既に？出口？までの道のりの半分以上を踏破していた。今は休憩のために立ち寄った自動販売機の前でお茶を飲んでいて、そこで僕は　今更だとは思ったけれど　からすさんと彰君にそう聞いた。

《質問の意図が分からないのだけ》

彰君もからすさんに同意見なのか、困ったような表情で僕を見上げています。

「僕は、あんなかたちになりはしたけど　かあさんに、大事な人に会えた」

思い描いていた通りではなかった。あれは思っていたよりもずっと喜ぶべきことで、それがとてもつらくて、でも　だから、それを知ることができて良かったと、思えるから。

「二人はいいのになって、思ってた……」

？外？に出れば、恐らくもうここに帰ってくることはないだろう。？外？に目的地があるのではなく？外？に出ること自体が目的なのだから。そして出てしまえばもう、誰にも会えない。偶然？外？に出てきてくれて、偶然？外？で出会う、なんて都合のいいことが起きない限り。

《私に会いたい人間はいない》

「僕も、いいよ」

からすさんが一切の迷いを見せずに告げ、それに続くように彰君も否定した。

からすさんは　この人がそう言うのなら、きっとそうなんだろう。この人は、自分を偽らない人だ。この人がそう言うことは、それが本当か、もしくはそう決めたってことなんだろうと思うから、気を使うとかそういうことじゃなく、自分自身で。だけど

彰君は、彼が今日生まれた際の話をしていた時、家に帰りたいと思った、そう言っていた。

あれは自分の置かれた状況を知る前のことではあるけれど、知ったからといって、その思いが消えるのだろうか。

この子はまだ親に甘えたい年頃の子供で、だからきっと、そんなはずなくて、

「本当に、そう思ってる？」

しゃがみ込んで目線を合わせると、彼はすぐにそれを逸らした。

僕が人に言えることじゃないけれど、この子は嘘をつくのが下手だ
いや、そうじゃないのか。

この子は、ほんとには嘘をつきたくなくて、でもそれを我慢して、
嘘をついているんだ。

「本当のことを言ったらわがままになる、って思ってるんですよ」
両手で彼の頬を包んでこちらを向かせ、額同士で触れ合うと、彼の
体温が伝わってきた。

「違うよ。これは、僕のわがままなんだ。僕が嫌なんだよ」

彼は僕から離れて、今度はまっすぐに僕の目を見て、だけど聞いた
こととは違うことを言った。

「でも……じゃあ、新仁さん、は？ 新仁さんだって」

《私は私が思ったことを思った通りに言っている》

からすさんは　と僕が答える前に、彼女自身が彰君の逃げ道を
ふさいだ。

僕がからすさんの前に立ちふさがった時のことを思い出す。この
人は自分に嘘をつかないだけでなく、人にもそれをさせない、厳しい
人だから。

彰君は服のすそを掴んでうつむいて、でもしばらくして意を決し
たように、顔を上げた。

「……会いたいよ。会いたいけど、そのせいで二人に迷惑がかかる
のは、嫌だ……」

《あなたがそう思うのなら、そうしましょう》

彰君の答えを聞いて、からすさんは彼を抱え上げた。それは移動
するための準備。彼は目を閉じて体を預ける。彼の望んだ通りの結
果に。

「あ、からすさ……ん？」

諦めきれなかった僕がからすさんを止めようとした時、彼女は？
出口？に背を向けた。

「……どうして？」

不思議そうに見上げる彰君。それに彼女は

《迷惑でなければいいのでしょうか?》

そうなんだ。この人は厳しいけどでも、彰君に負けなくらい、やさしい人なんだ。

たどり着いても今までと同じように、ただいま、とは言えない。それは分かってる。だけど、僕がかあさんに言いたいことがあったように、彰君にだってそれはあるはずなんだ。

彰君が住んでいた場所は彼の父親が勤めている会社の社宅で、都市の中心部からはやや離れた位置にある広大な敷地に点々といくつもの集合住宅が建てられていた。

集合住宅にはそれぞれアルファベットが記されていて、AからJまでが等間隔に並んでいる。それらの間には公園や、余裕を持って野球ができそうなグラウンド、テニスコートなどが備えられていた。彰君の案内に従って僕らはE棟の階段を上る。この入口にはオートロックの扉のような障害はなく、僕は安心していった。からずさんが力でそれらを破壊する必要が生じなかったからだ。この人もさすがに他人のものにあんな真似はしないだろう、と思いたいのだけれども。

「もうだいぶ遅い時間だけど、出てくれるかな」

時計がないので正確な時間は分からないけれど、もう深夜と言っていい時間だ。既に寝ているか、起きていたとしても、人が訪ねてくる時間ではない。

《出てくれないければ、こちらから入っていけばいいでしょう》

やっぱりあれをやる気なのか……人様の家をあはしたくないから心配してるのに。ただでさえ難しい状況なんだからさ。

「ここが僕の住んでいたところ」

四階、建物の正面から見て左端の部屋。彼は緊張した面持ちでその扉の前に立った。そして、一度目を閉じて深呼吸をしてから、インターホンの呼び出しボタンを続けて三回押した。

しばらく待って、これは誰も出てくれない　からずさんがそう判断してドアノブを握った時、

『……はい』

インターホンから、不審に思っただちらの様子をうかがうような声が聞こえてきた。

「お母さん……彰、です」

聞こえた声に、一語一語自分で確認するようにゆっくりと、彼はそう告げた。

それからしばらく経って、扉の向こうに人が来る気配がしてから、静まり返った廊下に鍵とチェーンロックを外す音が響いた。その後、恐る恐るという様子で扉が開かれていく。

「彰……」

扉を開けた女性が、己の前に立つ彰君に信じられないものに対する視線を送る。

「……お母さん、僕は、あの」

「とりあえず中に入りなさい」

彰君のお母さんは彼が言いかけた言葉をさえぎって彼を家の中へ招き入れる。僕を一切見ないことを考えると、からすさんがまた周りからは見えないようにしているのだろう。

「何も言わなくても分かっているのよ。あなたの好きにしなさい」

僕も家の中に入ったのを確認してから彰君が後ろ手に扉を閉めた途端、彼の母親は、僕にはまるで意味の分からないことを言った。彰君には、分かっているのだろうか。

「僕は……言いたいことがあって、それで帰ってきたの。すんだらすぐに出て行くから」

「……何を言っているの？」

かみ合わない会話。それはなにも死んだ息子が帰ってきたから、そういう理由ではないように思える。この人はこの状況に驚いてはいたけど、取り乱してもいない。だけど

「僕は、本当は、天野彰の偽物です。だけど、思っていることは一緒だから。覚えていることは……なくなってしまったことがあると思うけど、でも覚えてるから。だから僕は、天野彰の代わりに、僕は幸せでしたって、ありがとって」

「そう。あなた彰じゃないの……そうよね。あの子がそんなこと言うはずがないものね」

「ちが、僕は　違うけど、違うけど一緒なんだ。僕は本当にそう

「本当にあなたが彰だと言うなら、あの子がどうやって死んだのか
言っでごらんなさい」

「……車にひかれて、それで　」

「どうして車にひかれたの？」

「……横断歩道で立ち止まってたから」

「どうしてそんなところで立ち止まっていたの？」

「……お財布を拾おうとしたから」

「その財布は誰が落としたの？」

「……」

「黙ってないで言いなさい！」

「……お母さん」

彰君を前にして、決して喜んでいるようにも見えなかったのは、
そういうことなのか？

この人が彰君と横断歩道を渡っている時に財布を落として、でも
この人はそのまま歩いていってしまったて、それに彰君だけが気付い
て、彼が財布を拾おうとしたところに、車が突っ込んできた。

もしその通りだつていうのなら、だから、この人は分かっている
なんて言ったのか？　この人は、彰君がここに自分を

「……本当なのね。なら私が憎いでしょう？　あなたは私のせいで
死んだのだから」

「そんなことない……そんなことないよ。僕はお母さんが憎くなん
かない。誰かのせいだなんて思ってない。僕が悪いんだから。僕が
周りを　」

「嘘をつくな」

彰君のお母さんが、彰君を殴った。振り上げた平手を、彼の頬へ
打ちつけた。黙らされた彼はうつむいて、でも、もう一度母親をま
っすぐに見つめる。

今君は、どんな顔をしてお母さんを見ているの？

「どうしたのー？ こんな夜中に大きな声出したら近所迷惑だよ」
家の奥へ通じる廊下から、この場にそぐわないのん気な声を上げて、二十歳くらいの女性が目をこすりながら玄関にやってきた。いかにも、今まで寝ていたのに、という様子で。

「彰が会いに来てくれたのよ」

彰君の母親は今までの態度が嘘のように、笑みすら浮かべてこの場に來た女性に言う。そして女性は、彰君を見て、

「……おにい、ちゃん？」

確かに、そう言った。

彼女は どう見ても成人した女性だ。なのに……なぜ小学生の彰君を、そんな風に呼ぶ？

「阿貴……すっかり大人だね」

彰君は、この女性を平然と、妹の名で呼んだ。

「当たり前だよ。もう二十年も経ったんだから」

……誰もこの子が今朝死んだなんて言わなかった。生まれた、そう言っていただけだ。僕はずっと勝手に、この子も、僕とからずさのように最近死んだものと思っていた。

「でもその当たり前が、すごく嬉しい」

違ったんだ。この子は二十年前に死んで、今朝にその時のまま生まれ変わった。そして、この子自身それを知っていた。あの人達が全部教えてくれた。この子が、そう言っていた。

「お父さん、は？」

「仕事で 出張で、今はいない、の……」

無表情で彰君を見下ろす彼の母親、その後ろには怯えた表情を浮かべた彼の妹。

「そっか……なら、お父さんには二人から伝えて。僕は、僕はね、幸せだった。お父さんとお母さんの子供で、阿貴のお兄ちゃんだったことが、本当に幸せだったんだ。だから」

その愛する家族に受け入れられない。すべて承知の上で、この子はここに來たのか。

「ありがとう。僕の大切な人でいてくれて、ありがとう……これだけは、言いたくて……」

だからこの子は、こんな拒絶の意思にさらされても、何も変わらないままで

「黙れ！ お前はあの子じゃない！ あの子の振りはやめろ！ あの子が私を許すはずがないんだ！ 私があの子を殺したんだから！ あの子は絶対に私を許しはしない！」

肩を震わせて、声を張り上げて、彰君のお母さんは、彰君のすべを否定した。

彰君は、何も言わない。服の胸の辺りを握りしめて、それでも、母親から目を逸らさない。責めているはずはない。ただ、嘘にしないだけなんだ。

「ようやく、あの子がいなかったことが当たり前になってきたの……ようやく、あの子のことを忘れられそうなのよ……」

彼の母親はそれに耐えきれなくなって、床に崩れ落ちた。両手で顔を覆って、彰君を自分の世界から追い出して、

「お願い……もう許して……」

自分の息子に、小さな子供のように泣きながら、そう懇願した。

「……ごめん、なさい」

彰君はもうお母さんを見ていなかった。顔を伏せて、服を掴んでいた手をゆるめると、そのまま二度と顔を上げることなく、最愛の家族に背を向けて、外へ飛び出して行った。

「あなたは……誰なんですか」

天野阿貴さんが僕を見る。そうか……ただ相手にされていなかったただけだったのか。当然だ。死んだはずの息子が帰ってきたんだ。それ以外のことに執着する理由なんてない。

「僕は　僕は天野彰君の　友達で、彰君をここへ連れて来たのは、僕なんです」

なんのための、誰のための言い訳なのか、自分でも分からない。でも

「あの子は 彰君はすごくいい子で、やさしくて、だから 嘘じゃないんです……」

涙をこらえるために、手をきつく握りしめた。そんなことは、許されないから。

「……知っています」

初めて僕に顔を向けた彰君のお母さんは、彰君と同じ顔をしていた。

自分が罪を背負った人間だと思っている。自らの罪を認め裁かれる時を待っている咎人。

僕は、この人に何も言うことができない。

無言で背を向けて、僕も外へ出た。後ろ手に閉めた扉、その奥で人の動く気配はない。

ただ、僕が傷つけた人の泣く声が聞こえるだけ。

「……彰君を探さない」と

僕が言い終わるのを待たず、からずさんが廊下の塀を飛び越えて宙へ躍り出た。そしてあつという間に地面に到達し、同じく既に下まで降りていた、今も走って遠ざかっていく彰君の背中を追いかける。

彰君がからずさん達のような人間離れた身体能力を見せたことではない。すぐに追いつく、はずだけど、からずさんはそうはせずに、体の主導権を僕に預けた。いや、預けてくれた。

例え、からずさんのように扱えなくとも僕と彰君の走る速度の差は大きい。程なくして、彰君が公園に差しかったところで僕は彼の名を呼んで、その腕を掴んだ。でもその手はすぐに振り払われて、ただど立ち止まってはくれて、僕に背中を向けたまま、うつむいている。

「……彰君、ごめん。僕のがままのせいで……ごめんなさい……」
許されることじゃない。それは分かっている。それなのに、僕は許されたいと願っている。この子なら、きつと許してくれる。そう思っているんだ。なんて 汚い。

彰君が振り向いて僕を見上げる。僕はさぞ哀れみを請うようないやらしい顔をしているのだろう。この子や、あの人とはかけ離れた、醜い顔を。

「ありがとう」

「……どうして？」

免罪ではなく感謝の言葉。この場にもっとも似つかわしくない言葉を、彼は口にした。

「嬉しかったから。お母さんと阿貴に会えて、僕は本当に嬉しかったよ。ほんとはもう会えないはずだったのに、それでも会えた。遥さんが行こうって言うてくれたから、新仁さんが連れてきてくれたから、僕はもう一度大切な人に会えた」

彰君が僕に笑顔を向ける。彼を苛んでいる苦痛を覆い隠すための、笑顔を。

「だから、ありがとう」

僕は、この子にこんなことをさせるために、こんなことのために、行こうと言ったのか。

さっきこらえた涙がまた溢れそうになるけれど、からすさんの体を傷つけるほどに拳を固める手に力を込めて、抑える。

僕はこれ以上、卑怯者になりたくない。

僕が我慢するだけで何もできないでいると、突然手の力が抜けて拳が解かれる。事態を把握する間もなく自由を失った手が振り上げられ、そしてそのままその手が、彰君の頬を打った。母親に打たれたところを、それよりもさらに強い力で。彼はなすすべもなく、地面に倒れ伏した。

何が起こったのか分からず、倒れたまま戸惑いの表情を浮かべ僕を見上げる彰君に、

「ふざけるな」

からすさんが、鼓膜を震わせる声で言った。

僕は反射的に抗議の声を上げようとしたけれど、話すことができない。何も、できない。

「まだ幼い子供が母親にあんなことを言われて、笑っていられるはずがないでしょう!」

怒っている。からすさんは、本気で彰君に怒りを覚えているようだった。見下ろした先で、頬を押さえている彰君の表情が、戸惑いから怯えたものへと変わっていく。

「あなたは どうして そんなく だらない ことを する の?」

声の調子はもういつもと変わらないように聞こえるけれど、でも、彼女の怒りは消えていない。

そして、まるでからすさんの怒りが伝染したかのように、見上げる彰君の表情も怯えをさらに塗りかえて、怒りに支配される。

「嬉しかったんだ! 嬉しかったんだから、笑ってもいいじゃないか! あの人の言ったことは本当なんだ。本当のことを言われたって何も思わない。僕は、嬉しかっただけだ!」

この子がこれほどの怒りを 感情のままに叫ぶところを見るのは、初めてだった。

「子供が母親をあの人なんて呼ぶんじゃない」

立ち上がるうとした彰君を、からすさんはもう一度殴った。彰君はまた倒れて、けどその目に宿った怒りは、さらに強さを増す。

「……あの人は母親じゃない。お母さん、なんて呼んじやいけないんだ。僕は? イグノーブルス創造主? が創った千十一番目の? ライティス・レイス理法の眷属? なんだから……僕は天野彰じゃないんだから!」

「それがなんだっていうの?」

からすさんは座ったままの彰君の胸ぐらに手を伸ばし無理矢理に立たせると、そのまま手を離さず彼をほとんど吊るし上げるようにして、彰君の顔を自分の目の前に近づける。

「あなたにとつては、あの人達は間違いなく母親で、妹なのでしょう? なら、あなたが誰だろうが、何だろうが、そんなものは関係ない」

彰君は、歯を食いしばって、でもそこにはもう怒りはなくて、ただ 耐えている。

「じゃあ、僕は……どうすればいいの？」

「あなたのしたいようにすればいい。無理に笑うなんてことは、しないでいい」

からすさんは彼から手を離して、そしてすぐに自分のもとへ抱き寄せる。

「あなたが泣いても、お母さんを責めることにはならないのよ」

彼女の服を掴んで、彼女を見上げる彰君はそれでも、震える唇を引き締めてこらえる。

「やさしい子。あんなことを言われても、お母さんが好きなのね」
そんな彼を見つめて、頭に手を置く。でも彼は嫌がらない。まっすぐ見つめ返してくる。

「……うん。大好き」

もう声には混じっているけれど、それを認めたくないように、服を掴む手に力を込める。

「……つらかったわね」

頭に置いていた手を後ろに回して、抱きしめた。そのまましばらく時間が過ぎてから

彰君はようやく、我慢するのをやめた。

あれから僕らはもう一度？出口？に向かい、既に目前というところまで迫っていた。

僕らはあの後、終始無言だった。

僕は、もう口を利用してもらえないんじゃないかと思って、それを確かめるのが怖くて、黙っていた。

からすさんは、きつと必要がないから何も言わなかった。

彰君は、泣き疲れて眠ってしまった。

無理もない。今日生まれてから今まで、この子の心が休まることは片時もなかったのだから。

からすさんはそんな彰君をおぶって？出口？である橋へ歩いていく。こうしていると、なんだかこの人がこの子のお母さんみたいだ。本人に言ったら怒られそうだけど。

「あの……からす、さん」

《なに》

僕は彼女が返事をしてくれたことに少しだけほっとして、でもすぐにそんな場合じゃないことを思い出して、ずっと言おうと思っていたことを、言った。

「さつきは……あ、いやさつきでもないけど、その　ありがとう」

？出口？に着くまでには言おう。そんな、男のくせに情けないことを思っていて。そして？出口？を目前にしてようやく、それだけ口にした。

《礼を言われるようなことはしていないでしょう》

……この人はいつもこう言うんだな。僕を責めているわけでもなく、ただそう思ってる。

「そんなこと、ないでしょ。だって、からすさんがああしてくれなかったら彰君は今よりずっとつらかったんだし……それで、それは僕のせいなんだから、お礼言ったって……」

《この子はあなたの責だと思っせきていない。それでも気に病むというのは、よい世話よ》

「いや、でも……だって、僕が言い出さなきゃそもそも」

《関係ない。この子は断ることもできた。その上でこの子は選んだのだから》

「そうかもしれないけどさ……だとしても、気にしないなんて無理だよ」

《だとしても、あなたがいつまでもそうしていれば、それを見たこの子は自分を責める》

「……そうだね。それは、嫌だな」

この子は自分がつらい時でも人を心配してしまうから、僕はこの子にそんなことはさせたくないから、そう思えば僕は、もう大丈夫だ。

ふと、からすさんはああいうかたちで僕を励ましてくれたのだろうか、と思ってもう一度お礼を言おうとしたけれど、でもまた同じことを言われるだろうなと迷っている内に

「……うん……ここ、どこ？」

耳元で眠たそうな彰君の声が聞こえて、それに僕は、

「あ、ごめん。起こしちゃったかな」

いつも通りの僕がする反応ができたと思う。こんなことを思っている時点でいつも通りではないのかもしれないけれど、この子に伝わらなければ、関係のないことだ。

彰君が今まで垂れ下がっていた腕を絡ませて、ぎゅうと身を寄せてくる。

「寒いのか？」

からすさんの家を出た頃、この子が少し寒そうにしていたことを思い出して、そう聞くと、

「……ううん。あったかい」

からすさんの肩に顔を埋めるようにして、小さな、でもはっきした声で、そう答えた。

《目が覚めたのなら自分で歩きなさい》

からすさんが急にしゃがんで、彰君の足を支えていた手を離す。

「もおー！ いいじゃんちよつとくらい。起きたばっかりなんだからさー」

僕は抗議の声を上げたけど、彰君はからすさんに言われた通り背中から降りると、すぐに僕らの前に駆けて来て、僕らを見上げて

「大丈夫。もう歩けるから」

笑顔を見せてくれた。僕がそう思いたいだけなのかもしれないけれど、その笑顔はあの時のような、つらくてたまらないというようなものではなくて、本当の、この子の笑顔。

夜が明けようとしていた。

太陽が姿を現すにはまだ早いけれど、空は白み始めている。ずいぶんかかってしまった。

僕らは、遂に？ 出口？ の前に立った。

？ 出口？ の橋は鉄筋とコンクリートで建造されていて、全長およそ二、三十メートル程度、片側一車線の道路とその外側に歩行者用の通路が配置されている。

その橋の中心辺りの欄干らんかんに人が一人、背を預けて佇んでいた。考えうる限り、こんな時間にこんな場所でそうしている理由は、一つだろう。

僕らを待っていた。僕らの行く手を阻むために。

からすさんは彰君の手を取って、臆することなく道の真ん中を歩いていく。

欄干にもたれていた人物は向かってくる僕らを見て動き始める。

僕らの進路上へ。

真に橋の中心となる位置で僕ら是对峙する。だけど、今僕らの目の前にいるのは

？ 僕？ だった。

何も、言葉が出ない。無言で向かい合う。先に動いたのは、からすさん。彼女は

「連れてきました」

向かい合っている？僕？に差し出すように、彰君の背を押した。
そして？僕？は

「じゃあ、続きをしましょうか」

？あの時？と同じように、ジャージのポケットからそこに収まる
はずのない長大な剣を引き抜いて？あの時？と同じように、地面に
突き立てた。

でも？あの時？これを見て「なんで刺しちゃうのかなー」と言っ
ていた人は、ここにはいない。

「清寺さんは、どうしたんですか？」

そんなことはどうでもいい。そう思っている。それなのに、それ
でも聞いた。

僕の姿をした 加賀晴子に。

「子供に興味本位でバラバラにされた昆虫みたいになっててかわい
そうだったから、ちゃんと潰しておいてやったわよ」

それは僕らが立ち去ってすぐか、それとも どうでもいい。こ
れもどうでもいい。でも

「その姿は、なんですか？」

「耕四郎に派手にやられた時、ちょうど近くに転がってたのよ。な
んか手足が短くて動かしづれーんだけど、まあ贅沢は言ってらんね
ーわよね」

どうだっていいはずなのに、どうでもいいから、僕はこんなこと
ばかり

「からすさ 烏文字さんがここに来るって、知ってたんですか？

あの後会ってもいないのに」

《あの馬鹿を始末した後こうやって連絡したら、ここで待つてく
れ、って烏文字ちゃんに言われてね。まあ、こんなに待たされると
は思わなかったけど》

からすさんのような、直接聞こえてくる声。ご丁寧^{ていねい}に連絡を取っ
た時の通信手段を再現して説明してくれた。知ったことじゃないこ

とを。

「ここで、何をするつもりなんですか？」

「だから、続きだつったでしょ。あんたほんと人の話聞かねーわね」

知つてて聞いたんだよ。それを聞くのが怖いから。でも、もうそれ以外聞くことが無い。

「からずさん……からずさんは、知ってたの？ 知つてて、ここに来たの？」

《ええ》

「……なんで、ここに来たの？」

《この子を殺して私の望みを叶えるため》

「……嘘だ。そんなの、嘘だよね？」

《嘘をつく理由がない》

「じゃあ、なんでまっすぐここに来なかったの？ それが目的なら彰君の家族に会いに行くことなんてなかったじゃないか」

《最期に会うくらいは構わないでしょう》

「だったら！ その後は！ どうして彰君に怒ったりしたんだ！」

《ただ気に入らなかっただけ》

「……なんでそんなこと言つたの？ ねえ？ からずさん……お願いだから嘘つて言」

「もういい」

彰君が僕を見上げている。？あの時？と同じ死を望む姿。なんで、またそんな顔をするんだ。

「遙さん、もういいよ。僕も、そうして欲しいと思つてるから」

「そんなはずない！ だって君は……笑ってくれたじゃないか。あれは、嘘だったの？」

「……嘘じゃない。嘘じゃないけど、もういいんだ。僕には、十分すぎたくらいだから」

信じない。僕は、そんなこと信じたくないから、信じない。信じたくないのに

「嫌なんでしょ？ 二人ともほんとは嫌なんだよね？　なんで、そう言ってくれないんだよ」

僕だけだったんだ。僕だけが何も知らなくて、僕だけがそうだと思っていた。

「友達だと思っていたのに！　僕には　僕なんかには……　本当のことは言ってくれないのか！」

「私は、そう思っている」

駄々をこねる子供のように叫ぶだけの僕に、からすさんは自分の声で、

「あなたとこの子は、私に初めてできた友達だつて」

今の僕には信じることができないことを、それでも信じたいことを、言った。

「……じゃあ、どうして？」

そう思ってくれているのなら、どうしてもあなたはその友達を殺すの？

「こうすることが正しいと信じているから」

彰君が無言で頷く。嘘が下手なこの子が、まっすぐに僕を見て。

……そうか。僕以外の全部は、これが、こうすることが正しいと認めているのか。それも、今に始まったことじゃない。ずっとそうだった。僕が知らなかっただけ。

「分かった。もう止めない。でも」

そうか。だったら、僕の本当を隠す必要もない。

「でもさあ、順番でいけば、次は僕の番でしょ？」

僕を見上げる彰君の横をすり抜けて、加賀さんの前へ。コンクリートに刺さった剣はなかなか抜けなかったけど、程なくして僕の手に収まった。からすさんが手を貸してくれたのだろう。要は僕の意見に異論はないということか。言いくるめる手間が省けたな。

「あんだだけ勝手なことわめておいて、出した結論がそれ？　いい根性してるわねえ」

「あなたには関係ない」

人の無様な姿を見てにやついている人間がまともな振りをするな
まあ、どうだっていい。

加賀さんの前から取って返して、彰君の元へ戻る。彼はあの時と同じように、もう何も見てはいなかった。

剣を握る僕の手がわずかに震えている。本当に無様だ。この期に及んでまだ怖いのか。

なら、思い出してみろ。

どうしてかあさんから逃げた？

どうしてこのまま死にたくないと思った？

どうして彰君の家族に会いに行こうと思った？

戻った時に不都合になることを知られなくなかったからだ。

彰君を殺せば僕はまたかあさんと暮らせるのに、そう思ったからだ。

加賀さん以外の誰かが迎えに来ることを期待して？外？へ出るまでの時間稼ぎをしたかったからだ。

……そうだ。僕は、ずっとこの機会を待っていたんだ。

？あの時？のからすさんの動作をなぞるように、僕は剣を頭上に掲げて、構えた。

この子を許す人は誰もいない。そう言ったのは、からすさん。

本当にその通りだった。この子の家族ですら、この子を許しはしなかった。

誰かが必ずこの子を殺す。からすさんが、加賀さんが、それ以外の誰かが。

なら、僕がこの子を殺してはいけない理由はなんだ？

だから、僕がこの子を殺す。

剣を振り上げたまま対峙していると、突然に、ブラウスの上に羽織っていたカーディガンが消えて失せた。この天野彰という子供の^{まが}紛^{もの}い物が、その全能の力を使ったんだろう。

思わず、剣を握る手に力が入り、歯をきつく食いしばる。

あんな殊勝なことを言っているにも、いざとなればやはりこれか…

：まあそれが当然だろうな。そう簡単に諦めることなんて、できるわけがないんだ。

だけど、せっかくの反撃も不発ではその甲斐はない。この子がまた大切な何かを失くしただけ。持っている力が大きくても所詮は子供、清寺さんが言っていたように、扱いきれないんだろう。

もう、この子にできることはなにも無い。加賀さんはこの力を立て続けに使うことはできないと言っていた。それはつまり、今のこの子は、本当に ただの子供だ。

いや、そうじゃなかったな。この子は初めから、どこにでもいる普通の子供なんだから。

己を殺そうとする者を殺しそこねた子供は、それでも変わらない死を望む顔をしている。

この子を殺す僕は、どんな顔をしているのだろうか？

僕は、剣を、振り下ろす。

金属が硬いものにぶつかった時の甲高い音が辺りに響いた後、僕の手から剣が落ちた。

僕はその場に崩れ落ちて、彼を見上げる。

僕を、自分を殺そうとした人間を案じている、彰君を。

「……どうして？ どうして君は、そうなんだ……どうして、あんなことをするんだよ」

彰君は何も言わない。僕をただ心配そうに、申し訳なさそうに、見つめるだけ。

でも、この子の答えを聞かなくても、理由なんて決まってる。僕が殺しやすいように、だ。僕が？力？を恐れて躊躇しないように、あえてあんなことをした。

「わざと、だよな？ 本当は僕を消せたはずなのに、わざと服だけを消して……僕は 僕は！」

彼の肩を掴んで、懇願するように、問い詰める。そんな資格もないくせに。

「僕は君に殺されようとしたんだ。からずさんが君を殺すのが怖く

て、君が殺されるのが怖くて……だから逃げるために、ただそこから逃げ出すただけに君に　そんなことをすれば君が大事なものを失くすって分かってて、そうなって欲しくないなんて言っておきながら、そうなれば君が傷つくだけだって分かっていたのに」

だから僕は君を殺すと、ただ僕のためだけに君を殺すと、そう言った。それなのに

「君は賢い子だから、分かっていたんだろう？　なら、憎んでよ。自分のことしか考えずに君を見捨てた僕を、お願いだから……嫌いになってよ」

「……そんなこと、できない。したくないよ」

彰君が僕をまっすぐに見つめる。一切揺れることの無い目をして。「僕、言っただでしょ。遙さんのことも新仁さんのことも嫌いになったりしないって。だから、ならない。僕は、最後まで二人を好きなままでいたい」

それは以前にもこの子が見せた目。嘘偽りの無い本心だと明らかに分かる、そんな目だ。

僕は立ち上がって一度両の拳を固めると、振り返り、

「お願いします」

加賀さんを、この子の死を望む人を視界に入れてから、

「彰君を、助けてください」

そして、再び跪き、^{ひざまず}両手をついて、顔を伏せて、懇願した。

背後で何か言いかけようとした彰君を無視して、僕は続ける。

「僕は戻れなくても　どうなっても構いません……この子を、殺さないでください」

加賀さんは大きくため息をついてから「まあ、言いてーことはいろいろあんだけど」そう、うんざりしたように言った後、

「とりあえず、頼む順番が違うんじゃないの？　ねえ？　鳥文字ちゃん？」

すぐに楽しそうな声色で、からすさんに語りかける。

「……からすさん」

《なに》

まるで変わらない気配。この人には何の興味もないことなのかもしれない。でも

「諦めて、ください」

《何を？》

すぐには言葉が出ない。食いしばった歯をうまく解^{ほど}けない。でも、僕はそれを口にする。

「全部」

自分が何を言っているのか分かっている。全部承知の上で僕は、頼んでいる。

「からすさんの全部。今まで築いてきたもの、この先にあるはずのもの、全部　諦めて」

《この子を助けるための犠牲になれ、と言いたいのか？》
「違う」

そんなこと頼んでない。僕はそんなことを頼めない。僕が頼んでいるのはただ

「僕のわがままの、犠牲になって」

彰君のためじゃない。これは僕のわがままだ。僕が、嫌なんだ。

《……あの子はそんなことを望んでいないというのに、それでもあなたは、それを望むのか？》

「それでも僕は、そうしたい」

彰君が望んでいなくても。何もかも失っても……からすさんを犠牲にしても。

《分かった》

思わず伏せていた顔を上げた。ふざけるな、そう言われると思っていた。それなのに、

《私は私の意志で、その望みのために、私の望みを諦める》

彼女は僕のわがままを　わがままだというのにそれを、受け入れてくれた。

「……からすさん、本当にいいの？」

《ええ》

迷いのない答え。いつも通りの、あの返事。それはきつと、この人が僕を今でも

「何を理由にそんな間の抜けた顔させてんのか知らねーけど、私は順番が違うつつただけで、殺さねーでやるなんて言った覚えはねーわよ」

加賀さんが腕を組んで僕を見下ろしている。さっきとは一転して、実に不機嫌そうに。

「どうしても、この子を殺すんですか？　殺さないで収まる方法は、本当にないんですか？」

「あつたらそうしてるっつーのよ。あんた、私らが好んでその子を殺したいんだとも思ってたんの？」

殺したくはない。だけど、そうせざるを得ない。そうだというのなら

僕は一度は落とした剣を拾い上げて、加賀さんから視線を外さないまま立ち上がる。

「方法が無いのなら、僕があなたを殺して、叶えるだけだ」

僕が望むことはただ一つきりだ。それ以外のものは、必要ならすべて犠牲にする。

「はあ、ほんつといい根性してるわよあんた。自分さえよけりや他はなんだっていいのね」

「そうだ。僕は僕以外のことなんて知ったことじゃないんだ」

だから僕は、僕のわがままを押し通す。

不意に僕の指を掴む小さな手。見れば、彰君が泣きそうな顔をして僕を見上げている。

「駄目……だよ。そんなことしないで。僕は」

「ごめ　違う。彰君、僕はもう引き返すつもりはないんだ。終わったらなんでも聞くし、なんでもするから、それまではここで待ってて」

彼の手を解いて、一步前へ出る。きつとあの子はうつむいて、自

分を責めているんだろう。

だとしても、このまま進む。

「からずさん、さっきは僕がって言ったけど、僕一人じゃ無理だ。力を貸して」

「……それ、言っただけで恥ずかしくねーの？ 本気でどうしようもねー奴ね」

知ったことか。どうだっていいことだ。そんなことにいちいち構っていられるか。

《あの時のようにしないためには、私は体の維持以外のことをする余裕がない。恐らく、それでようやくまともに動けるか、あるいはそれでも無理か。それは承知していて》

あの時 清寺さんと戦った時、か。あの時は突然体が動かなくなつて、なす術もなく敗北した。今はそれを防ぐ 防ごうとすること、からずさんは手一杯になる。それは

「僕にできる 僕がすることがあるんだね」

《私がこの体を動けるようにするから、あなたが動かして》

「……分かった」

この人のようにうまくできる。そんな風には思えないけれど、でもこれは僕が始めたことだ。本来、すべて僕がやるべきこと。だから、この人のようにはできなくても

剣を正面に構える。だけど切っ先の所在は定まらず、まっすぐ立っているだけでやっつと。

「どうしたの？ 私を殺すんじゃないの？」

それを見た加賀さんがうつすらと笑みを浮かべ、ぶら下げた腕、その両手の平を僕に向け、あえて隙を見せて挑発してくる。

清寺さんの時と同じ、圧倒的優位に立つ者が見せる姿。そしてそれは、恐らくその通り。

剣の切っ先が、加賀さんの眉間をとらえた位置で止まった。加賀さんの顔から、笑みが消える。

僕がやらないと、そう思った矢先にまたこの人に助けられている。

でもそれを気に病んでいる暇はない。既に体の主導権は僕に戻っている。僕はからずさんが？教えて？くれた形を崩さず構える。

《首を狙って。そこがもつとも深刻な損害を与えられる》

「うん。じゃあいくよ、からずさん！」

思い出せ。これまでこの人がどうやってこの体を動かしていたかを。僕は、それを知っているはずだ。

数歩の距離の先にいる加賀さんへ、駆け出す。

勢いを殺しすぎないように踏み込みながら、一度腰まで落とした剣を首めがけて払う。彼女はわずかに下がってそれを避け、剣は空を切った。離れた剣を頭上に構え直して、首の付け根へ振り下ろす。彼女は体を横に向けながらずらし、剣の軌道から外れた。地面に打ちつけた剣の切っ先を、逃れた彼女を追いかけるように彼女の体の中心へ向ける。突き入れるために力を込めた頃には、彼女はもうその先にはいなかった。通り過ぎる刃の隣に、平然と立っている。

すべて紙一重。ようやくかわしているのではなく、見切られているがゆえに。

「つくそおおおお！」

叫んで、明確な狙いもなく、体を回転させて全力で薙いだ一撃を、彼女はもう避けもせず手の甲で受け止めた。ジャージのそでから出ている剥き出しの手。傷一つ付いていない。

《離れて》

からずさんの声で反射的に後ろへ大きく跳んだ。目の前を、剣を受けなかった方の手、加賀さんが僕の懐へ潜り込みながら斜めに振り上げてきたその手が、通り過ぎていく。

「この短期間でよくもそこまで鍛えたもんねえ」

加賀さんはそれ以上追ってくることはせずに、多少驚いているのか片眉を上げて、だけど、すぐにその表情は馬鹿にするように口の端を吊り上げたものに変わり、

「ただ、使う側がまるで話にならねーけど」

言い終わるかという時に、どつ、という鈍い音を立てて、僕の左

腕が、地面に転がった。

「つぎいあああああああああ！」

斬られた部位、腕の根元辺りを残った手で押さえてうずくまる。出血がほとんどないことを考えれば致命傷にはなり得ない損傷。でもその苦痛はこれ以上ないほど僕を苛む。かるうじて敵を視界から外すことだけは免れたけれど、それだけだ。

《痛みを消している余裕はないの。我慢して》

「……うん。動けばなんだっていいよ」

派手に悲鳴を上げた後では説得力に欠けるとは思ったけれど、嘘じゃない。大丈夫と言えば嘘になるけど、でも今この瞬間だって、からすさんは僕と同じ痛みの中で、僕の手の届かない戦いをしていく。そんなこの人に、これ以上甘えたくない。

落とした剣を拾おうと足元へ手を伸ばす。だけど、いつの間に近づいて来ていたのか、彰君が僕より先に剣を拾い、刃を下に向けた状態で抱えるように持って僕の前に立つ。

「もういいから、やめて」

「……嫌だ」

まるで聞き入れる意思のない僕に苛立ちを覚えたのか、彼は一度うつむき奥歯を噛み締めてから、僕を睨んだ。

「僕はずっともついいって言ってるのに……それなのに、なんでこんなことするの？ 僕のためなんだよね？ だったらやめてよ。迷惑だよ。僕は、こんなこととして欲しくないんだ」

「君がどう思っかなんて関係ない。君だって聞いたはずだ。これは僕のがままだって」

「……なら、もう頼まない」

彰君は僕をじっと見つめたまま、加賀さんの方へ後ろ向きに下がっていく。剣を持ち替え、素手で刃を握り、その切っ先を己の喉元に突きつけて。

「僕が死ねばいいんでしょう？ 僕が死ねば、全部終わるんでしょう？」

それは僕らにではなく、背後にいる加賀さんに投げかけた　確認だった。

「まあねえ。あん時は自分で死なれちゃ困るつつたけど、正直私のはあんたの力になんの興味もねーのよね。周りがうるせーから適当に調べる振りしたけど……そうね、もうこの際そっちの方が手っ取り早くていいかもね」

問われた加賀さんは、食事の予定を変える算段でもするかのように死ねと言った。

「……彰君それは、駄目だよ。それだけは」

恐怖　なのか、座り込んだまま立ち上がることもできず、それでも届くはずのない腕を伸ばし、
「知らないよ。遙さんだって僕が頼んでもやめてくれなかったじゃないか」

結局、言葉すらも、届かない。

「僕が死ねば、遙さんと新仁さんは助けてもらう。それができないなら、全部消してやる」

「何をもって助けることになんのかは知らねーけど、いいわよ。なんだろうが破格の対価であることには変わりねーだろうし」

僕を無視して二人の話は進んでいってしまう。待つて……嫌だ。それだけは、嫌なんだよ。

立ち上がろうとして、立ち上がれなくて、倒れこむようにしてなんとか彼の前にたどり着くと、届かなかった腕を、届かせた。剣の先端、彼の首に迫る刃を掴む。

「彰君……怪我、してるよ？　危ないから、手を離して……お願いだから」

「……いいよ」

剣を持つ両手から流れる血が刃を伝って滴っている。それが苦痛だったのか、彼は素直に手を離してくれた。彼が腕を無造作に下げたから、彼の手が届かないように剣を離す。

「僕はそんなもの使わなくても、簡単に死ねるんだから」

一切の澱み無く、心の底から自分自身を拒絶して、そして彼は笑った。

偽りではない笑顔。そこにあるのは無理矢理じゃなく、本当の、愉悦。

僕は、ただ僕がそれに堪えられなかったから、それをやめさせるために彼を、彼の頬を打った。

倒れるほどではなかったけれど、彼は一瞬放心して、すぐに齒を食いしばってうつぶいて、小さく嗚咽を漏らす。とめどなく溢れる涙が、赤い頬を濡らした。

「っ……ごめん。彰君……僕は……ごめん……」

僕が考えれば考えるほど、僕が動けば動くほど、この子を傷つけるだけ。

彰君が顔を上げる。その目に宿っているのは憤怒でも、悲哀でも、愉悦でもなく、憂慮。

「……遥さんのお母さん、泣いてたじゃないか。あのままでいいの？ 遥さんは、お母さんが泣いてるのに、放って置くの？」

この子は 彰君は、やっぱりどこまでも、彰君で、だから僕は

「よくないよ。全然よくない。できることなら、今すぐにでも帰りたい」

「だったら」

「でもね。僕は、もう死んでるんだ。死んだ理由なんか関係ない。死んだら、そこで終わらなきゃいけないんだよ。でも僕は卑怯だからさ、それでも帰りたいって、今もそう思ってる」

「だったら、なんで！ 遥さんは戻れるじゃないか！」

「君は生きているから。確かに一度は死んだのかもしれないけど、今の君はその時の君とは同じだけど、違うんだ。だから君は、自分は生きていちゃいけないなんて、思わなくていいんだよ。それに？ 力？ のことだって、君が悪いんじゃない。君が自分を責める理由なんて無いんだ」

「……どうでもいいよ。そんなこと、どうだっていいんだ！ 僕は僕がもういいって言ったのは、そんなことじゃない。僕は、こうして生きていることが嫌なだけなんだ。沢山の人が僕が死ぬことを望んでて、僕が生きてればその人達は不安になる。僕がいなくなりさえすれば、大好きな人達がもう一度家族と一緒に暮らせるのに、そんなことを思いながら生きるのが、嫌なんだよ！」

双眸に涙をたたえたまま、彼は許しを請うように、僕を見る。

「……僕にこんなことを言う資格は無いのは、分かってる。でも、無いけど、僕は」

彼を抱き寄せて、ひとつになっちゃった腕で彼の頭を掻きいだ抱く。

「君が好きだよ」

僕に体を預ける彼が震える。離れようとした彼を、さらに強く抱きしめる。

「君とは今日会ったばかりで、僕は君を……犠牲にして、見捨てて、逃げ出した。だから、信じてもらえないだろうけど、でも、好きなんだ。君はいつでも優しく、自分より人のことばかり気にかけて、つらくても平気な振りをして、自分を殺す相手にさえ、君はっ」
彼に回した腕から力を抜くことができない。苦しんでいるかもしれない、そう思っても。

「僕は　僕は、そんな君が大好きだ。だから、僕は君に生きていて欲しいんだよ。わがままだけど、君がそれを望まなくても……生きて、欲しい。だから　だからさ、彰君……」

我慢が崩れそうになるけれど、それはできないから、だけど僕はやっぱり卑怯者で、

「もういいなんて、言わないでよぉ」

彼に頬を寄せて、代わりをもらう。

「僕らだけじゃ足りないかな。これだけじゃ君は、生きたいって、思ってくれないかなあ」

彼は僕らにぎゅうとしがみついて、だけど抱きしめる僕らの腕に

逆らい首を振って、

「……そんなことない。そんなこと、ないよ」

それだけを、僕らが何よりも求めた答えを、くれた。

乾いた拍手が鳴り響く。ただ一人が緩慢に打ち鳴らす称賛。その主へ、視線を向けた。

「なんていい話なのかしら。本当、素晴らしいハッピーエンド。でも」

？僕？の顔が満面の笑みに包まれていた。手を打つのを止め、その両腕を広げる。

「残念だけど、まだ終わりじゃないのよ？　だって、私がまだ、この最高にくそくだらない茶番の見物料を払っていないんだもの」

僕はこんなに不快な笑い方ができるのか。死ぬまで　死んでも知らずにいたかったな。

「今思うと、腕を斬り落としたのは失敗だったわね」

僕の腕を奪った右手を目の前にかざして、その瞬間を思い返すように手刀にしてから、握りしめた。

「もっと細かく刻んでいくべきだったわ。でも大丈夫かしら、まだたくさん残っているものね。本当、楽しみだわ。どれくらいになったら泣いて命乞いをしながら、僕にあの子を殺させてください、って頼むようになるのかしらね？　そこまでされたら私だって」

「黙れ」

からすさんが、立ち上がった。固められた一つきりの拳が震えている。

「なあに？　馬鹿なお友達を馬鹿にされて怒っているの？　でも、安心してちょうだい。私はちゃんど、あなたのことも馬鹿にしているから。会った時からずっとそう思っただけだけれど、あなた、本当にどうしようもないお馬鹿さんなのね」

「確かに、私は救い様の無い愚か者だ。だけど」

拳に込められた力が一瞬、わずかにゆるめられ、

「私の友達は　怖がりで、間が抜けていて、すぐに調子に乗って、

でも変に強情で、今笑ったと思えばもう落ち込んでいて、子供より子供のような振る舞いをして、何かあるたびに泣きそうになるような、そんな人なのにな」

でもまたすぐに握りしめられて、そしてそのままさらに負荷は上がり、

「今日まで信じてきた正義も、裏切られてさえ友達だと信じたい人も、大好きな人の意思も、自分のために泣いている母親も、そのすべてを犠牲にしても　全部、自分が一番傷ついているくせに……それでも！　それでも守りたいと叫んだ私の友達をお」

爪が皮膚に喰い込んでいき、血がにじむ感触がしてようやく僕は、「お前はもう泣いて命乞いをしてでも許さない」

からすさんが体の制御を忘れるほど、すべてを差し置いて怒っていることに気がついた。ありとあらゆることを無視して、怒っている。

「そう。なら見せて？　私をどう許さないのか」

笑みを崩さない加賀さんへ、からすさんが突進する。その笑みを砕くように加賀さんの顔面へ掌を伸ばして　届かずに、停まったからすさんの膝が折れ、体が沈む。それを見てから、加賀さんは腕をゆつくりと掲げ、振り下ろす。

紙一重、とはいかなかった。既に腕を失った左の肩に裂傷が走る。でも体が真つ二つになるよりは余程いい。

攻撃の瞬間、からすさんは体の主導権を取り戻し、僕に預けた。僕はほとんど寝転がるくらい上体を反らして手刀をやり過ぐすと、即座に後ろへ飛び退いて距離を取った。

「あら、もうおしまい？　ずいぶん友達思いなのね」

「彰君、剣、取ってくれないかな」

敵の言葉は無視して、着地した後、手探りで剣を探したけれど見つからないので、彰君に頼んだ。彼女は自分から攻める気は無さそうだけど、視界から外すわけにもいかない。

《私は………ごめんなさい………》

「なんで謝るんだろうね？」

からずさんではなく、剣を引きずるように持つてすぐに隣に来てくれた彰君に聞く。

「なんでだろうね」

そう言つて彼は笑つて、でもすぐに心配そうな顔に戻つて、剣を差し出してくる。

「……待つてるから。二人とも、無事に帰ってきて」

僕は一度彼の頭に手を置いて笑つてから、その剣を受け取つて、立ち上がる。

《ええ》

「うん。じゃあ、行ってくる」

それでも心配そうな彰君に背を向けて、僕はもう一度加賀さんと対峙する。

「もういいの？ ちゃんとお別れできるまで待つてあげるのに。今生の別れなんだもの」

全速で迫つて、胴を狙い左に下げた剣を水平に払う。彼女は後ろに下がつてそれをかわして、剣が通り過ぎると逆に間合いを詰め、僕がしたように僕の胴へ腕を振るう。でも、僕は彼女のように避けることはできない。体をひねりながら下がつて、胴が両断されることだけは免れたけれど、代わりにわき腹を深々と裂かれた。僕はひねった体をその勢いのまま回転させ、今度は首を狙つて打ち込んだ。が、彼女はそれを造作も無くかわし、なのに、背後へ大きく引いた。誘っている……いや、僕が早々に諦めないようにあえて、勝ちの目を示している、のか。

今、加賀さんの後ろにあるのは？ 出口？ の、その先？ 外？ だ。

そこへ出てしまえば、誰も彼も常人同様となる。加賀さんも例外ではないだろう。なら、彼女だけを追いやる事ができれば、境界を挟んで対峙することができれば、身体能力の差、反応速度の差、それ以外のすべて、なにもかもが逆転する。そうなれば、勝てる。間違いなく。

つまり、絶対的な自信があるということだ。そうはならない、という。

好都合だ。それはまぎれもない隙なのだから。遠慮なく突かせてもらう。

僕は加賀さんに向かっていく、その度に僕の攻撃はかわされ、その度に僕の体は切り裂かれ、だけどその度に彼女は？外？へ近づいていく。

「無様ねえ。あんなに懸命に振り回したのに、切れたのはあなたの体と息だけだなんて」

？外？まで二、三メートルという所で、肩で息をして睨む満身創痍の僕を見て、笑っている。

消耗が激しい。それだけからさんの負荷が高いということか……なら、そろそろいくか。

「……そうでもないでしょう。あなたを追い詰めたんですから」
そうやって好きなだけ笑っていればいい。思い通りに運んでいるのは、こっちも同じだ。

踏み出し、同時に体をひねって打ち払いにいく　もう何度かわされたか分からない攻撃。だけど、今度はそれ以前に、間合いが遠すぎる。かわすまでもなく、届きもしない。僕が動き出した時点で、それが分かるほどに。

加賀さんはそれはそれは楽しそうに僕の失策を眺めて、そして、体の重心をこちらへ傾けて

この人は、このためにここまで下がってきたはずだ。勝てる、身の程知らずにもそう思った雑魚を、思う存分せせら笑うために。その雑魚が今、これ以上ない失敗をした。

そうだ。それなら当然、これを黙って見てるわけないよなあ！

剣から手を離す。放たれた剣はこちらへ迫ってきていた彼女の喉元へ。彼女は表情一つ変えずその刃を掴み、止めた。その頃には、僕はもう動いている。地に触れるほど体を沈めて、彼女の懐へ潜り込む。それを彼女は蹴りで迎撃しようとして足を振り上げた。顔を

狙って放たれたその蹴りを、さらに踏み込んで胸で受け、それを利用して体を浮かせる。

僕の手は、彼女の足首を掴んでいる。蹴った方ではなく、彼女を支えていた足。今、彼女を支えているものは何もない。支えを無くしたものは、倒れる。どんな強者だろうと例外はない。彼女が背中から地面に落ちる。それが確実になってから手を離し、掴む。

彼女に持つてもらっていた剣を。その切っ先は、いまだ彼女の首を狙っている。掴んだ剣に全体重を乗せた。その首を貫くために。人間が転倒した時の反射、彰君の血で濡れた刃、剣は彼女の手をすり抜けていく。倒れた彼女は、動かない。

「……あなた、今ほつとしたでしょう？」

動かずに、じつと僕を見つめている。そこには、これを楽しんでいる気配はない。

剣は、彼女の首、その寸前で止まっている。

「あなたは、結局怖いだけなのね」

僕は必死で剣を押し込もうとするけれど、まるで動いてくれない。「あの子のこと重大事项とか、そんなことではなくて、ただあの子を殺すのが怖かった」

たった一人が無造作に片手で掴んでいる剣が、コンクリートに刺さっていた時よりも。

「怖いから守る振りをして逃げた。そして、その逃げた先で私を殺すことから逃げた」

反撃するわけでもなく、ただ見つめてくる彼女の目が、いつか見たものと重なった。

「本当、無様な子」

つまらなそうな目。向けている相手に一切の興味を失った目。

「気が変わったわ」

彼女は剣を掴む手を軽くひねって、そうやって小枝でも折るように簡単に、剣が折られた。それを支えとしていた僕はなすすべもなく、彼女へ向かって倒れ込む。

「死ね」

突き出した彼女の右腕が、倒れる僕の体を貫いた。

「……あぐ………うがふっ」

心臓、それに片側の肺が壊された。盛大に血を吐き出して、僕を見上げる？僕？の顔を紅く染める。急速に体から力が抜けていき、折られた剣が手からすべり落ちていった。

「お馬鹿さんだけど、新仁ちゃんを失うのはちょっと惜しい気がするのよねえ……今だったら怒らないでにおいてあげるから、こっちに來ない？」

血で染まった顔を再び歪める加賀さんに、からすさんは口に残っていた血を吐きかけて答えた。

「……残念だわ。やっぱりお馬鹿さんなのね」

加賀さんは立ち上がった後、ようやく僕から腕を引き抜き、もう満足に立つこともできなくなつて倒れかける僕の首を掴んで無理矢理に立たせ、後ろを向いた。

「わた、しは……自分の意志で、と……言つた、でしょう……」

息も絶え絶えにからすさんは言う。だけど、そんなものはまるで意に介さずに、加賀さんは僕を掴む腕をだらりとぶら下げて、そちらを見据える。

「はる、かあ！」

からすさんが僕の名を叫んで、それが消えもしない内に、加賀さんは僕を放り投げた。

？外？へ。

何の抵抗もできず、僕は？外？の地べたに這いつくばる。

境界は目の前。だけど、指一本動かない。今まではからすさんが止めていたであろう血がとめどなく流れ出ていく。それは僕にとつてはついこの間の感覚。死が忍び寄ってくる感覚。

「うあああああああああああああ！」

叫び声。彰君、か。感覚が鈍つてきていてよく分からない。何を、しているの？

「そんなにあのお馬鹿さん達が大事なの？ 変な子ねえ。ふうん、それじゃあ」

かすむ視界の中でかろうじて確認できたのは、踏みつけられている彰君だった。

僕らを助けようとしたのか。逃げて欲しかったけど、そうだね。

君は、そういう子だったよね。

「さっきの取引の続きをしましょうか」

キン、という金属がこすれる音がしてから、続いて、抵抗していた彰君が押し黙る気配。

「死になさい」

……お前、何を言ってるんだ？

「あなたが死ねばあの子は助けてあげる。早くしないと、間に合わないわよ？」

折れた剣の先を手にした彰君が、見える。喉元に刃を突きつけた姿。

「だ、め……………だ……………」

かすれた声。きつと届いていない。でもさっきまでのようには、体が動いてくれない。

「……………嫌だ」

彰君は手にした刃で自分を押さえつけている足を突き刺そうとして、突き立てられた加賀さんはそれに何の反応も見せず、つまらなそうに、刺された足で刃を蹴り飛ばした。再び、地面に折れた剣が転がる。

「まあ、そうよねえ。あんな子達のために死ぬなんて、馬鹿馬鹿しいわよねえ」

加賀さんが笑う。それでいい。なんだっていいんだ。あの子が生きてさえくれれば。

「……………好きだって、生きて欲しいって、言ってくれたんだ……………どんな人にも、ここにお前の居場所は無いって、邪魔だから消えろって、言われた僕に……………言ってくれたんだ！」

「で？」

踏みつける足に力を加えて彰君を黙らせる。もう笑っていない。歯を軋ませている。

「あなた達って、一人残らず口先ばかりなのね。本当、気分が悪い」押し殺した泣き声が聞こえる。彰君が、泣いている。泣いているのに、なんで僕は

「なら、なぜ私を殺さないの？ もうそれができる程度の時間は経っているでしょう？」

「……あの二人を、忘れたくない」

「？……ああ？ 創造主の権限？ の対価ね。だけど、そんなもの膨大な中の一握り 消えるものが自分で選べないとは言え、考慮にも値しない可能性でしょうに。大事なものを失うことよりも、そんなものが恐ろしいの？」

「怖い、よ。消えないかもしれないっていうのは、消えるかもしれないってことなんだから。僕は遙さんを、新仁さんを この人は誰なんだろう、なんて思いたくない。あの二人が僕に言ってくれたこと、してくれたことを僕は、絶対失くしたくないんだ！」

「だから、仲良く心中するの？」

「だから……だから僕は！ 僕だけの、天野彰としての力だけでお前を、倒してやる！」

「……さっき言ったこと、あなたの分は取り消すわ。いいわねえ。それは本当、いい覚悟だね。あそこで寝てるお馬鹿さんにも見習って欲しいくらいだね」

ああ、そうだな。まったくその通りだ。僕には、まるで足りていなかった。

どうかしている。そんな程度の覚悟で犠牲になってくれなんて、よく言えたものだ。

それでも、からすさんは決めていたんだ。もう、あの時に。

僕だけがそれを分かっていたいなかった。

「本当、殺すには惜しい子」

彰くん以外のすべてを犠牲にしても。そう決めた、つもりになっていた。それは、すべてなんかじゃなかったのに。僕のすべてには、からずさんが入っていなかったのに。

からずさんが僕のせいで人を殺すということを、僕は考えていなかった。

だけどそれは、そんなことは　あの人に謝らなくちゃいけないな。いや、そうじゃないか。こういう時は、ありがとう、だな。僕はあの人にそれを言うべき時、いつも言いそびれている。

「だからこそ、今ここで殺す」

加賀晴子が彰君を掴んで目の前にぶら下げる。彼はもう泣いていなかった。戦っている。

さつき、体が動いてくれない、なんてことを思っていたな。

馬鹿か。動かせばいいだけだろうが。

手足の感覚が無い。どこが何かも分からない。だけど、僕の体だから、さつさと動け！

伸ばした右手の、その指先が、境界を、越える。

「おおおおあああああああああーーーーー」

！！

いびつな絶叫を上げて、僕は走り出した。

加賀晴子がこちらに振り向こうとして気を逸らした隙に、彰君が彼女から逃れる。彼はすぐに落ちている折れた剣、僕らが持っていた方の剣を拾って、こちらに放り投げる。

間合いを詰めてきた加賀晴子が薙いだ腕を体を回転させながら屈んでかわし、放物線を描いて飛んできた剣を受け止める。そして、立ち上がりざま払った剣が敵の首へ、届いた。

「あれ、私があげたのよ？」

首が繋がったままの加賀晴子が、心底呆れたように言った。

僕らが振り抜いた手に収まっていたはずの折れた剣は、跡形もなくなっている。

伸びきった僕らの右腕を、加賀晴子が振り上げた左腕が、宙に斬

り飛ばした。

「そんなものでよく殺せると思えたわね」

心臓を抉った時のようにつまらなそうな目をして、空いている右腕で僕らの腹部を貫く。

「思ってたええよ」

まあ、ついさっき彰君が気付かせてくれたことだけだな。

それにしても、本当に素晴らしい緩手かんしゅの連続だ。この人のことだから、ああすれば早々に首を刎はねにくると思っていたのに。買い被っていたな。あんな、もういらぬものをわざわざ斬って、こんな僕らに都合のいい状況をわざわざ作ってくれて。

貫かれたままさらに接近する。互いに触れ合うほどの距離へ。彼女が気付く。もう遅い。

こんなことを思うのは生まれて初めてかもしれないな。

ああ本当に、僕は、背が低くて良かったよ。

僕らは体を前にかたむけて、口を開いた。並んだ十四対の刃が？僕？の首に触れる。

血の味。筋張った肉を噛み締めたような不快な感覚。不味い。こんな鮮明にしないでくれないかな。

首を食いちぎるつもりだったのだけど、加賀さんは僕らを貫いていた腕を使って僕らの重心をわずかにずらし、首が切断されることは避けた。それでも深手ではあったのか、即座に腕を引き抜くと、僕らから大きく距離を取った。

「無事って見た目じゃないけど、ただいま」

彰君の前に立つ。頭をなでたかったけど腕が無い。代わりにしゃがんで額を触れ合わせる。

「……おかえりなさい」

声に涙をにじませて、彰君が抱きついてくる。ほんとこの子は、どこまでも、だな。

ドンッ、という低くて、でもやたら大きな音が辺りに響いた。見ると、すでに傷が癒えた加賀さんがコンクリートの地面を踏みつけ

て陥没させている。

「なあに、それ？　千載一遇の好機を逃しておいて、よくいちやついていられるわね」

いい大人が構ってもらえないからってイライラしないで欲しい。しょうがない人だな。

「千載一遇って……確か千年に一度、でしたっけ？　さっきのが、ですか？」

「それ以外に何があるの？　まあ、実際の可能性で言えばもっと低いでしょうけど」

この人……人の話なんにも聞いてないんだな。人のことどうこう言えないじゃないか。

「なんの意味があるんですか？　その可能性、っていうのは」
さっき彰君が言っていたでしょう、あなたが始めた話の答えとして。

「千に一つなら、万に一つなら、臆に一つなら　諦める理由になるんですか？　その逆なら、信じる理由になるんですか？」

そうなるかもしれないっていうことは、そうならないかもしれないっていうことだ。

「同じことでしょう。だったら　ただ、そうすればいい」
考慮にも値しない。あなたが言ったことだというのに。

「僕らはもう決めたんだ。だから、あなたはもう終わりだ」

勝利を確信、じゃない。既に決定されたことだ。ただ、まだ起こっていないというだけ。

「仮に千年の間これを繰り返せば千年の間ずっと、あなたが死ぬだけです。？　可能性？　が千載一遇だろうが」

加賀晴子は、笑っている。

姿こそ？　僕？　だけど、今までこの人が見せた笑顔が全部偽物に思える、楽しそうな笑み。

「……ようやくだ。ようやく面白くなってきた」

言ってから両手を地につき、獣が獲物に襲いかかるために伏せる

ような構えをとった。もうそこに笑みはない。ぎしり、と奥歯を軋ませ、その双眸に僕らをとらえる。

「やってみろ」

全力を出してやる、ということか。好きにすればいい。同じことなんだから。

最後の対峙。同時に動いた、その瞬間

みただけ、さ。

加賀さんは僕らと対峙していた時より激しく、ぎりぎりと言をみ合わせた後、叫んだ。

「私のジャージをお、よくもおおおおー！ー！ー！ー！ー！」

……この人は、どういう……いや、まあ、仮にさ、仮にだけど、百歩譲ってジャージがこの状況よりも大事だとしてもだよ？ とつくに血やなんかで汚れまくってるんだからさ、今更泥がついたくらいにならないだろ。

「血は人間の情報に直結してっからいじりやすいの！ 土や水はもつとずつと階層の低い領域に設定されてっからいじんのめんどくせーの！ 洗濯しなきゃなんねーの！ 痛むの！」

なんでこの人は人の心を読むんだ。相変わらず何を言ってるのか全然分らないし。

「ああーもう完っ全にやる気ねーわ。もあー全部どうでもいい。帰る。帰って寝る」

加賀さんはそう言って、僕らに背を向けて去っていく。

いやいやいやいや、ほんとに帰る。本当に帰っちゃう気だよあの。嘘だろう！？ これで放置されんの！？ やって良い事と悪い事があるだろ。

《晴子ちゃんったら、どうせ直るんだからそんなのどうだっていいじゃない。それよりほら、あの子達きょとんってなってるわよ？ 放って置いてかわいそうよ》

誰！？ この人誰！？ 急に知らない人の声が聞こえてきたんだけど。どうなってるんだよもう！

「ああ、そっういやそう そんなの？ そんなのつつった今？ 何それ、私のジャージが」

「なんであんだだちはじゃんどぜづめいしでぐれないんですがああいつつもいつもおお！」

「……え？ 何？ なんて？」

《ほら見なさい、晴子ちゃんが変なことばっかり言うから怒っちゃ

つたじゃない」

「は？ あんたこいつが言ったこと分かったの？」

《いーえ。なあんにも》

《兎川君はまずそのどばどば出てる鼻血を拭いた方がいいんじゃないかなー》

「……ぶげません」

清寺さんに言われて拭こうとしたけれど、腕が二本とも無いことを思い出し、断念した。

「遙さん、僕ハンカチ持つてるから僕がやるよ」

少し前の僕のように啞然^{あぜん}としていた彰君が、今まで本気の殺し合いをしていた人間達のやり取りとは思えない光景に気後れしながら、おずおずとからすさんのスカートを掴む。

「……止まらないね」

「だね……」

屈んで、彰君に拭いてもらう。のだけど、相当強く打ち付けたのか、鼻血は一向に止まる気配がない。

「あんた、一回立ちなさい」

僕の状態を見かねたのか、加賀さんがため息をつきながら僕と彰君のそばへ来る。気付けば、なんだかおかしい空気になっているけれど、それでも今までのことを考えれば気を抜くことはできないと思ひ直し、僕が腕が無いながらも身構えつつ加賀さんの前に立ったところで 首を刎ねられた。

「ぎいやあああああああー！」

「ううわあああああああー！」

「いちいちうるっせえー！のよっこの馬鹿っ！」

思わず悲鳴を上げた彰君と、首が無いのに悲鳴を上げた僕に、加賀さんは心底うんざりしたような顔をして、さらに僕にだけは蹴りまで入れてくれた。

蹴られたのに……痛くない。

……首を切断されたからすさんの体を眺める僕……これって、戻

つたのか　幽霊に。

「死なないんですか僕ら！？　いや死んではいるんでしょうけども」
「死んだ奴が死ねるわけねーでしょ」

いや、まあ、うん。理屈としては、理に適っている……のか？
もう全然分らない。

「ほ、ほんとに、平気なの？　遙さん？」

「う、うん。たぶん、だけど。大丈夫、だと思う」

驚いたように、心配するように、彰君が幽霊となった僕を見上げ、
僕の生返事を聞かやいなや

「！　新仁さん！　新仁さんは！？」

からすさんを探して、辺りを見回す。

からすさんは　幽霊のからすさんは、無残な姿で倒れている自
分の体の隣、懐かしい感すらある黒いセーラー服姿で、地に手をつ
いてうずくまっていた。

それを見た僕と彰君が慌てて駆け寄るけれど、彼女は顔を上げる
ことすらできないようだった。

「からすさん……大丈夫？」

「……え……い……じょ……ぶ」

絶対大丈夫じゃないよね？　見れば分かることを聞いた僕が悪い
んだけど。

「まあなんつーか、限界超えて思いつき走り続けたみてーなもん
だから。今はきついでしょうけど、時間が経てばなんでもねーよう
になるわよ」

加賀さんが僕と彰君に交互に視線を送りながらぱたと手を振
って、構うなというような仕草を見せた後、

「で、あんたさっき何言ってたのよ？」

視線を僕に固定して、僕が鼻血を出しながら叫んだ時の内容を尋
ねてきた。

「何って……えっと、だからその、説明をして欲しいなあ、と思
ったんですけども……」

「ふうん。さつぱり分かんなかったけど。で、なんの説明が聞きたいのよ？」

この人が珍しく、なのか普通に答えてくれる姿勢を見せてくれたので、僕はもつとも気になっていることを　こんなことをしても意味がないと思いつつ、彰君の盾になるように立って、聞いた。

「今の、この状態を見ると……加賀さん達は彰君の敵じゃない、ように見えるんです、が？」

「何をもって敵とするのか知らねーけど、この子やあんた達をどうこうしようって気はねーわね」

これが嘘だとは、思えない。嘘なら、さつさと襲ってくればいいんだから。でも、だったらなんで

「じゃあ……彰君を、どうこうって言うてたのは、なんだったんです？」

「そうね、なんて言うか……あれよ、あれ。あんたも知ってるわよ。分かんでしょ？」

「いや、分かるわけじゃないでしょう」

「……ああ、ドッキリよ。ドッキリ。だーいせーいこう！　ってやつね」

「ふざけんなよ！？」

いやだからさ、やって良い事と悪い事があるんだってば。何考えてんの、この人達。

《晴子ちゃん、ちゃんと説明しなきゃ駄目でしょう？　私達そんなことしてないじゃない》

ですよね知らない人。いくらなんでも今のはないよね。

「やってることは大して変わんねーんだから別に構わねーでしょ」

《言い方があるって言うてるの。もう、晴子ちゃんどうしてわざとそういうことするのかしら》

「あの、少し話は逸れるのですが……あー、なんて言うか、その人？　は　誰なんですか？」

どうやら、この人達が彰君と敵対する気が無いのは間違いないよ

うなので、僕はその詳しい内容よりも先に、ずっと気になっていた声だけが聞こえてくる知らない人のことを尋ねた。知らない人、だよな？

「ああ、そう言えばこいつとは会ってねーんだっけ。こいつはあれよ、？ライティス・レイリス理法の眷属？の　その子と同じグループの……まあ、偉い奴よ。私を監視するために最初からくつついてはいたんだけど、そりゃあんたには分かんねーわね」

《申し遅れました。私、わたくしあやのこうじかなえ綾小路佳那恵と申します。よろしくね、遥君。新仁ちゃん。彰君は　ごめんなさいね。あの時はひどいことをしてしまつて》

きれいな姿勢でお辞儀をする綾小路さんに、僕も「はい。こちらこそ」とお辞儀を返した。もつとも彼女の今の姿は？僕？なので、なんだか変な感じになっているのは否めないのだけど。それはそれとして

「彰君は、会ったことあるんだ？」

あの時のひどいこと、というのをあえて聞こうとは思わないけれど、この人の口振りからすれば恐らく、あるのだろう。

「……たぶん。でもあの時はいっぱい人がいたから、あの中のどの人なのかよく分からないけど……」

「場違いなひらひらした格好した上にまだ暗い内から日傘差してた変な女がいたでしょ？　あいつがそうよ。ったく、これから荒事だつて時にあんな気の抜けた格好して来る奴の気が知れねーわ」

《あら。本当、失礼ね。どこへ行くにもジャージの人には言われたくないんですけどー》

「へえ、あんた私のジャージに喧嘩売ろうつての？　いい度胸してるわ。だつたら望み通り　」

「えーとですねえ、話を逸らした僕がこんなこと言うのもなんですけど、そろそろ本題の方へ戻ってきてくれませんかねえ？」

同じ体を共有してる人達がなんで殴り合いを始めようとしちゃうのかな……もしかして、できるの？

「だからドッキリつつたでしょうが。相変わらず人の話を聞かねー奴ねえ」

《私達がしていたことはね、彰君が私達の脅威になるかどうかを見極めるための試験のようなものだったの。だから私達のしたことを許してくれ、なんて言えないけれど、ね》

綾小路さんが、もう加賀さんには任せておけないと思ったのか、代わりに説明してくれる。

《この子の力は大きすぎるでしょう？ それを無闇に使われるとこれまで保ってきたバランスが簡単に崩れてしまう。全部私達の都合だけど、それでも放つてはおけないの。だから、この子が力を自分の意思で制御できるかどうかを知りたくて……追い詰めた》

……確かにあっさり納得できる話じゃないけど、でもそれだけなら別に

「なんか、目的だけ聞くと僕とからずさんはまったく関係ない気がするんですが」

「ねーわね。たまたま変なのがいたからついでに使ってみるか、って思っただけよ」

変なのって。実際変なのなんだろうけどさ。しかしそうか、僕ら完全におまけだったのか。

「あ、関係ないと言えば……さっきの話を聞いた限りでは清寺さんが反逆だとか何とか言って加賀さんと戦ってたのは別にいらなかった気がする」

あれ？ そう言えば、さ……

「清寺さんって死んでませんでした!？」

気付くのおっそいなー僕。もう散々話しちゃったぞ。なんで最初に声を聞いた時に気付かないんだよ。

《やだなー、兎川君と一緒にしないでよー。僕はこの通りぴんぴんしてるよ?》

直後に、目の前にいる？僕？が両腕をぶんぶんと振る。今更だけど、この人達は一つの体に三人もいて不便じゃないのかな。下手し

たらもつといるのかもしれないけど。

「あー、今思えば当然と言えば当然ですけど、嘘だったんですね。加賀さんが殺したって言ってたの」

「別に嘘なんてついてねーわよ。私は潰したつつただけで、殺したなんて言ってるねーでしょうが」

潰したら死ぬでしょう、普通。まあ、この人達は普通じゃないけどさ。

「えっと、じゃあ改めて聞きますけど、あのやり取りは一体なんだったんですか？ 目的からは外れてる気がするんですが。まさか本気で清寺さんが裏切った、ってことじゃないですよな？」

「あれはこの馬鹿が、こっちの方が面白くなりそうじゃない？ だとか意味の分からねーことをあの段階になっていきなり言い出したからよ。この馬鹿が！」

「えー、ちゃんと説明したでしょ。せつかく烏文字君と兎川君に來てもらったのにあれで終わっちゃったら二人に悪くないかなー、って」

「人を串刺しにする前に言えつつってんのよ！」

ある意味ほんとに反逆だったのか。でも、そのおかげでいろいろあったから、僕は感謝してるけど。

「もー、機嫌直してよハルちゃん。僕がハルちゃんのこと好きだって知ってるでしょー？ ハルちゃんはもう僕のこと嫌いになっちゃったのー？ ねー、ハルちゃん？ ねーってばー」

「……うるさい」

「なんか……ハルちゃんハルちゃん言いまくってましたけど、それはもう諦めたんですか？」

言われるたびに烈火の如く怒ってたのに。むしろもっと早い段階で諦めるべきだったとは思っけど。

「そもそも、どうして晴子ちゃんに耕四郎君にハルちゃんって呼ばれると怒ってたの？ 晴子ちゃん昔からハルちゃんって呼ばれてたじゃない」

そうなの？ 何それ？ 訳分かんない。遅れてきた反抗期だったんだろうか。

「これを始める前は もっと真剣だったか、緊張感が必要だと思っただのよ。だから、この間はやめろだったの。ハルちゃんなんて呼ばれてる奴はどう考えても怖そうじゃねーでしょ？ っだったのに、結局まるでやめねーわ、いつも通りなれなく接してるわ……ちゃんと上司と部下って立場をわきまえろだったのに」その辺は清寺さんだけの問題ではなかった気がするけど……なるほど、そういう意図だったのか。

「はあ、でも意外ですね。清寺さんって加賀さんの部下だったんですか」

なんと言つかこう、もつと近しい関係だと思ってたんだけど。

《僕は部下じゃなくて、ハルちゃんを守る騎士だよ》

「騎士、ですか」

上司と部下って関係よりは、思っていたのに近いかも。でもどっちかって言っと

「つつても、耕四郎より私の方がつえーけどね」

ですよ。もちろんそんなことは僕には分からないことなのけど、でもそっちの方がなんかしっくりくるんだよなあ。清寺さんには悪いんだけどさ。

《晴子ちゃんと比べたらかわいそうよ。晴子ちゃんより強い人なんてほとんどいないじゃない》

「それを差っ引いてもよえーでしょ。耕四郎は」

《ハルちゃんはいっからこんなひどいこと言うようになったのかなー。昔はいつも僕の後を追いかけてくるような子だったになー》

《昔の晴子ちゃんは本当、健気でかわいらしかったわよねえ》

？僕？が遠い目をしているのは誰の意思によるものなんだろう。ひよっとしたら加賀さん、だったりするのだろうか。

「あの一、それで話は戻るんですけど、なんと言つか今更な感はある

りますが 肝心の試験の結果は、結局どうなったんでしょうか？」
「こんな感じになってんだから、当然問題無しに決まってんでしょ。
うん。あんた、お子様の割に根性あんじゃない。そういう奴は嫌い
じゃねーわよ」

加賀さんが彰君の頭をぐしぐしとなでる。それを彼は嫌がる、と
いうよりは戸惑っていた。まあ、さっきまで殺すだのなんだのと言
っていた人が急にフレンドリーになったらそんな感じになると思う。
それを見て素直に良かったと思う、だけでいいのかもしれないけ
れど、でも

「……問題があると判断していたら、どうするつもりだったんです
か？」

今はたまたまこの人達の都合のいい方に転がった。でも、この先
は？ これ以降にそうはならなかったら、どうするんだ。

「殺すか、この子が死ぬ危険をおかして力を奪うか、だったでしょ
うね……でもね 》

僕の表情が変わるのを見てか、僕が言う前に綾小路さんは続ける。
「晴子ちゃん は 晴子ちゃん だけは何があってもそんなこと許さ
なかったと思う。それだけは、信じて欲しいの……」

「？ なんでよ？」

「晴子ちゃんが自分でそんなこと言うの！？ こういうこと言うと
晴子ちゃん 嫌がるだろうなと思ったから控えめに言ったのに！ だ
ったらもう全部言っちゃうんだからね！」

「……なんなんだよもう。ここ女子高かよ。僕女子高なんて知らな
いけどさ。」

「最初はね ああ、その前にまずこれかしら。何て言うか、私達
のような？ 創造主？ の眷属の総意を決める少人数の議会 のよう
なものがあるのだけど、そこでは最初、問答無用で彰君を殺してし
まおうっていう意見がほとんどだったの。この子は、力は強くても
戦いに長けているわけではないでしょう？ だから今のうちに、っ
て。でもでも、晴子ちゃんはそれにもものすごく怒ったのよ？ この

子は力が少し強いだけの子供だつて、そんな理由で殺してたら人類皆殺しだろうがぁー！　　つて。でね、納得できないなら私が大丈夫だつて証明してやるつて晴子ちゃんが言い出したから、こうなつたんだから。ね？　　晴子ちゃんいい子でしょ？」

「言い出したつつーか、そもその決まりに？新しく創造された者には我々の争いが終結したことを告げ、我々に恭順きやうじゆんするならばこれを迎え入れる？つてのがぁんでしょうが。その辺を無視していきなり殺そうとするあの連中の頭がどうかしてんのよ」

この二人は始めつからずつとそうだけど、温度差がすげえな。

《でもねー、いざ始まつたらね、この子にほんとは自分が味方だつてばれたら駄目じゃない？　だからこの子に状況なんかを簡単に説明したらいきなり、これからあんたをぶつ殺してやるわ、なんて言つて、そんなことした自分にすぐ落ち込んだのよ？　あの時の晴子ちゃん本当、かわいらしかつたわあ》

「こんなちつちえー子供相手にぶつ殺してやるなんて言えば誰だつてげんなりすんでしょーが」

《それにねそれにね、さつきだつてね、途中でいきなり、もうあなた達をいじめるのがつらいから代わってくれて言つて戦うのやめちゃつたのよ？　でもあそこまでしておいて今更止める訳にはいかなかったから、仕方なく私がその役を引き継いだんだけど。私ただの監視役だつたのにー……でも、急にそんなことになつた割には結構ラスボスつぽかつたでしょ？　私一生懸命頑張つたんだから》

「私がいい加減めんどろになつてきたつつたら、あんたが勝手に始めたんでしょ。だから丁度いいと思つて手え引いただけよ。あんなかつたりー事やつてられつかつつーのよ」

確かに途中で、急に話し方とか変わったなあとは思つたけど……ところで、らすぼすつて何？

《ふうん、じゃあなんで最後はまた自分がやるなんて言い出したの？　いいところだつたのに！》

「あんだけやられといてよく言つわ。あんだじゃ無理そうだったか

もいいじゃねえかよおお！

「いいじゃないですかちよつとくらい……これで、最後なんですか」

彰君を試すための 結局加賀さんはそれも本気じゃなかったけど そのための駒。その役目も、もうおしまい。ずっとこのままではいけない 清寺さんはそう言っていたのだから。

「なんで、最後だと思うの？」

加賀さんは彰君を下ろして、僕と向かい合う。

「役に立てば願いを叶えてやる。私はそう言っただわよ？」

……この人は確かにそんなことを言っていたけれど、さっきまでの話を考えればあれは僕らをこの試験に使ったために言った方便、だったと思うのが……でも、それが本当なら

「ただし、元通りになれんのは一人だけ、だけど」

加賀さんは大きくため息をついて、目を細める。

「なんとかしてやりてーのは山々だけど、ぎりぎりまで引つ張つてもどうしても届かねーの。そこはもう私が手を出せる領域の外だから」

以前にこういう話をしていた時とはずいぶん様子が違って、真剣な表情。

「さあ、あんたの願いはなあに？」

そう思っていたのに、魔王はやっぱり、あの時のように笑った。

「……意地悪ですねえ。言わなくても分かるでしょうに」

僕の願いはもう叶ったのに、それでも、もう一つと言つのなら そんなのは決まってる。

「加賀さん、清寺さん、それと綾小路さん、彰君のことをお願いします」

？僕？の姿をした人達に頭を下げた。？僕？は手をかざしてそれに応えてくれた。

「加賀さんにいじめられたらすぐからすさんを頼るんだよ？ 我慢しちゃ駄目だからね」

彰君の頭をなでて、笑った。彼は一瞬顔を曇らせたけど、でも、笑って頷いてくれた。

「からずさん……」

まだ起き上がるこののできないからずさんの前に屈む。

「ごめん……最後まで僕のせいで　あ、いや、そうじゃなくて僕は　」

僕は言おうとして、だけどそれをさえぎるように、彼女が顔を上げて、何事かを僕に言って、そして

すべての感覚が断たれた先の、無限に広がる暗闇へ落ちていく。

……これで、終わり？　そんな、待ってよ。僕はまだあの人に言いたいことが

あるんだ。

……………？

？？？ なにこれ？

三途の川？ 三途の川……なのかな。これ。

だとしたら、がっかりだぞ。通学路の脇に流れてた汚いドブ川と変わらないし。がんばったら飛び越えられそうなんだけど。これに渡し賃はいらないよなあ　ん？ 向こうに見えるのって……

う、う、ん？　ここ、川が一緒って言うか　全体的に通学路そのまんまなんだけど……

なんだろう、あの世っていうのは本人の記憶に依存して形を変える　とかなんとかなのだろうか？　加賀さん達がいれば分かるように説明してもらえ……　たかどつかは疑わしいけど、どっちにしろいるわけないし。むう、困ったなあ。じゃあとりあえず

……　からすさんは、なんと言っていた？　暗闇に落ちる前のあの

時、確か、こう、口が動いて

振り向いた。

勢いをつけすぎて転びそうになったけれど、なんとか踏み止まる。目の前に、驚いた顔をした女子高生がいる。

僕を、殺した、少女だ。

彼女は、一瞬呆然としていたけれど、すぐに我に返り 僕を追い越すように駆け出した。僕はとっさに彼女の腕を掴んで、聞いた。

「君は、僕を殺した？」

「……は？」

めちゃくちゃなのは自覚しているけれど、他に聞き方が思いつかなかった。

「君は僕を殺したのか、と聞いてるんだ」

「……なにそれ、流行ってる口説き文句？ 気持ち悪い。なんで私

があんたなんか」

「ああ、もういいよ」

彼女を見てすぐに思い至った突拍子もないことを確かめたかっただけだから。

これが、僕が殺される前なのか、殺された後なのか。刃物を突きつけようとした人間が振り向いたから驚いたのか、それとも、自分が殺したはずの人間が目の前にいるから驚いたのか。

だけど、この反応を見て確信した。

今は、僕が殺される前だ。

今が殺された後ならば 口説き文句なんて反応はありえない。

僕は彼女の腕を離し、背を向けて駆け出した。けれど、はたと気付いて振り返る。幸い少女はまだそこにいた。今すぐに確かめたいことがあるのに、よいいな世話だというのは分かっているはずなのに、それでも 知らぬ振りをするのは卑怯だと、思ったから。

「君！ もう一つだけいいかな？ あー、なんだっけ、確か シ

ンヤ君、だったっけ？ その人を殺すことに君が人生を懸けるほどの価値はあるのかな？ 僕は君達のこと何も知らないけど、でも僕は、無いと思うよ」

少女は口を開けて放心したように僕を見ている。でも、丁寧に説明している余裕なんか無い。

僕は今度こそ少女に背を向けて、ここまで歩んできたであろう道を戻り、駅に向う。

振り向いて。

最後の瞬間、あの人は確かに、そう言った。おかげで僕は、二度も殺されずにすんだ。

元通り、だ。

この上なく元通り。僕だけでなく、恐らく世界のすべてが元に戻った。それなのに

だったらどうして加賀さんは、戻れるのは一人だけ、なんて言っただんだ？

からすさんだって元通りになっている、はずだろう。これが分からないけど 時間を巻き戻したような状態だというのなら、何故その後あえてからすさんだけを取り除く必要がある？

……全部戻ったのに、僕が今日起きたことを覚えているのはなぜだ？

そういうことなのか？ 今日の記憶を残すことが、一人にしかできない？

それなら、その一人が、なんで僕なんだ……僕は、僕は加賀さんに……

からすさんは、こうなることを知っていた そう考えなければ今の状況が成立しない。知らなかったのなら、あんなこと言っわけがない。あの人は、あの時には全部知った上でああ言ったんだ。

僕を助けるために。

あの人は、今頃駅のホームで電車を待っているのか？ 寝ぼけながら？ その先は

だったら、止めればいいんだろう！抱きつこうが蹴り飛ばそうが、どうにでもなるさ。

間に合いさえすれば。

そうだ。これはきつと、あの人が初めて僕を頼ってくれたんだ。考えてみれば、寝てる状態じゃ意識が無い状態で記憶が戻ったって、どうにもできない。だから、動ける僕に止めてくれって、自分のところまで来てくれって、そのために一人だけの一人を、僕にしたんだ。

息が苦しい。たいして時間が経ったわけでもないだろうに。でも、全力で走り続けるには、少しばかり長い時間な気はするかな。知るか。

駅はもう目の前だ。

昔々あるところに人よりも少しだけ背の低い男子高校生がいました。ある日彼は駅のホームで電車を待っていた女子高生に突然抱きついて、烈火の如く怒り狂ったその女子高生に足蹴にされながら、男のくせにとののしられて、そのままごく自然な流れで痴漢扱いされて、駅職員にこっぴどくしばられて、警察のご厄介になっているところを彼の母親が怒りながらもそれを押し殺して、申し訳なさうに身柄を引き取りに来たのでした。めでたし、めでたし。

そんな風になるんだと、思っていた。

でも彼女は、バラバラになってしまった。

もうどれくらい経ったのか、僕は彼女と初めて会った時の、駅のホームにある長椅子に腰を下ろしたまま、動けずにいた。

僕が駅にたどり着いた時にはもう、彼女はそうなっていた。それも、あの女子高生に構っていなければ間に合った、なんて程度の差ではなく。

駅員に確認すれば、今朝僕が乗った電車がこの駅に着いた頃には既に、そうなっていたらしい。

僕はその時、いつもと同じように かあさんは早く会社の近くに引越せばいいのになあ、そう思いながら頭に英単語を詰め込んでいて、反対車線のことなんてまるで気にかけていなかった。

……なんだこれは。

戻った時点が、からすさんが死んだ後じゃないか。

加賀さんが言っていた、ぎりぎりまで引張ってもどうしても届かない。あれは、からすさんが死ぬ前の時点には戻せない そういう意味だったのか？

もしそうなら、初めからからすさんが元に戻ることで、できなかったってことじゃないか。

おかしい。辻褄が合っていない。

からすさんは最初からずっと、僕のわがままを聞いてくれたその前まではずっと、元に戻ろうとしていた。その目的を果たすために、あの人は加賀さんと共に行くことを選んだ、はずだ。そしてそのことは、加賀さんだつて承知していたんだと思う。

私達に利点はあるのですか　彰君を殺せ、そう言われた時にか
らすさんが聞いていた。それに加賀さんは、願いを叶えてやる。で
も死人の望みなんて一つだろう　そう答えた。

あれはからすさんの望みを知っていたから、だからあんなことを
言つたんじゃないのか？

僕はずっとからすさんのそばにいたんだから、からすさんが直接
その望みを伝えていないことは知っているけど、でも加賀さんはた
まに、僕が口に出さずただ考えているだけのことを読み取っている
とは思えない行動を取ることがあった。

加賀さんはそうやって僕にしたようにからすさんの望みを知つて、
その上でからすさんに対して言つたんだ。

あそこには僕だつていたけど、でも僕は　あの時の僕は、生き
返りたいなんて思っていなかったんだから。

でも……そうなるとやっぱり辻褄が合わなくなってしまう。なら、
仮に、あの時はからすさんも元に戻るはずだったけど、でも途中
で　彰君の試験の途中でこの状態にならざるを得ない何かが起き
た、と考えればからすさんの行動も……いや、違う。これは無い。

加賀さんは最後の最後まで、戻れるのは一人、そう言っただけで、
からすさんが戻れない、とは言わなかったんだから。

加賀さんはそんな　からすさんを騙すようなことはしない。あ
の人はそんなことをする人じゃない。

じゃあ、からすさんは最初から　かどつかは分からないけど、
少なくとも願いを叶えると決めた時点では既にこうなることを知っ
てた？

これはこれで、訳が分からない。だったらあの人は
あの時と　ここに座つてからすさんと話していた時と同じよう

に、音楽が鳴り響いた。機械的な音の、聞き覚えのある曲　それは、僕の携帯の着信音。

「もしもし！」

加賀さん？　いやもしかしたら　そう思っ慌てて電話を取る。そこから聞こえてきた声は

『無事……なのよね？』

かあさんの声、だった。心配する、というよりは疑っているような。

「えっと……う、うん。無事、だけど……どうして？」

かあさんは、僕が今日死ぬはずだったことなんて知るわけ無いのに、なんでこんな電話を掛けてくるんだろう？

『どうして？　じゃないわよ。学校から電話があったわ。兎川君が連絡も無く休んでいるんですが。あなた、今どこで何してるの？』

……うわあ、やっちゃった。学校のことなんて完全に忘れてたかな。今気付いたけどすっかり明るくなって。これも当然あの時と同じ　秋晴れと言うにふさわしい、澄みきった空。

「ごめん、かあさん。今は駅にいる。学校の方の。ここでちょっと考え事してたんだ」

『そう。ならいいけど』

いいのかな？　これ。絶対に良くはない、と言つか悪いと思うけど。まあそんなことはどうでもいいんだ。

「かあさん。今更だけど、今日学校休みた　休むから」
『分かった。じゃあ学校には私から連絡しておくわ』

相変わらずだなあ。理由も聞かないとは。今までこんなこと一度も言ったことないのに。かあさんはなんでこう　いや、でもかあさんは……なら、なんでなんだろう？

「……あのさ、かあさんは、どうしていつも何も聞かないの？」

『聞いて、それを私が納得できなくて、だからそれをやめろって言ったら、やめるの？　あなた、やめた試し無いじゃない』

「え？ いや、そんなこと、ないでしょ？ やめろって言われたら…… やめる時もあるよ」

『なら、私に合わせて朝早く家出るのやめなさい。後、家事やめてその分勉強しなさい』

「……それは、やめないけど。でも」

『ほらみなさい。あなたがこうと決めたことを変えたことなんて無いんだから。ただの一度だって』

「ええ…… そんなわけないと思うけどなあ。むしろ結構変えてる気が……」

『自覚なかったの？ あなた。そんな風に思うのはいつも変にあちこち寄り道してるからでしょ。でも結局あなたは、自分の決めたところにしか行かないわよ。いつつもいつつも』

そんな自覚まったくないんだけど。ほんとかなあ？ さっぱり納得いかない。

「でもさ、じゃあそれを……なんで怒らないの？」

『なんで怒らなきゃいけないの？ 別にいいじゃない。あなたが決めたことなんだから』

そういうものなのかな。正直よく分からないけど、だけど

「……ありがと。かあさん」

『？ なにそれ？ まあいいわ。何しててもいいけど、ちゃんと帰ってくるのよ？ じゃあ』

切れちゃったよ。しかし、なにそれ、はないと思うんだけどなあ。まあいいや。仕返しに今日はよけいに手間のかかる夕飯作ってやる。でもその前に、確かめに行かなきゃな。

時刻が十三時を少し過ぎた頃、僕は辺ぴな土地にそびえる六十階建ての高層マンション　加賀晴子さんの住居にたどり着いた。

駅でのかあさんとの通話の後、僕はすぐにここへ向かった。

もっとも、言うまでもなく僕の携帯の電話帳に魔王の番号は登録されていなかったので、まずはここがどこなのか調べるところから始めたのだけだ。

ただ、こんな所にこんな規模の建物はこれしかないので、思いのほか早く所在を特定することができた。

フロントに控えていた係員の女性に取り次いでもらうと、あつさと六十階まで通された。そして家の扉の前、以前案内された時とは逆の出入り口で僕を待っていた加賀さんと簡単に挨拶を交わし、その後彼女に案内されるまま家の中を進むと、結局はあの広大なりビングの端にある六畳間を模した一角に落ち着いた。

「こういう時、はじめましてっーべきなんかしら」

ちゃぶ台を挟んで向かい合った加賀さんが、僕にお茶を差し出しながらそんなことを言った。

「さあ、言わないんじゃないですか？　よく分かりませんが」

こんな経験はしたことないからな。でも一応お互い知ってるわけだし、それはなんか違う気がする。確かに初対面、ではあるんだろうけど。

「ま、なんだっていいわね。んで？　あんた何しに来たの？　彰に会いに来たんだったら、いねーわよ。今耕四郎があの子連れて挨拶回りしてから。ここにいんののは、私だけ」

「それはそれで残念ではあるんですけど、でもここに来た目的は彰君のことじゃないんです」

「……あんた、ずいぶんと簡単に信じんのね。ほんととはぶつ殺したんじゃないか、とか思わねーの？」

「思いませんよそんなこと。それでも僕は加賀さんのこと信用してるんですからね」

加賀さんが「つまんねーわねー」とそれでもどこか楽しそうに言うてから、続ける。

「じゃあ、なんの用なんかしら？　ここにあの子以外の用があるとは思えねーけど」

「……あのやたら大きな穴、ふさがってましたね」

反射的に、本当に聞きたいことではないことを聞いてしまう。こういうことをしてるから、かあさんに寄り道してると言われるんだろうな。

「ふさがったつーよりは、空かなかったつーべきね。要は、あんたと同じよ」

確かに、僕はここに来るまでの間に一度死んでその後生き返ったわけじゃない。死ななかったただけだ。

「こんな風に時間が戻った　のかそんな感じのことになったのは、やっぱりあの穴をどうにかするためだったんですか？」

「そりゃあね、あんた一人のためだけにこんな大掛かりなことはやんねーわよ。あれは普通じゃねー　私らが普通にやるやり方とはまったくちげーやり方で空いたから、そのやり方を解析しながらちまちま直すよりは全部まとめて戻したほうがマシっつーことになったのよ。まあ戻すのだって楽じゃねーんだけど、でもこれはあんたが言ったように時間を巻き戻すようなもんだから、あの穴を空けた方法を理解しなくていいっつーのがでかかったわね」

「あれは彰君が空けて、でも空く前の時点に戻って、その後も一度空くことがなかったってことは……彰君も今日あったことを覚えてる、んですよね？」

「元々あの子の意思で空けたもんでもねーのよ。あの子が生まれた時の　なんつーか、事故ね。あの子の意識が定まる前に力だけが暴走した、とも言えばいいんかしら。まあそんな感じよ。だからあの子が生まれてから穴が空くまでの間にあの子の意識がはつきり

とそれを拒みさえすれば」

「穴は空かない。つまり彰君は、全部覚えていて、ということですね」

「そゆことね」

加賀さんが僕をここへ普通に招きいれてくれた時にきつとそうだろうとは思っていたけど、この人の口から改めてこれを聞いて、安心した。

彰君が僕のことを忘れていても、彼が無事に生きていけるならそれで構わないと思っていた。でも、そう思ってもやっぱり、覚えていてほしいという気持ちは消えなかったから。

「最後にあの橋にいた人は 清寺さんと綾小路さんもやっぱり覚えてる、と思っていいいんですか？」

「あそこにいたっつーか、私ら イーヴィル・ブラッド ? 混沌の御使い? と? ライティス・レ 理法の眷属? は全員そうよ。むしろ、そうじゃねーのに覚えてるあんたが例外なのよ」

僕が、か。僕だけが、例外。それはつまり

「……からすさんは 烏文字さんは例外には含まれなかった、ということですか」

長い寄り道を経てようやく僕は、目的地に足を踏み入れた。

「そうね。戻った時点が既にあの子が死んだ後だったから、記憶を戻す先がなかった。先がねーんなら、戻しようがねーわ」

「どうしても、どうしてもあの人が生きている時まで戻すことはできなかつたんですか」

今更こんなことを言っただって、この人を責めるようなことをしたって でも僕は……

「戻すことそれ自体は、できたわよ。それでも結構ぎりぎりの領域だったけど。でもね」

思わず僕は言いかけて、でも加賀さんはそれをさえぎるように言葉繋いでいく。

「戻す時点は、彰が生まれてから穴を空けるまでの間に設定しねー

と、さつき言ったことができねーでしょ。起きたことの順番は烏文字ちゃんが生きて、彰が生まれて、穴が空いた、なのよ。烏文字ちゃんが生きてるところまで戻せば、今度は彰の記憶の戻る先がねーの。だから、あそこしかなかった」

言い終わって、ため息をついて、つまらなそうに僕を見つめてくる。僕が今どんな顔をしているのか自分でも分からないけど、加賀さんはそれを見てもう一度ため息をついてから、言った。

「それともあんたは、彰を大量殺人者にしても烏文字ちゃんを生かせっつーのかしら？」

僕にそんなもの選べるか　でも、あの人はそんなこと絶対に許さない。だからこれは、あの人が望んだ通りの結末、なんだ。

「あの人は、何か言っていますでしたか？　僕に、じゃなくても何か」

「なにも」

「そう、ですか……」

あの人らしい。あの人が、僕のように未練がましいことをするのは似合わない。でも、そうして欲しかった　そう思うのは、僕のがままだ。結局あの人は僕のがままだ

そう、だ。それじゃないか。僕が知リたかったのは、それなんだ。「加賀さんは、あの人の望みを　僕のがままだのためにあの人が諦めた望みを、知っていますか？」

あの人は自分が元に戻れないことを知っていたはずなんだ。だったら

「それを聞いて、どうしようっての？」

この口振りからすれば、加賀さんは知っている。なら僕にだってどうするかなんて決まってるんだ。僕が犠牲にしたあの人の願い、それを

「それを僕が果たしたい　果たすんです。そんなこと、あの人が望んでいなくても」

「相変わらずわがままな奴ねえ。でもなんにしろ、もうその必要は

ねーと思うわよ?」

「……僕にはできない やりようがないことだって、言いたいんですか?」

「んや、むしろあんたにしかできねーことなんだけどね」

一体、この人は何を言っているんだ? 当然にそう思っただけで加賀さんを見つめる。訳が分からない。僕にしかできないけど、もう必要ない?

視線の先の加賀さんが腕を伸ばして、僕を指差す。そのまま僕を射抜くように、まっすぐに。

「あの子の望みつてのは、あんたよ」

……僕? 何、それ?

「……どういう意味なんですか? それは。僕が あの人の、望み?」

「だから、最初っからあの子の望みはあんたが元通りになることだった、つつつてんの」

あの人は、ずっと僕のために動いてくれた? なんて……いや、でもそう、か。あの人は僕のために本気で怒ってくれるような人だ。僕がかあさんに会いに行ったりしたから、あの時僕が泣き言を言ったりしたから、だからあの人は

いや、いや待って。おかしい。それはおかしい、だろう。

「失礼ですけど、今言っただのって……加賀さんが適当に考えませんでした?」

「本気で失礼な奴ね。なんで私がそんなことしなきゃなんねーのよ」

「いやそれは……だから、その、僕を励ますため、とか……」

「だから、なんで私がそんなことしなきゃなんねーのよつつてんのよ」

「だって、おかしいじゃないですか。あの人がここで彰君を……願いを叶えようとした時にはそんなことは望んでいなかった、はずですよ」

僕らがかあさんに会いに行く前に、あの人が僕のために、という

のは納得がいかない。あの時はまだそんなことをする理由が無いんだから。

「なんでそんなことが言えんのよ？ あの子に直接聞きでもしたっ
ての？」

「聞いてはいませんが……でも、そんなはず……あ！ そうだ。

あれは あの時加賀さんがあの人の望みを知ってたつて言うんなら、なんであんなこと言っただんですか？ 変ですよ。どう考えても」

「は？ なによ、あんなことつて？」

「あの人が何か利点はあるんですか？ つて聞いた時に、願いを叶えてやるけど、死人の望みなんて一つだろう、つて言っただじやないですか。あれつて生き返らせてやるつて意味だつたんですよね？
あの時点でもうあの人が僕のために、だつたのなら、あの人にあんなこと言わないでしょう」

「はあん？ 私そんなこと言っただけ？ いまいち覚えてねー
けど……でも言っただんならあんだに言っただでしょ。烏文字ちゃんにはそんなこと言う理由ねーし」

僕つて……そんなわけないじゃないか。だつて僕は

「僕はあの時、生き返りたいなんて思つていませんでしたよ。それなのに、僕に言っただんですか？」

「知らねーわよそんなの。私があんたが生き返りたいと思つてると思っただでしょ。覚えてねーけど」

「知らないつて……加賀さんは人の考えてることが、こう 直接分かるんじゃないんですか？ そりゃーから十までなんでもかんでもつてことではないのかもしれないけど。でも何回も僕の」

「……なにそれ？ 他人の考えてることなんて分かるわけねーでしょうが。あんたは相変わらず残念ねえ」

「え……いやだつて、僕が口にしないで考えてるだけのことに対し
て反論したりしてたじやないですか」

「ああ、あんなもんは 勘よ。当たる時もあれば外れる時もある
わ。現にさっき言つてた、あんたが生き返りたいと思つてなかつた、

つてのは分からなかったわけだし。つつても、あんたは人に比べて考えてつことがあからさまに顔に出るから、それで当たることが多かったってだけでしょ」

……言われてみれば、そうだ。そんなことができるなら、そもそもこんな会話になるわけがないんだ。

「なんだ……そうだったんですか。僕はてつきりよく分からない力で覗いてるんだと思ってましたよ」

「へえ、あんたは私がそんな悪趣味なことする奴だと思ってんのね。さつきは信用してる、なんつつつてたくせに。私今とっても悲しいわ」

「すいませんでした……って、いや、今のは以前の話ですからね？信用してますよ？ほんとですよ？」

加賀さんは既にぬるくなりかけているであろうお茶をすすった後、「はん、どうだか」と、でもやっぱりどこか楽しそうに言った。

僕も、せつかく淹れてくれたのだし、と思いお茶を口にする。うん、やっぱりぬるくなってるけど、僕はこれくらいの方が好きだし。そうやってお互い一息いれた時、僕には別の疑問が生じてきた。

「あれ？でも加賀さんが人の心を読めないのなら、どうやって烏文字さんの願いを知ったんですか？まさかそれも表情で、なんて言いませんよね？」

「言わねーわよ。そもそも烏文字ちゃんはあるたみてーに顔に出るタイプじゃねーし。私は最初っからつつつたでしょ？私がそれを聞いたのは、一番最初にあんた達と会った時よ」

と言うことは……あれか？あの頭に直接響いてくる声。あれでいやいや、あれができるようになったのだったってここを出た後だ。うつん？じゃあ一体どうやって……

「あの時って、そんなこと話してましたっけ？あの時は幽霊がどうとか魔王がどうか、そんな話しかしなかったと思いますけど」

「……あー、そうね、あれ会っ前だわ。実際会っ前にあんた達と電話で話したでしょ？あん時に烏文字ちゃんには死んでるけどもう

元には戻れねーこととか説明して　さすがに時間が戻るってことまでは言わなかったけど。んでもあの子その辺の理由なんかなんにも聞かずに、あんたのこと聞いてきたのよ。あんたは元に戻るのか、って。まあ、あんたは見ての通りだから、できるわよつつたら、それ以上なんにも聞かれねーし。そんなんだからあん時はあんた達が知り合いだと思ったんだけど、会ってみたらそんなことねーし。あれはほんとさっぱりだったわ」

あの時点で、もう？　加賀さんと電話で話した時なんて、僕とからすさんだって会ったばかりだぞ。

「あんたにも心当たりねーの？」

あれより前にあった事……僕があの人に怒られて、呆れられて、でもその後

「……あの人に頼んだんです。かあさんに　母に、伝えて欲しいことがある、って」

僕を心配するように、それを聞いてくれた。

「ふうん。それであの子は、ならいっそあんたを母親の下へ帰してやろうと思った、っての？」

「おかしいですよ。そんなことだけで、あんなことするなんて。でも……それ以外には何も……」

「さあねえ。何をもって大事とするかは人それぞれでもんだから、それでいいんじゃないの？」

「でもあの子は、彰君を手に掛けようとまでしたんですよ？　たったそれだけのことで、あの子がそんな……」

「あれに関してはあんたのためだけって訳じゃねー気がすつけど。でもまあ、結局その辺はあの子自身にでも聞かなきゃ分かんねーんでしょうね」

からすさん自身、か。でも、あの子はもういない。だから、確かめることなんてできない。

だけど、確かめることはもうできなくても、もしかしたら　僕がしたかったことは、それはまだできるかもしれない。

「……鳥文字さんは、優秀だったんですね？　その、加賀さん達から見て」

「そうね。言うなら　希代の天才、ってどこかしらね」

「だったら、それほどの才能があったのなら、きっとからすさんは今頃」

「あの、加賀さん言ってましたよね？　私達は死んだ人間を仲間にする、そういう仕組みがある、って。あれは　実際彰君だってそうなんだから、本当のこと、なんですよ？」

「そうやって再び生を受けたからすさんは、僕のことなんか知らないだろうけど、でも、からすさんがからすさんとして生きているのなら、僕は」

「言ったわね。あれは確かにその通りよ。私達は死んだ人間の中から適正のある奴を選んで仲間にする」

「だったら」

「でも、あの子は駄目だったわ」

「……どうして、ですか？　だって　天才なんでしょう？　それなら」

「私はあの時、自分で死んだ奴は問答無用で除かれる、とも言ったでしょ？」

「自分、で？　何を言っているんだこの人。だって、からすさんはそんなこと、していない。」

「からすさんは寝ぼけてて、だから、そこに誰かの殺意はないんですよけど、そんなの」

「あんた、本気であの子がそんな間抜けだと思ってるの？」

「……嘘だ。そんなのは嘘だ。あの人は、しない。あの人は強い人なんだから。それなのに」

「どう、して？」

「だから、あの子にしか分かんねーわよ」

「そんな憐れむような目を向けられて、僕はそれにどう応えればいい？　分からない。何も。」

「僕は……言いたいことが　あの人に言いたいことが、あるんです。言えたはずなのに、言わなかったから、伝えられなかったことが。だから僕は、それをどうしても、言いたい、のに……」

もう、叶わない。その機会は永遠に失われてしまった。僕と、あの人自身の手によって。

「なら、言えはいんじゃないの？」

うつむかせていた顔を上げる。交差した視線の先、加賀さんの目が憐れみから楽しんでいるようなそれへ変わる。

「あんたが知る人間の中でただ一人　かどつかは知らねーけど、少なくとも一人は、この世界のすべてを思い通りにできる人間がいんでしょ？　そいつに頼んでみりゃいいんじゃないの？」

僕は、笑った。最初は抑えようとしたけれど、でも抑えきれずに、声を上げて笑った。

まったく、この人は本当に、意地が悪い。

「僕があの子の力を求めた時は、僕の敵になってくれるんでしょ？　ね？」

「当然でしょ。私の家族よ？」

今はもう真剣に見つめる僕に、彼女もまた真剣な顔をして、そう告げた。

「それを聞いて安心しました」

加賀さんがまた、つまらないとこぼして、楽しそうに笑う。それを見て僕も、今度は無理矢理に、笑った。

「んで、もう大概話した気がすんだけど、まだなんか聞きてーことあんの？」

「……傘、貸してもらえませんか？　今日これから雨降るでしょう？」

もうここを辞する。加賀さんは僕のその意図を汲んでくれて、「構わねーわよ」と言いながら立ち上がった。それを見て僕も立ち上がり、この部屋へ来た時と同じように案内する彼女の後を付いて行き、玄関にたどり着く。

「どれなら借りても大丈夫ですか？」

玄関の傘立てに十本ほど差さっている傘を前に、僕がそう聞くと、
「こいつがいいわ」

加賀さんがそこから婦人用の傘　恐らくは加賀さんの　を一
本抜き取り、僕に差し出した。

別に他の真つ黒なやつとかで良かったんだけど　そんなことを
思いながらも、借りる身分としてはこれ以上厚かましいことは言え
ず、素直にそれを受け取り礼を言くと、

「それ、気に入ってんのよね」

そんなことを、言われた。

「……はあ、なら　ええと、特に大事に扱いますね」

他のにすればいいのに、と言いかけて、でもこの傘は加賀さんが
自分で選んだことを思い出して、だから、この人の意図はよく分か
らないけれど、これを使わせてもらうことにした。

「今日はありがとうございました。では、失礼します」

最後に加賀さんにもう一度礼を言ってから頭を下げて、ここを出
るために背を向けた時

「気に入ってつから、さつさと返しに來いっつってんのよ。今度は
彰と一緒に待っててやつから」

僕は、振り向く前に笑ってしまった顔を直そうとしたけれど、で
もこれは当分戻りそうもなかったから、

「はい、すぐ返しに來ますね」

そのまま振り向いて、なんだかいつもと違う　照れくさそうに
している加賀さんにそう言ってもう一度頭を下げた後、僕は今度こ
そ加賀さん宅を出た。

そうだな。あの人が意地悪だっというのは、保留かな。

あれから、当然と言えば当然に、何も変わらない日々が続いている。

今日もいつも通りの早すぎる登校の後、いつも通り他にやることがないので、予習をしていた。

僕が登校してから既に結構な時間が経っているので今の教室には多くのクラスメイトがいるけれど、僕の席は窓際の最後尾、それも一つだけ浮いた小島のような席なので、周りは大して気にならない。「いよう、ラビ。お前相変わらず朝だけは真面目っ子だよな」

関係の無い雑談は気にならなくても、自分に向けられた声まで無視するつもりはないので、僕は勉強の手を止め、声のした方を見ながら答える。

「朝だけ、はいらないよ。僕はいつだって　なにしてんの？」

顔を向けた先には僕と同じクラスの二人。学級委員の南山君と、僕の家のお向かいさん、霧威家の長男である智宏君が、それぞれ持っていた椅子と机を僕の席の隣に置いた。

「權谷センサーに呼び出されてさ、教室まで持って行って言われたんだよ。そしたら日頃の行いが良い俺は途中で霧威に会って、こうやって手伝ってもらったってことだな。センキュ霧威！」

「だったらなんで智君が机持ってたのさ……」

「教室に来るついでだったからだ」

重い方を持つ理由になってないじゃない。智君はかあさんほどじゃないけど細かいこと気にしないからなあ。

「はあ……それで、なんでこんなものこんな所に置くのさ。邪魔なんだけど」

「おいおいおい。そんなこと言っているのかラビィ？　こいつをどかしたらお前、すぐにその言葉を後悔することになるんだぜえ？」
「朝からテンション高いなあ。なんだっての？　一体」

「転校生が来る、そうだ」

「転校生？　こんな時期に？」

二学期が始まって一ヶ月なんて半端な時期に転校とは、余程の事情でもあるのだろうか。

「し、か、もだ。ただの転校生じゃない。び、じ、んの転校生なんだぜ？　見たわけじゃねえけど、もう転校生と会った權谷センセーから聞いた話だから、間違いねえよ」

ほったらかしにされたことを微塵も気にした風もなく、変わらないハイテンションで攻めてくる南山君に、僕はいたっていつもと変わらないテンションで返事をする。

「だったらこれ、自分の席の隣に持っていけばいいのに」

「そういうわけにもいかねんだこれが。そりゃ俺だってそうしたいのは山々なんだぜ？　だが、俺の学級委員としても矜持きようじがそれを許さねえのさ！」

「權谷先生がここに置けと言ったらしい」

「イヤア！　ラッキイボオウイ！　ラッキイボオイラビィ！」

「鬱陶しいなあ。こういう時いつも思うんだけど、南山君ってなんで学級委員なんかやってるの？　絶対そういうのに向いてるタイプじゃないよね？」

「うわなんってこと言いやがんだよ。俺はどんな時でもこのクラスの平和について考えてるってのに」

「考えてるだけでしょ」

「考えるのは上の仕事、実行するのは下の仕事。オオケエイ？」

「オツケイ、じゃないよそんなんの。自分で全部やってよ」

南山君はこれに対して特に何かを答えることはなく、

「んじやな。転校生をエロい目で見んなよ」

と言つて軽く手を挙げて、自分の席へ戻っていった。それと同時に、智君も自分の席　僕の前の席に着く。

それで話は終わったと思ったので、僕は予習を再開しようとして教科書に向かい、でも智君の「遙、お前　」という声にまた顔を

上げると、

「失恋したのか？」

目の前の智君が、大真面目な顔をしてそう言った。

僕らは無言で見つめ合う。でもすぐにその均衡は崩れた。僕が爆笑してしまったから。

「なんだ、やっぱり違うのか」

智君が笑い続ける僕を見て、拍子抜けたような、でも心配するような顔になる。

ただ、僕が笑ったのは見当違いなことを聞かれたからではなく、言われた瞬間　　そうなのかも、と僕自身が思ったことに対してだったのだけど。

僕は誰かに恋心を抱いたことすらないから、正直失恋なんてどういふものなのかよく分からない。

でも、これはきつと、そういうのじゃない。

「どうしたの？　急に。智君、変なものでも食べたんじゃないの？」
ようやく笑うことを抑えることができた僕は、智君に失礼なことを聞いた。それに智君は平然と、

「食べてない。そういうのはむしろお前の方じゃないのか？　お前、最近おかしいぞ」

今の僕には耳が痛いことを言ってくれる。

「そうかな？　でもそれでさつきはあんなこと聞いたんだ。いきなり何かと思っただよ」

「学校に来る時に茜莉せんりと紅莉こうりが言ってたんだよ。最近遙の様子が変じゃないか、もしかして失恋でもしたんじゃないか、遙だってお年頃なんだしそれくらい、だとか。歳はあいつらだって変わらないはずなんだが。女の考えることはよく分からん」

「茜ちゃんと紅ちゃんまで僕が変だなんて言ってるの？　心外だなあ」

「それはおかしくないだろう。どう見たところで今のお前は変だ」
「失礼だなあ。南山君はなんにも言わなかったじゃない。智君達の

気のせいだよ」

「付き合いの長さが違う。少なくとも俺達には、今のお前がいつものお前には見えない」

普通にしてる、つもりなんだけどな。やっぱり、そう簡単にはいかないか。

「……敵わないね。智君にはさ」

諦めて、思わず薄く笑って智君を見る。智君は、変わらない真剣な表情。怒っているわけじゃなくて、心配してくれているから。

「何があつたのか、聞いていいのか？」

「いいけど、うまく説明できる気がしないんだよね。それに、それで困ってるわけじゃないんだ。もう全部終わった後なんだよ。だから今は 時間が解決してくれるのを待つ、って言うのかな。そういう状態」

「それでも何か、俺にできることはないのか」

「そう思ってくれるだけで十分すぎるくらいなの。それにさ、良いことだつてあつたんだよ？ なんて言うのかな 僕に弟、のような子ができたんだ」

「……今日^{きょうこ}子さん、再婚するのか？」

また、僕は無言で見つめ合つて、すぐにまた、僕は爆笑した。たっぷり一分くらいは笑つてたんじゃないだろうか。腹筋が痛くなるくらい笑つてからようやく、僕は智君へ向き直ることができた。「いやー、今日の智君は面白いなあ。こんなに笑つたの久しぶりだよ」

「……お前、感じ悪いぞ」

「あはは、ごめんごめん。でもさ、今のは智君が悪いよ。智君だつてかあさんがそういう話するものすつごく怒るの知ってるでしょ？ 理由はいまだに分かんないけど、それはないよ」

「お前が弟ができたなんて言うからだ」

「僕は、のような、って言ったじゃない。戸籍上でどうこうってことじゃないよ」

「じゃあ、お前がおかしい原因は今日さんのことじゃないのか」
「そりゃそうだよ。かあさんは再婚しないんだからさ。それどころかいたっていつも通りだよ」

はあ、と智君がなんだかどつと疲れたようにため息をつく、それとほぼ同時に予鈴が鳴り、教室の扉が開かれた。

「おはよう、生徒諸君。席に着きたまえー」

こちらもいたっていつも通りの、担任の櫛谷先生が教壇に立ち僕らを見て頷いている。この人なんでいつも予鈴と同時に教室に入ってくるんだろう。廊下で予鈴が鳴るのを待ち構えてるのか？

僕ら生徒が日直の号令による起立、礼、着席をすませると、櫛谷先生は嬉しそうに僕らを見回して、

「早速だが、君達に良い知らせだ。今から君達の新しい友人を紹介する。入ってきたまえ」

そう言つて、廊下に向かつて手招きをする。

転校生が来る。そういえばそんなこと言っていたな。隣に置かれた机を見ながら南山君の話を思い出して、そして、櫛谷先生の隣に立つ転校生を見て絶句した。

確かに、すごい美人、だな。

どう見ても男だけど。

あの人をエロい目で見るのはかなり難しいなあ。後ろからだからよく分からないけど、南山君も驚いてるみたいだから、彼も知らなかったんだろうな。

そうか、櫛谷先生は女性だしな。いやでもなあ、それでも男を美人とは思わないと思う。

まあ、どうだっていいことなんだけど。

智君にはもう大丈夫、みたいなことを言っただけ　僕は今日もまた、ここに来ている。

まるで頭に入ってこない授業がすべて終わり放課後になると、僕はまっすぐに駅へ向かった。

家に帰るためではなく、あの人と初めて出会ったあの長椅子に座るために。

こうしてあの時と同じ場所で、あの人が腰掛けていた長椅子の端を、見つめている。はたから見たら危ない人かもしれないけれど、知らないよ。気付いたらこうしてるんだから。

これで四日連続か。

ここに座っている間、僕が考えることは一つだ。

あの人がどうしてそうしたのか　ということではなく、あの人は　もしもの話だけど、僕があの人を止めたら、それをやめてくれただろうか、ということだ。

そんなこといくら考えたって意味は無い。そんなことは分かっている。だけど……

あの人は最初から僕のために行動してくれて、そうだったからきつと、僕のわがままを受け入れてくれたんだ。

なら、そんなもの関係なければ？　そんなものとは何の関係もない僕のわがままは、聞いてくれるだろうか。

彰君は僕らのわがままを聞いてくれた。なら、からずさんも僕らが頼めば　それとも、それでも……？　その立場が僕なら……

答えは出ない。それを知る人は、もういない。

……　一体何がしたいんだろうな、僕は。こんなことをして、どうなるんだよ。

こんなことを繰り返している間に、今日も空は赤く染まり始めた。この四日間、こうなってからようやく重い腰を上げられる。いい

加減帰らないと、かあさんが帰ってくるまでに夕飯が作れないから。それに、明日は学校が休み。それを利用して加賀さんに借りた傘を返しに行く。いつものような早朝ではないけれど、早く帰っておくに越したことはない。

あの時はすぐに、と言ったけれど、帰り道それでも平日は難しそうだなどと考えていたら、帰宅後加賀さんから電話をもらい五日後つまり明日来いと言われたのだ。学生の僕に気を使ってくれたのだろうか。あの人はあれで

思い出すと、思わず顔がほころんでしまった。

「さて、帰ろう」

一人でそう呟いて、足元に置いてあった鞆を手取る。

振り向いて　　そう言われたけれど、振り向いてばかりはいられないよね。

ちょうど電車がホームに入ってきて、それが止まるのを待つてから、僕はドアの前に立った。

ここはホームの最先端、降りる人も乗る人も、改札口から遠いこんな位置を好んで選ぶ人はいなかったので、僕はドアが開いてすぐ電車に乗り込もうとして、ただどでけなかつた。

僕がホームで立ち尽くしている間に目の前で音を立ててドアが閉まり、電車は僕を乗せないまま発車してしまった。

背中、心臓の裏側に鋭利なものを突き付けられている感触。懐かしさすら覚える不快な感触。ついこの間のことなのに、もう遠い昔のことのよう。

相手は、知らない人間だった。

電車のドアのガラスに薄く映っていたのは、見覚えの無い女。反射的にもしかして、と思ったあの女子高生でもなかった。

なんだっていうんだ？

また人違いなのか。それとも本当に僕を狙ってきたのか。狙いが僕だっていうなら……そうだな　彰君達のことを知っている普通の人間がいることを良しとしない存在がいる、とかかな？　加賀さ

ん達だとは思わないけど、あの人は彰君を問答無用で殺そうとした人達がいると言っていたし、その辺りで

どうでもいいよ。そんなことは知ったことじゃないんだ。

かあさんは僕が帰っていることを望んでる。そして、僕がそうすることが、からすさんの願い。明日、彰君と加賀さんが僕が来るのを待つてる。だから

相手が誰で理由がなんだろうが、殺されてなどやるものか。

「ねえ、君は」

話しかける素振りを見せて相手の気を逸らす。成功したかどうかなんて分らない。こっちは後ろを取られているから相手の様子なんて知りようがない。

だから即座に動く。からすさんと一緒に戦った時の感覚が、僕の意識を飛び越して、体を駆動させる。

刃を押し込まれても致命傷を避けられるように右に身体をひねりながら、その勢いを利用して拳の甲で相手を打つように腕を振る。

そして、僕の放った起死回生の攻撃は 相手がわずかに上体を反らしたことでいともたやすく空を切り、襲撃者は回避と同時に僕の足を払った。自らバランスを崩していたような状態で支えを失えば、派手に転倒するに決まっている。

倒されながらも僕は、手はあえて地面に着かず匍で体、空いている腕で首を守り、起き上がりつつ後ろに下がろうとして腰を浮かせて 呆気にと取られて、もう一度尻餅をついてしまった。

振り向いて、はつきりと視界に入った襲撃者が手にしていたものが どう見ても定規だったからだ。

…… なんなんだこれは？

この人が定規の角を僕の背中に押し当てていたってこと、なのか？ まったく意味が分からないぞ。

それに、この人もよくよく見れば女子高生だ。しかも僕と同じ高校の。ということは……この人は僕のことを知っている、のだろうか？ だとして、その上僕に恨みか何か持つてるんだとしても

いきなり背後から定規を突き付けてくる理由なんて見当も付かない……胸のリボンが緑色ってことは、この人二年生なんだな。ううん……やっぱり知らない、よなあ？

「あの」

「まさか、また腰が抜けたなんて言わないでしょうね」

いや、別に立とうと思えば立てるけど。でもなんか機を逸したというか　また？

見知らぬ上級生は「男のくせに」　と言いかけてから、突然何かに気付いた様に、はっ、と息をのむと、不思議そうに見上げているであろう僕に、

「ごめんなさい……私、なんであんなこと……気付いたら、なんて言うのか　はしゃいでしまっていて……本当にごめんなさい……立てる？」

こつちが申し訳なくなるくらい恐縮しながら謝罪した後、手を差し伸べてくれた。

僕は差し伸べられた手をしばらくの間じっと見つめて、だけどその手を取ることはせずに、もう一度視線をこの上級生と交わらせる。どう考えてもそこに行き着いてしまうある結論。あり得ないその答えを、僕は口にする。

「からすさ……なの？」

「……誰だと思っていたの？」

誰、って言われても……見ず知らずの人だよ。そんなの。からすさんだと思った上で殴るわけないだろ。

「だって……その、全然……違う、よ？」

顔のつくりも、髪の色も、体型というかスタイルも、からすさんとこの人は似ても似つかない。

「あなた、数日前に加賀さんを訪ねたのでしょうか？　その時に聞かされていないの？」

「加賀さんは……からすさんはもう、戻らないって……」
これを聞いてからすさん　らしき人は呆れたように、

「あの人らしいと言えばらしいけれど……」

そう嘆息交じりに呟いて、眉間にしわを寄せている。

「……どういう、こと？」

「体は変わったけれど人格は同じ、ということよ。加賀さんが、死んだ人間を自分達の仲間にすることがある、と言っていたでしょう？　今の私はそうなって、彰と一緒に加賀さんの家でお世話になっているの」

「え、でも、からすさんはそういうのにはならなかった、って加賀さんが……からすさんは、その……自分で、だからって……それに、それならなんで、僕の　僕のこと、覚えてるんだよね？」

あの仕組みで仲間に加わったとしても、四日前　僕にとつての四日前に死んだからすさんは、僕のこととは知らないはずだ。それなのに

「すべて覚えている。あなたのことも彰のことも、あの日あったすべてのことを。だから私は　今の私はここで死んだ私が生まれ変わったわけではないの。あなたと同じように？　最後のあの時？　からずっと続いて、ここにいるのよ」

それってあの　振り向いて、と言っていた？　あの時？　だよね。でも、じゃあ

「つまり、世界が元に戻る前に一度仮の領域に移されたところまではあなたと同じ。でもその後、戻った後は、あなたは今までと同じ領域に戻されたけれど、私は別の領域を　死んだ人が生まれ変わる時そうなるのと同じように、？　混沌の御使い？　としての領域を新しく与えられたの。それで……分からないわね。私は清寺さんのようには説明できないから」

疑問符を浮かべている僕を見て説明してくれたのだろうけど、彼女の言う通り分からない。そもそも、あの人の説明だって僕はよく分からなかったし。

でも　確かに分からなかったけど、でも、あれがおかしいってことだけは分かる。

「だったら、さ、加賀さんはなんであの時、戻れるのは一人、なんて言っただの？」

「あの人は……底意地が悪いところがあるから、そういう言い方をしただけ。私は元通りにはなっていないでしょう？　以前と同じ人間として生きているわけではないもの」

そう、か。確かにそうだけど。なら、だったら、何度見ても見た目は全然違うけど

「じゃあ、ほんとに……ほんとにからすさん、なんだよね？　からすさんが、今ここにいるんだよね？」

「ええ」

そう言っただけの姿はやっぱり見知らぬ人だけど、でもその気配、その雰囲気は間違いなくからすさんのそれで　からすさん、だ。からすさん。からすさんからすさんからすさんからすさんからすさんからすさんが　ここに、いる？

「……からすさんは、加賀さんに何を叶えてもらったの？」

あの人が言っていたのは　役に立ったら願いを叶えてやる、だ。なら、あの人はからすさんにだってそれを聞いたはず。だけど、この人の願いは最初から一つで、だから僕がこうしているのなら、だったら……

からすさんは何も言わない。目を閉じて、深くため息をつく。

僕の願いは　でもこの人はそうすると決めたのに、それを僕が勝手に　だから、ここに……

結局僕はまた、僕のわがままで、この人を犠牲にしたんだ。

そう思っても、僕はどこまでも自分勝手に、だから、言いたいことがあって　僕はこの人に言いたいことが、あったはずなのに、それなのに全然それが、出てこない。声にならない、どこるか頭の中で言葉にすらなってくれない。

僕はただ、泣くことしかできなかったから。

うつむいて、声にならない声を押し殺して歯を食いしばる。ただ、抑えられない。

「泣くようなことではないでしょう」

彰君にはしたいようにすればいいって言ったのに。やっぱりからすさんは容赦がない。そんなこと言われても、僕には

「……無理、だよ」

座ったままもう一度顔を上げて、崩れそうになるのをこらえて、なんとか言葉をつむぐ。

「だって……だって、嬉しいから」

これを聞いて、この人はどう思うのだろう？ そう思っても、とめることができない。

「僕はからすさんが生きていることが嬉しい。からすさんが望んでなくて、それをもう嫌だって思ってた、全部僕のせいであんなに分かってるのに、それなのに、それでも、嬉しいんだ」

この人を犠牲にしたと知った後でも、どうしても、僕はそう思わずにはいられない。

「僕は、ほんとにわがままばかりだけど……だから、無理だよ。嬉しいんだから。からすさんがここにいることが、嬉しいんだから。」

僕は……嬉しい……うれしいよ……」

もう、無理に抑えることもできなくなって、僕は声を上げて泣くからすさんは一瞬だけ困ったような顔をして、でもすぐに僕の目の前に屈んで、言った。

「ありがとう」

それは、僕がからすさんに言いたかった言葉で、だけど、やっぱり僕はそれを言えなくて、されるがまま、彼女がポケットから取り出したハンカチで顔を拭われていた。

そうやって小さな子供のように扱われている間、僕はそれが情けないとか、恥かしいなんてことは思わずに、ただ

からすさんが、初めて笑ってくれた そんなことを、考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4920z/>

十二世界の戦後史

2011年12月16日19時52分発行